

630-1



1200701563329

321

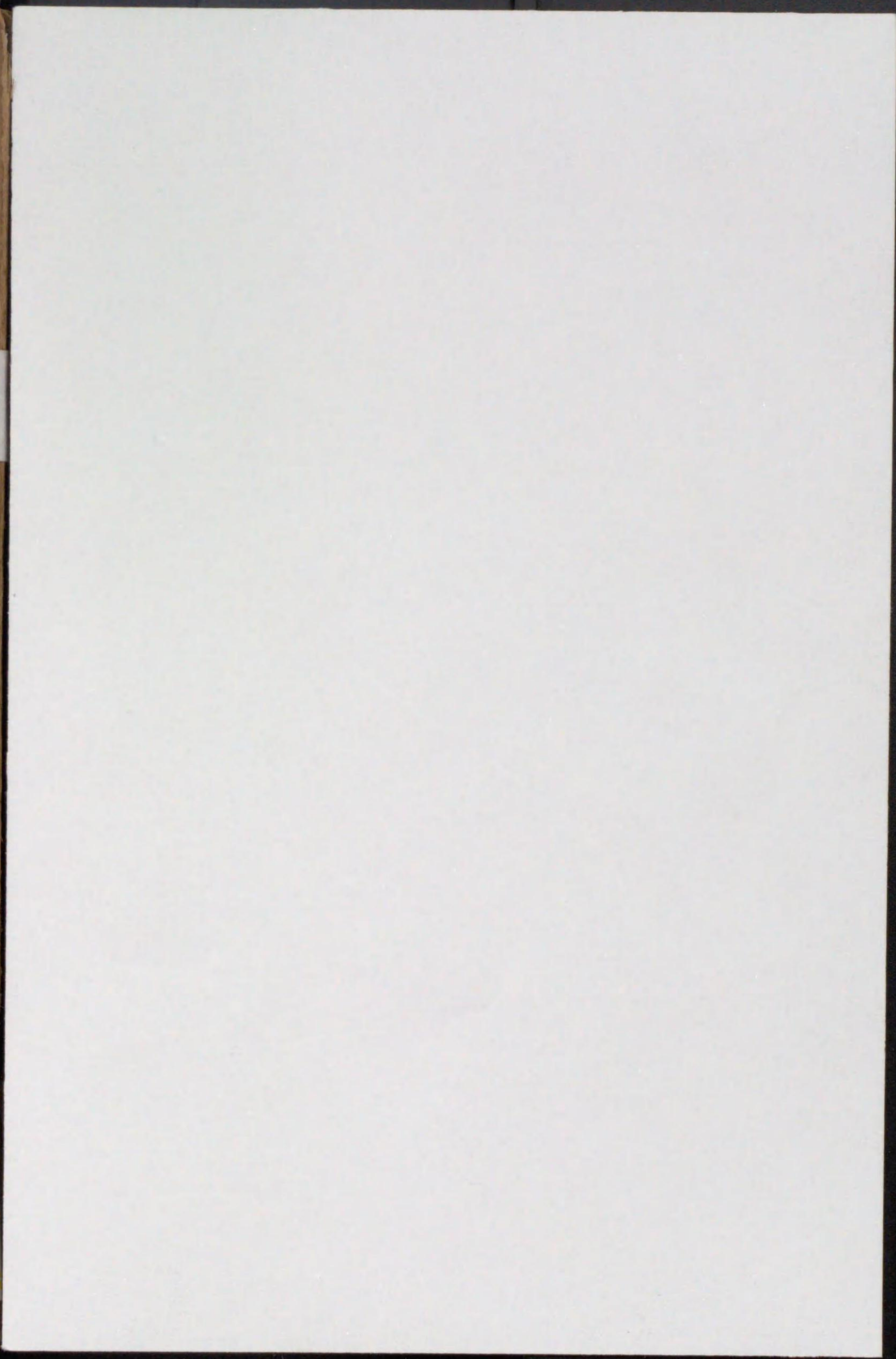
寺島名作文庫

その前夜

ツゲルネー作

米川正夫訳

春陽堂版



世界名作文庫

—321—

その前の夜

ツゲネルー

米川正夫 譯

春陽堂

630

1



I種

W

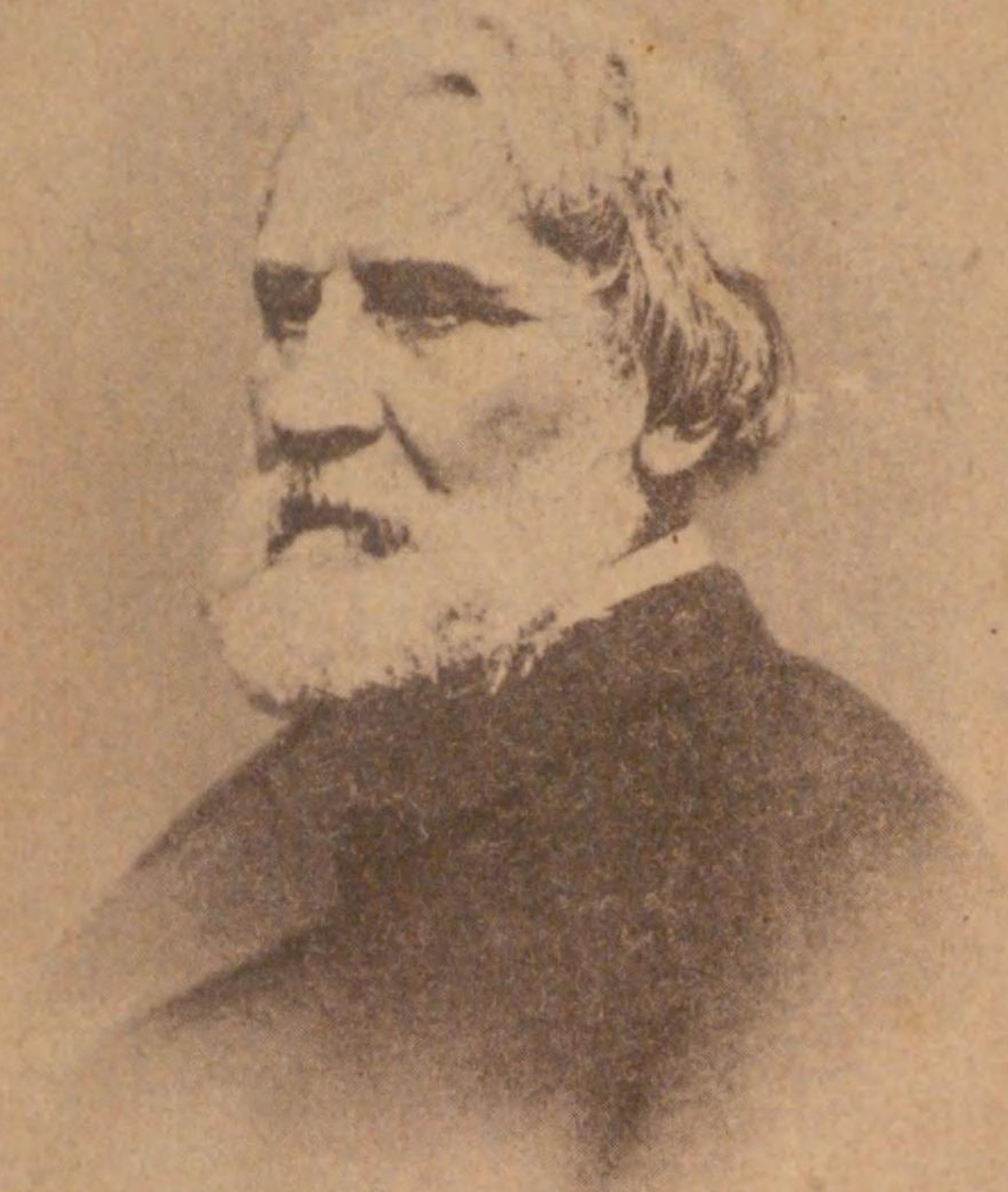


1200701563329

序

數多いロシア文豪の中でも、最も早く歐米諸國にその名を知られ、その價値を認められたのは、イブ
ン・ツルゲーネフである。トルストイは主として宗教的思想家として、世界の注意を喚起したに過ぎず、
ドストエーフスキイに至つては全く理解されなかつた時代に、ツルゲーネフの小説は殆ど全部翻譯され、
愛讀されたものである。この意味に於いて、彼はロシア文學の存在を世界の讀書階級に確認せしめ、ロ
シヤそのものに對する興味を喚起した第一人者として、忘れることの出来ない功勞者である。日本でも
英米の先蹤に倣つて、一時ツルゲーネフの黄金時代を現出したくらゐである。その大小の作品は先を争
つて多くの人々に翻譯された。しかしその當時はロシア文學を直接原語について研究し紹介する人が極
めて寥々たるものであつたので、二葉亭の『浮き草』(ルーデン)その他二三を除くと悉く英譯もしく
は獨逸譯を仲介としたもので、そのためにツルゲーネフの藝術の有する微妙な香氣や、隠れた意義や力
が充分に傳へられないで終つた憾みがある。

その中に、熱し易くして冷め易い日本の讀書界は、幾ばくもなくしてこの文豪に對する興味を失ひ、
今ではその名の引用されることさへ稀になつて了つた。ツルゲーネフには深刻味がない、強烈な迫力が
ない、彼の作品は單に美しい詩的情趣によつて青年子女を悦ばすセンチメンタリズムに過ぎない——か
ういふ皮相な概念が人々の頭に植ゑつけられたらしい。けれどこれは謬れるも甚だしいもので、ツルゲ
ーネフは最も高い意味に於ける詩人であり、繊細かつ鋭利な人生の觀察者であり、深遠な思想家であり、
天衣無縫ともいふべき完璧な表現の所有者である。たゞ彼が稀に見る純眞な藝術家であるがために、露
骨な自己暴露や分析解剖を避け、すべての思想や感情を美しい調和の中に溶かしてゐるので、洗練され



原 著 者 像

序

た玉の如き形式を別にしては、その中に含まれた意味ふかい暗示を感得することが出来ない。

わたしはこの意味に於いて、ツルゲーネフをもう一度たゞしく味はひ理解するために、原語から直接なされた翻譯の完成を高唱したい。わたしは『父と子』『處女地』において不完全ながら、とにかくこの念願の一端を果たした。こゝに讀者に薦めんとする拙譯『その前夜』は、この繼續事業の一連鎖と考へたい。

この小説は、ロシア社會組織の痼であつた農奴制度撤廢の前夜^{イッ}における、自由と光明に對する期待と、眞理の爲めの男々しい鬭争的精神を、祖國の獨立運動に一身を捧げたブルガリヤの志士インサーロフと、その意氣と熱とに共鳴して、家を棄て親を棄てて異郷にさすらふ少女エレーナに具象化したものである。この小説が公けになつたのは一八六〇年であるが、丁度その翌年アレクサンドル二世によつて、農奴解放令が發布された。この事實はツルゲーネフの時代的空氣に對する、敏感さを證明するものと云つてよからう。

この小説が世に現はれたとき、若い大學生や、文士、學者などの間では、嘖々たる好評を博したけれど、社會の上層に屬する人々は、この作品に現はれた革命肯定の氣分に驚かされ、少からず不安を感じさせられた。「この『前夜』は決して『明日』を見ることがないだらう」といふ警句が行なはれたのを見ても、その底に隠れた不安と恐怖とを想像することが出来る。道徳的側面から見た非難はもつと手きびしがつた。いはゆる良家の父兄は、戀愛と結婚との問題を勇敢に躊躇なく解決したエレーナを、穢ららしい不良少女よばはりしたほどである。

しかしトルストイは、この作をもつて『貴族の集』より上に位するものとし「當代においてこれだけの小説を書き得るものは、ツルゲーネフを置いて何人もない」と激稱した。

その前夜

千八百五十三年のある暑い夏の日の事である。クンツォヂ(モスクワ附
近の別荘地)からほど遠からぬモスクワ河
の河ぶちに生えた、高い菩提樹の木蔭に、二人の青年が草を敷いて寝そべつてゐた。一人は見かけたこ
ころ二十三四といふ年頃で、背が高くて色が浅黒く、少し尖つた鋭い鼻に、秀でた額をして、横に廣い
唇の上には控へ目な微笑を浮べてゐたが、仰向けにひっくり返つて、小さな灰色の目を心持ち細めなが
ら、物思はしげに遙か向かうの方を見つめてゐた。

いま一人は腹匍ひになつて、薄色の髪が房々と渦卷いた頭を両手で支へながら、やはりどこか遠くの方
方を眺めてゐた。彼は友達より三つ年上だつたが、見かけはずつと若々しかつた。鼻髭はやつと覗き始
めたばかりで、頤には薄いうぶ毛がもや／＼してゐた。爽やかな色をした圓つこい顔のデリケートな輪
廓にも、やさしい茶色の目にも、美しく反つた唇にも、白い華奢な手にも、何となく子供々々した愛く
るしさと、人を牽き付けるやうな優美さが感じられた。全體に彼の體は、健康の興へる快活な幸福感と、
若々しさに息づいてゐた——それは若人にもみられる暢氣さであり、思ひあがつた得意さであり、愛
すべき我がまゝ氣分である。人が自分に快く見とれてゐることを心得た子供のやうに、彼は目を動かし
たり、にこ／＼笑つたり、頭を両手で支へたりした。上つぱりのやうな、たぶ／＼した白い外套を着
て、水色のボヘミヤン・ネクタイを細い頸に巻き、ぐにや／＼になつた麥藁帽子を傍の草の中に抛り出

してゐる。

これに比べると、もう一人の方はまるで老人のやうな感じがした。その角張つた恰好を見たら、彼がいゝ氣持ちで自然を享樂してゐるなどとは、恐らく誰も考へつかないだらう。彼は窮屈さうに寝そべつてゐたが、上が開いて下の窄まつた大きな頭は、落ちつき悪くその長い頸の上に載つかつてゐた。かうした不器用らしさは彼の両手や、短い黒のフロックにぎゆつと締めつけられた胴や、まるでばつたの後脚のやうに膝頭を押し立てた、長い足などの恰好にも現はれてゐた。それにもかゝはらず、彼が良家の弟であるといふことは、一目でそれと認められた。上品な教養の徴しるしは、その不恰好なからだ全體に窺うかがはれた。醜い上にやゝ滑稽でさへある彼の顔は、思索の習慣と善良性を現はしてゐた。彼はアンドレイ・ペートロギッチ・ベルセーネフといつた。そして薄色の毛をした仲間の青年は、パーゼル・ヤーコヴリツチ・シュービンと呼ばれてゐた。

『どうして君は僕みたいに腹匍ひにならないんだい？』とシュービンは口を切つた。『この方がずつといゝよ。殊に足を上げて、踵と踵をぶつつけると、實に素敵だよ——こんな風にさ。草が鼻の先にあるだらう。景色に見飽きたとき、太つちよの甲蟲が草の葉を匍ひ昇つたり、蟻が忙がしさうにちよろ／＼してゐるのを見るんだ。全くこの方がいゝよ。ところが、君は今まるで偽古典的ポーズを取つてゐるが、まるでバレエの踊り子が、張りこの岩にもたれた恰好にそつくりだよ。君はいま休息の權利を完全に領有してゐるつて事を、思ひ出さなくちやいけないよ。冗談ぢやない。いくら大學を三番で卒業したからつて、

ちつとはゆつくり休息するがいゝやね。さあ！ 先生、どうか緊張はいゝ加減になすつて、手足をお伸ばしなすつたら！』

シュービンはこれだけのことを半ば物憂げな、半ばふざけたやうな調子で、聲を鼻にかけながら云つた（甘やかされた子供は、菓子を持つて来てくれた友達に、よくこんな口のきゝ方をするものである。）そして返事を待たずに、また言葉を續けた。

『僕は蟻だとか甲蟲だとか、そのほか色んな昆蟲諸君を見ると、その驚くべき眞面目さに感心させられちやふよ。まるで彼等の生活がなにかの意味でも持つてゐるやうに、恐ろしく物々しい面つきをして、あちこち駈け廻つてゐるんだからな！ まあ、考へてもみ給へ、生物界の王であり、萬物の靈長である人間が、彼等を觀察してゐるのに、先生達はそんなことを頭から問題にしてゐやしない。それどころか、悪くしたら、蚊が萬物の靈長の鼻にとまつて、それを自分の食ひものにし始めるんだからな。どうも癪な譯さ。ところが一方から見ると、彼等の生命だつて、何もわれ／＼の生命に劣る譯はない筈だ。われわれが勿體ぶるのを自認してゐる以上、先生たちだつて勿體ぶつてならんといふ法はないぢやないか。さあ、どうだね、哲學者、この問題を解いて見ないか！ なんだつて黙つてゐるんだい？ おい？』

『なんだつて……』ベルセーネフはびくつとしてかう云つた。

『なんだつて！』とシュービンは鸚鵡返しに云つた。『君は友達が高遠な思想を述べてゐるのに、まるで聞いてゐないんだね。』

『僕は景色に見とれてたんだよ。見たまへ、あの野原が太陽を受けて、焼けるやうに輝いてゐる壯観を！』(ベルセーネフはやゝ舌纏れのするやうな口のきゝ方をした)。

『素晴らしいカラーを使つたものだ。』とシューピンは云つた。『やつぱり自然だな！』

ベルセーネフは頭をひねつた。

『君の方が僕なんかより、もつとくかういふものに感心しなけりやならない筈だよ。これは君の領分だよ。君は藝術家だからね。』

『いや、こりや僕の領域ぢやないよ。』とシュトピンは抗議して、帽子を阿彌陀に被つた。『僕は、肉屋さ。僕の仕事は肉だ、肉づけた。肩だ、足だ、手だ。ところが、こゝにはてんで形といふものがない。完成みがない。四方八方に擴がつてとり止めがないぢやないか……どうしてあれが擱まへられるんだ！』

『だつて、こゝにも美はあるよ。』とベルセーネフは云つた。『ときに、君はあの浮き彫りを仕上げたかね？』

『どんな浮き彫りをさ？』

『山羊を連れた子供だよ。』

『へつ！へつ！へつ！』とシューピンは歌でもうたふやうに叫んだ。『僕は本物の製作を見て、老大家や古代の彫刻を見て、あんなやくざな代物に愛想がつきたから、叩き毀して了つたよ。君は僕に自然を指さして、こゝにも美があると云ふが、勿論美はいたる所にあるさ。君の鼻にだつて美があるさ。』

しかし、美といふ美を一々追ひ廻す譯にはゆかない。昔の彫刻家だつて、そんなものを追ひ廻しやしなかつた。美は自然と彼等の作品に来て止まつたんだ。一體どこからやつて來たのか知らないが、天から降つても來たんだらうよ。彼等は全世界を自分のものにしてゐたのだ。けれど、われ／＼風情はさう間口を擴げる譯にやゆかない。さうは手が届きかねるよ。われ／＼はたゞ一所に針を下ろして、ぢつと張り番してゐるんだ。美が食ひついてくれりや萬歳だし、食ひつかないや……』

シューピンは舌をへろりと出した。

『ちよつとちよつと待ち給へ。』とベルセーネフは云ひ返した。『そりや逆^{バドックス}語だよ。もし君が美に共鳴しなかつたら、どこで美に出遭つても、必ずそれを愛するやうにしなかつたら、君の藝術には到底美が與へられないよ。もし美しい景色や美しい音楽が、君の心に何ものをも囁かなかつたら——いや、君がそれ等のものに共鳴しなかつたら……』

『ちよつ、この共鳴先生！』とシューピンは吐き出すやうに云つて、われと、わが新造語に笑ひ出した。ベルセーネフは考へ込んで了つた。

『いや、君』とシューピンは言葉を續けた。『君は賢人の哲學者で、モスクワ大學を三番で卒業した秀才なんだから、君と議論を闘はすのは恐ろしいよ。殊に僕みたいな中途退學生にとつては尙さらだ。しかし僕はかう云ひたいんだ。僕は自分の藝術以外には、たゞ女性の美だけを愛するよ……若い娘の美をね。が、それもある時期以來の話しだ……』

彼は仰向けにひっくり返つて、両手を頭の下に支つた。

やゝ暫く沈黙の裡にすぎた。暑い眞晝の静寂が、輝きながら寝入つた大地の上に、重々しく垂れかゝつた。

『ときに女といへば、』とまたシューピンが云ひ出した。『なんだつてあのスターホフ老人を抑へつけるものが、誰一人ゐないんだらう？ 君はモスクワで會つたかい？』

『いや。』

『老人すつかり氣がちがつて了つたんだ。毎日朝から晩まで、アウグスチーナのうちに坐り込んでる。退屈で退屈で堪らない癖に、やつぱりじつと坐り込んでゐるのさ。お互ひにまじく顔を合はせて、ばかしくなるくらゐだ……見てゝもいやになつて来るよ。まあ、考へてもみ給へ！ あの老人くらの家庭に恵まれてる人間はない筈なのに、それでもアウグスチーナがなくちや駄目なんだ！ 僕はあの女の家鴨面ぐらゐ、いやなものはないと思ふよ！ この間僕はいつのカリカチュアを、ダンタン好みで作つてみたが、かなり巧く行つたよ。君に見せようね。』

『ところで、エレーナさんの胸像は』とベルセーネフは尋ねた。『その後進行してるかね！』

8 『駄目だ、君、進行してゐないよ。あの顔には全く絶望して了ひさうだ。ちよつと見ると、純潔で嚴肅な直線だから、さう擱へ難くなささうだが、どつこいさうはいかない……まるで貴重な寶が手に入りさうで入らないのと同じやうに、どうも巧く行かないんだ。君、あの人が耳を澄ましてるところを見た

かい！ 顔面筋肉は一本も動かないのに、たゞ目の表情だけがのべつ變はつてる。そのために全體の趣がすつかり違つて了ふんだ。さういふ場合彫刻家は一體どうしたらいゝんだね、おまけにへぼ彫刻家はさ？ 實に驚くべき存在だ……不思議な存在だ。』長からぬ沈黙の後に、彼はかうつけ足した。

『さう、あの人は全く驚くべき娘さんだ。』とベルセーネフは後からかう繰り返した。

『しかも、あれがニコライ・スターホフの娘なんだからね！ あゝなつて見ると、血筋とか種族とかいふものを論じる譯にゆかないよ。しかもそれでゐて、あの人は正にスターホフ氏の娘に相違ないんだ。確かに似てるよ。そして母親にも、アンナ叔母さんにも似てるんだ。僕はアンナ叔母さんを心から尊敬してゐるよ。だつて、あの人は僕の恩人だからね。しかし要するに、あの人は一個の牝鶏に過ぎない。さうして見ると、あのエレーナさんの魂は、一體どこから來てるんだらう？ あの内部に燃えてゐる焰は、一體誰がつけたんだらう？ さあ、こいつもまた君に宿題として課して置くよ、いゝかい、哲學者先生！』

10 『けれど『哲學者先生』は依然として何も答へなかつた。全體にベルセーネフは多辯の惡癖を持つてゐなかつたので、何かものを云ふ時には、必要もないのに両手を擴げながら、不器用相に吃り吃りした。しかも、今は何かしら特別な静寂感が彼の心を襲つた。それは疲労と憂愁に似た内面の静けさであつた。彼は、毎日幾時間も幾時間も費さなければならぬやうな、長い困難な勞作に従事した後、ごく最近この郊外へ移つて來たのである。無爲の生活、何かに甘えたいやうなうつとりとした氣分、目的を成就し

たといふ意識、友人相手の氣紛れな他愛もない會話、不意に現れた懐しい人の面影、かういつた風の互ひに相異なつた、とは云へ何となく互ひに似通つた印象が、彼の心内である一つの感情に溶け合つた。それが彼を落ちつかせもすれば、興奮もさせ、またぐつたり力抜けのしたやうな氣持ちにもするのであつた……彼は恐ろしく神経質な青年だつた。

菩提樹の下は涼しくて静かだつた。その木蔭の圈内へは入つて來た蠅や蜜蜂は、その唸り聲も低くなるやうに思はれた。金色の反映を持たぬ、エメラルド色に澄んだ若草は、そよとも揺るがなかつた。背の高い草の莖は、まるで魔法にかゝつたやうに、じつと動かず立つてゐた。菩提樹の下枝には小さな黄色い花房が、死んだもののやうに垂れてゐた。甘い薫りは息をする度に、胸の一番奥まで浸入して來た。けれど胸は喜んでその薫りを呼吸した。遙かの河向かうはずつと地平線まで、一面に輝きつ燃えつしてゐた。時々そよ風が渡ると、そこにさゞ波が起こつて、更に輝きを増すのであつた。眩しいほどの陽炎が大地の上を揺れ流れてゐた。鳥の聲はまるで聞こえない。暑い日盛りには歌はないものである。たゞばつたが到る所にきち／＼と鳴き立てゝゐたが、静かな涼しい木蔭に坐つて、この湧き立つやうな生の響きを聞いてゐるのは、快いものであつた。それはそゞろに睡けを誘つて、空想を呼びさました。

10 『君、かういふことに氣が付いたかね？』ベルセーネフは手の運動で言葉を補ひながら、急にかう云ひ出した。『自然といふものはわれ／＼の心に、何とも云へない妙な感じを呼び起こすものだね。自然は如何にも充實して、何もかも明瞭で、全く自分自身に満足し切つてると云ひたいくらゐだ。われ／＼は

それを理解して、それに見とれてゐるのだが、それと同時に自然といふものは、少くとも僕の心には、いつも一種の不安を呼び起こす。いや、寧ろ哀愁と云つていゝほどだ。これは一體何を意味するんだらう？ 自然の前に出ると、自然に直面すると、われ／＼は自分の非充實性、自分の不明瞭さを、より切實に意識するのだらうか？ それとも、自然の満足してゐるやうな満足感だけでは不十分なので、何かもつとほかのもの、つまり自然の持つてゐない、そして、われ／＼に必要なものを要求するからだらうか？』

『ふむ。』とシューピンは答へた。『どうしてさういふ風になるのか、僕が説明してやらう。君がいま云つたのは、本當の生活をしないで、たゞ一人でもだ／＼しながら眺めてゐるやうな、孤獨な人間の感覺だよ。眺めてゐたつて仕様がなげやないか？ 自分で男らしく生活しなくちや駄目だ。幾ら君が自然の扉を叩いたつて、分かるやうな言葉で答へてくれやしないよ。だつて自然は啞だもの。たゞ樂器の絃のやうに、唸つたり響いたりするだけで、歌を期待する譯にやいかないよ。ところが生きた魂となると、こりや答へてくれる。殊に女性の魂がね。だから、親愛なるベルセーネフ君、君にも心の友を作るやうに忠告するよ。さうすれば君の惱ましい感覺は、忽ち消滅するから。つまりこれが、君の言葉を借りると、我々に『必要』なのさ。だつてこの不安、この哀愁は、要するに一種の飢渴にすぎないからね。胃袋に本當の食物を與へて見給へ、すべて萬事が巧く行くよ。君、空間の中に自己の場所を占め給へ、肉體となり給へ。一體自然がどうしたと云ふんだ、何のためになるんだ？ まあ、自分の聲に耳を傾けて

そ 見るがいゝ——愛といふものがどんなに強い……熱烈な言葉か分かるよ！ 自然……なんて冷たい學校
の 式の表現だらう！ だから（シューピンは歌ひ出した）『マリヤの君よ健やかにいませ！』 いや、まて
前 夜 よ。』と彼は云ひ足した『マリヤの君ぢやない。が、まあどうでもいゝや！ 君分かってくれるね？』
ベルセーネフは半ば身を起して、重ねた手の上に頤を載せた。

『なぜ冷やかすんだ？』と彼は友の顔を見ないで云つた『なぜ嘲笑しなければならぬんだ？ そり
や君の云ふ通り愛は、偉大な言葉だ、偉大な感情だ……だが、君はどんな愛のことを云つてるんだね？』
シューピンも同じく身を起こした。

『どんな愛だつて？ どんなのだつてご勝手さ。たゞそれが目の前にさへあればいゝんだ。しかし正
直なところ、僕に云はせれば、色んな種類の愛なんか、決してありやしない。もし君が愛したとすれ
ば……』

『心底から。』とベルセーネフは引き取つた。

『いや、そりや云ふまでもないことさ。魂は林檎ぢやないから、二つに割る譯にいかないよ。もし君
12 が愛したなら、つまり君は正しいのさ。僕は愚弄しようなどと考へもしなかつたよ。いま僕の心は何と
も云へないほど、優しい氣持ちで一杯なのだ、柔らぎ切つてゐるのだ。たゞなぜ自然が君の云ふやう
な、あんな風にわれゝに作用するかつて譯を、説明しようと思つただけなんだ。それはつまり、自然
がわれゝの心に愛の要求を呼びさましながら、それを充たしてくれる力がないからだ。自然はそつ

13 とわれゝを生きた抱擁の中へ追ひ立てるのだが、われゝはそれを悟らないで、自然そのものから何
か期待してゐるのだ。あゝ、アンドレイ、アンドレイ、素敵ぢやないか。あの太陽、あの空、周囲のも
のが何もかも素晴らしいのに、君は何だつてふさぎ込むんだ？ もし君がこの瞬間、自分の手の中に愛
する女の手を握つてゐたら——もしその手とその女の全體が君のものだつたら——もし君がその女の目
で眺め、自分の孤獨な感情でなく、その女の感情で感じたとすれば、自然は君の胸に哀愁や不安を呼び
起こしはしなかつたらう。そして、自然の美などを認めはしなかつたらう。むしろ自然そのものが喜び
の歌を歌ひ、君の讃歌に唱和したに相違ない。なぜつて、そのとき君は啞のやうな自然に、自分自身の
言葉を吹き込むからだ！』

シューピンはいきなり飛び上がつて、二度ばかりあちこち歩き廻つた。ベルセーネフは首を垂れた。
その顔はぼつと微かに赤みを帯びた。

『僕は君の説に全然同感といふ譯に行かないよ。』と彼は口を切つた。『自然はいつも必ずわれゝにそ
の……愛ばかり暗示するとは限らないからね。（彼は愛といふ言葉を、すぐに思ひ切つて發し兼ねた風で
あつた。）自然は人間を威嚇することもあるからね。つまり何か恐ろしい……さうだ、人間に及び難い秘
密を聯想させるのだ。われゝを呑み盡くすべき必然性を持つてゐるのは、自然ぢやないか？ 絶えず
われゝを併呑しつゝあるのは、この自然ぢやないか？ 自然の中には生もあれば死もある。そして死
前 の 夜 も生と同様に、聲高く己れを語つてゐるのだ。』

『そりや愛の中にだつて、生もあれば死もあるさ。』とシューピンは遮つた。
 『それに』とベルセーネフは言葉を續けた。『僕がだね、たとへば春みどりの森の中に立つて、中世傳説のオペロンの角笛めいた、ロマンチックな響きを心の耳に感じるとしよう（ベルセーネフはかういふ言葉を口にするのが、いくらか氣まり悪く思はれた）、一體これもやはり……』

『愛の渴望だ、幸福の渴望だ、それつ切りさ！』とシューピンはすかさず引き取つた。『僕もその響きなら知つてるよ。深い森の木蔭に立つた時や、夕方太陽が西に傾いて、河が藪の蔭に煙り始める頃、廣々とした野の中に立つた時、心を訪れる倦怠と期待の情をも承知してゐる。けれど僕は森からも、河からも、大地からも、空からも、一つ／＼のちぎれ雲からも、一本々々の草からも、幸福を期待し欲求する。僕はあらゆるものにその接近を感じ、その呼び聲を聞くのだ。わが神は朗らかに且つ樂しき神なり！』こんな風に僕は一つの詩を書き起こしたのだ。どうだ、第一行は素敵だらう。だが、二行目がどうしても巧く組み合はされないのだ。幸福だよ！ 幸福だよ！ 生活が過ぎ去らない間は、手足が自分の自由になる間は、生活が下り坂でなくて上り道の間は、幸福あるのみだ！ 矢でも鐵砲でも持つて来い！』とシューピンは急に激しい勢ひで言葉を續けた。『われ／＼はまだ若くつて、片輪でもなければ馬鹿でもないんだもの、自分で幸福を戦ひ取らうぢやないか！』

彼は長髪をさつと振るつて、自信ありげな殆んど挑戦的な表情で、空を見上げた。ベルセーネフも彼の方へ視線を上げた。

『まるで幸福より以上のものは、何もないやうだね。』と彼は小聲に云つた。

『ぢや、たとへば何があるんだい？』とシューピンは問ひ返して、歩みを止めた。

『さうだね、たとへばわれ／＼はお互ひに、君の云ふ通りまだ若い。そして二人ともいゝ人間と假定しよう。われ／＼はどちらも自分の幸福を望んでゐる……しかしこの「幸福」といふ言葉は、われ／＼を燃えた／＼せ、結び合はせ、互ひに手を差し伸べさせるやうな、さういふ言葉だらうか？ つまりこれはエゴイスチックな、乖離的な言葉ぢやないのだらうか？』

『ぢや、君は結合的な言葉を知つてるのかい？』

『さう、そりや少くないさ。君だつて知つてる筈だ。』

『ぢや、云つてみ給へ、どんな言葉だい？』

『まあ、たとへば藝術でもいゝさ——君は畫家だからね——祖國、科學、自由、正義……』

『ぢや、愛は？』とシューピンは尋ねた。

『愛も結合的な言葉だ。たゞし、君の現に渴望してゐるやうな愛ぢやない。享樂の愛ぢやなくて、犠牲の愛だ。』

シューピンは眉をひそめた。

『そりや獨逸人には結構だらうが、僕は自分自身のために愛したいんだ。僕は第一號になりたいんだ。』

『第一號に?』とベルセーネフは繰り返した。

『僕に云はせれば、自分を第二號に推すのが、われ／＼の生活全體の使命だよ。』

『もし皆が君の忠告通りに行動したら、この地上に住む人間が、誰もパイナツブルを食はなくなつて了ふよ。誰もかれも他人のために残すやうになるだらうよ。』

『だから、つまりパイナツブルが不必要だといふ譯さ。しかし、心配しなくてもいゝよ。いつの世にも他人の口からパンを横取りしようといふ希望者は、決して跡を断ちやしないから。』
二人の友は暫く黙つてゐた。

『僕は二三日前インサーロフに會つたよ。』とベルセーネフは云ひ出した。『僕あの男を内へ呼んだのだよ。僕は君にも……そしてスターホフさん一家の人たちにも、是非あの男を紹介したいと思ふよ。』

『そのインサーロフつて、一體だれだい? あゝさう、いつか君の話したセルビヤ人か、それともボルガリヤ人のことだね? あの愛國者のことだね? ちや、君にそんな哲學的思想を吹き込んだのは、その男ぢやないかね?』

『さうかも知れない。』

『それは非凡な人物だとも云ふのかい?』

『やうだ。』

『頭のいゝ?……天分のすぐれた?』

『知らない、さうは思はないね。』

『さうぢやない? ちや、一體何がそんなに非凡なんだい?』

『いまに分かるよ。だが、もうそろ／＼歸らなくちやならない時分らしいよ——アンナ夫人が待ち兼ねてゐられるだらう。何時だね?』

『二時すぎだ。出掛けよう。どうも息苦しい! いまの話して體中の血が燃えたつて來たよ。君だつて瞬間的に……僕だつて藝術家の端くれだからね、何でも見のがしやしないよ。白狀し給へ、君も女には興味があるだらう……』

シューピンはベルセーネフの顔を覗き込まうとしたが、こちらはくるりとそつぽを向いて、菩提樹の木蔭を出て了つた。シューピンは小さな足を優美な恰好で磊落に運びながら、彼の後から歩き出した。ベルセーネフは歩く度に肩を高く上げ、頸を伸ばしながら、不器用な様子で進んで行つた。が、それでも彼の方がシューピンよりも、かへつて歴とした人間のやうに見えた。もし餘りに使ひ古されて俗臭を帯びてゐなかつたら、紳士ゼントルマンといふ言葉を當て嵌めてもいゝくらゐだつた。

二

二人の青年はモスクワ河の方へ下りて、その岸傳ひに歩き出した。水面から涼氣が漂つて、さゞ波の靜かにひた／＼と打つ音が耳を颯つた。

『僕はもう一度水にはいりたいんだが』とシュービンが云ひ出した。『晩になると困るからね。まあ河をみ給へ。まるで僕等をさし招いてゐるやうぢやないか。古代ギリシヤ人だつたら、あの中に水精ニムフを認めたとに相違ない。けれど僕等はギリシヤ人ぢやないから、水精どころぢやないよ！ われ／＼は頑固なスキチャ人に過ぎないんだ。』

『ロシヤにはルサルカ(水死した女の精)といふものがあるよ。』とベルセーネフが口を入れた。

『君はそのルサルカを連れて、どこへなと行き給へ！ 僕は彫刻家なんだから、そんな臆病な冷たい空想の産物なんか必要がないよ——暗い冬の夜に、息の詰まるやうな狭苦しい百姓屋の中で生まれた形象なんか！ 僕には光りがいるんだ、廣い空間がいるんだ……あゝ、一體いつになつたら、イタリヤへ行けるんだらう？ いつになつたら……』

『と云つて、いつ小ロシヤへ行けるかといふ話しなんだらう？』

『ベルセーネフ君、僕の不用意に犯した過失を、いつまでも責めるのは恥づべき事だよ。それでなくてさへ、僕は悲痛な悔悟の念に責められてゐるんぢやないか。いや、僕は全く馬鹿げた事をしてつたよ。あの善良無比なアンナ叔母さんがイタリヤ行きの旅費をくれたのに、僕は小ロシヤガルーシカへ團子を喰べに行つたんだからね。そして……』

『もうその先は云はないでくれ給へ、お願ひだから。』とベルセーネフが遮つた。

『いや、とにかく云つて了ふよ。その金は決して無駄にはならなかつた。僕は小ロシヤで素晴らしい

典型タイプを見て来たんだよ、殊に女の方に……勿論、イタリヤ以外に救ひがないといふことは、僕も承知してゐるよ！』

『君はイタリヤへ行つても、結局なに一つしやしないよ。』とベルセーネフは相手の方へ向かないで、かう云つた。『たゞ翼を羽搏きさせるばかりで、要するに飛び出さないで終るのだ。ちやんと分かつてるよ！』

『スタワツセルは(十九世紀のロシヤ彫刻家)飛んだぢやないか……しかも彼一人きりぢやない。ところで、もし僕が飛び出さなかつたら、つまり僕が翼を持たぬ、やくざなペンギン鳥だといふことになるんだ。こゝは息苦しい、イタリヤへ行きたい。』とシュービンは言葉を續けた。『あすこには太陽がある、あすこには、美がある……』

鏗廣の麥藁帽を被つて、薔薇色の傘を肩にかしげた若い娘が、この時、二人の歩いてゐる小道に現はれた。

『おや／＼、これは何といふことだ？ こゝでも美がわれ／＼の方へ向けてやつて来るぜ！ 魅はしのゾーヤの君に、つましき畫師の挨拶を呈します！』芝居じみた恰好で帽子をさつと振りながら、不意にシュービンはかう叫んだ。

この叫びを贈られた娘は立ち止まつて、人さし指を立てながら威嚇の表情をした。そして、二人の友人が傍まで来たとき、心持ち鼻にかゝつた響きの高い聲でかう云ひ出した。

『一體どうなすつたの、いつまでも食事にお歸りにならないで、テーブルの用意はもうちゃんとしてるよ。』

『これは何といふ思ひがけない事です。』とシューピンは両手を打ち鳴らしながら云つた。

『美しきわがゾーヤの君がこの炎天にもかゝはらず、わざわざ僕等をさがしにお出かけ下さつたので

いつそその一言を發しないで戴きませう。慚愧の念が忽ち僕を死に到らしめるでせうからね。』

『あゝシューピンさん、よして頂戴。』娘はいくらかいまゝしさうな様子で、かう云ひ返した。『どう

してあなたはいつもく、眞面目にわたしと話しをなさらないでせう？ わたし腹を立てよ。』コケ

ティッシュな表情で顔をしかめ、唇を尖らせながら、彼女はかう云ひ足した。

『女性の理想とも云ふべきゾーヤの君、さう腹を立てないで下さい。どうか僕を物狂はしい絶望の暗

黒な淵に落とさないで下さい。僕は眞面目な話しが出来ないのです。だつて、僕は不眞面目な人間なんですからね。』

娘はひよいと肩をすくめて、ベルセーネフに話しかけた。

『この人つたらしいもかうなんです。いつもわたしを赤ん坊扱ひにするんですもの。わたしだつて

もうまるく十八になつたのよ。わたしもう大人よ。』

『おゝ神様！』とシューピンは唸るやうに云つて、目玉を肩の下まで吊り上げた。ベルセーネフは無言

のままにやりとした。

娘は片足をとんと踏み鳴らした。

『シューピンさん！ わたし怒つて了つてよ！ エレーナさんはわたしと一緒に出掛けようとおつし

やつたんですけど、とうとう庭に残つておしまひになりましたわ。』と彼女は言葉を續けた。『餘り暑い

におぢけがさしたんですの。わたしなんか暑さは恐れませんが。さあ参りませう。』

彼女は先に立つて小道を歩き出した。一步毎にしなぐした體を軽く揺つて、黒い半手袋をはめた華

奢な手で、軟らかな長い髪を顔から拂ひのけてゐた。

二人の青年はその後に續いた（シューピンは無言のまま両手を心臓に押し當てたり、更に頭上高く差

し上げたりした。）暫くして、彼等はクンツォヂを取り巻いてゐる無数の別荘の一つに近よつた。桃色の

ペンキに塗り上げられた、中二階つきの小さな木造の家が、庭の眞ん中に立つて、木立ちの緑の蔭から、

何となく無邪氣な表情で顔を覗けてゐた。ゾーヤは一番に小門を明けて、庭の中へ駈け込むと、『漂泊の

詩人たちを連れて來ましたわ！』と叫んだ。

表情に富んだ青白い顔つきの若い娘が、小道に近いベンチから身を起こした。そして家の閤際には、

ライラックの色の絹服を着た婦人が現はれて、繡ひのある麻のハンカチを額にかざして日光を防ぎなが

ら、さも物憂げな張りのない微笑を浮かべた。

アンナ・ヴシーリエヅナ・スターホフは、シューピン家から嫁入つて来た人である。七つの年に身なし兒となつたが、同時にかなり大きな財産の相続人ともなつた。彼女には非常に金持ちの親戚と、非常に貧乏な親戚があつた。貧乏な方は父方の系統で、金持ちの方は母方に當たる樞密顧問官のゾルギンや、チクラソフ公爵などであつた。後後見人に指定されたアルダリオン・チクラソフは、彼女をモスクワ一番の女學塾へ入れた。彼女が塾を卒業した時、自分の家へ引き取つた。彼は派手な生活をしてゐて、冬はよく舞踏會を催した。アンナの未來の夫ニコライ・スターホフは、かうした舞踏會の一つで彼女を征服したのである。彼女は美しい薔薇色の夜會服を着て、小さな薔薇で出来た頭飾りをつけてゐたものだつた。彼女はこの頭飾りを大切に保存してゐた……

ニコライ・アルチェーミッチ・スターホフは、千八百十二年のナポレオン戦争で負傷して、ペテルブルグの有利な位置を獲得した豫備大尉の息子で、十六の年に士官學校へ入學し、卒業後、近衛へ入つた。彼は男ぶりもよく、押し出しも堂々としてゐたので、彼の主に出掛けて行く中流どころの夜會では、殆んど隨一の人気者になつてゐた。(上流の社交界には入つて行く道がなかつたのである。)彼は若い時分から二つの空想を懐いてゐた。一つは侍從武官になることであり、いま一つは有利な結婚をすることであつた。第一の空想は間もなく思ひ切つたけれど、それだけ一層第二の方にしつかりと獅嚙みついた。

彼はそのため毎年冬になると、モスクワへ出掛けて行つた。ニコライ・アルチェーミッチはかなり綺麗にフランス語を話した。そして道樂をしないと云ふ理由で、哲學者といふ評判をとつてゐた。まだやつと少尉補時代から、根氣よく議論を戦はすのが好きだつた。たとへば、人間は一生の間に世界を渡る限なく周遊することが出来るかだの、海底に於ける出来事を知ることが出来るかだの、さういつたやうな類である。そして、いつも「出来ない」といふ意見を持してゐた。

ニコライが二十五歳を越したとき、彼はアンナ・ヴシーリエヅナを「釣り上げた」。彼は退職願ひを出して、田舎へ領地經營に出掛けた。田舎の生活は間もなく飽き飽きして來た。しかも、彼等の領地は人頭税組織になつてゐたのである。彼はモスクワへ出て妻の家に落ちついた。若い時分の彼はカルタ遊びをしたことがなかつたのに、そのとき急にロトの勝負に熱中し始めた。ロトが禁ぜられたとき、今度はカルタ遊びに移つた。家ではいつも無聊に苦しんで、たうとう獨逸生まれの未亡人と關係をつけ、殆んど始終そこへ入り浸りになつてゐた。

千八百五十三年の夏、彼はクンツォフへ越してこなかつた。彼は鑛泉療法を口實にモスクワへ残つたが、その實、例の未亡人と別れたくなかつたのである。もつとも、彼は未亡人とも餘り話しをしなかつた。むしろ天候を豫言することが出来るかどうか、などいふ議論に暇を潰す方が多かつた。あるとき、誰か彼のことを frondeur (あら捜し屋) と呼んだ。この名稱はひどく彼の氣に入つた。「さうとも」と彼は得意さうに口の兩隅を緩めて、體をゆらくさせながら考へた。「おれを納得させるのは生や

『ささいなことぢやない。おれは中々胡魔化しに乘らないからな。』

彼の否定的精神といふのは、たとへば神経といふ言葉を小耳に挟むと、早速『一體神経とは何だね』と云つたり、誰か彼の面前で天文学の進歩を口にすると『君は天文学を信じますかね?』と言つたりするだけにすぎない。彼が論敵を完全に粉砕しようと思つたときには『そんなことは美辭麗句にすぎない。』と云ふのが決まりだつた。この種の駁論は多くの人に、否定し難い力を持つてゐるやうに思はれたし、今でもさう思はれてゐるのは、遺憾ながら認めざるを得ない。けれどニコライ・スターホフは、愛人のアウグスチーナが従妹のフェオドリンダに當てた手紙の中で、彼のことを『うちのお馬鹿さん』と呼んでゐるのを、夢にも知らなかつたのである。

ニコライの妻アンナ・ワシーリエヴナは顔の輪郭の華奢な、瘦せた小づくりの婦人で、興奮したり沈んだりし易い質だつた。女學塾時代には音楽を勉強したり、小説を讀んだりしてゐたが、後にはそれですつかり止めて了つた。お洒れに身を襲し始めたが、それもやはり止めて了つた。娘の教育に身を入れたが、そのとき妙にぐつたり力抜けがして、家庭教師任せにして了つた。結局、彼女はたゞ興奮したり、沈んだりするばかりが仕事になつた。エレーナを生んで以來健康を害なつて、それ切り子供を持つことが出来なかつた。ニコライはアウグスチーナと接近する云ひ譯に、この間の事情を仄めかすのであつた。夫の不身持ちはひどくアンナを悲しませた。殊に彼女にとつて辛かつたのは、ある時ニコライが妻を瞞して、アンナ夫人の牧場で養成した茸毛の馬を二頭、例の獨逸女へ贈り物にしたことである。

彼女は面と向かつては、一度も夫を責めなかつたけれど、蔭では家中の者に——娘にさへも——泣きごとを繰り返してゐた。アンナ夫人は外出を好まなかつた。彼女は客が来て、何か話してくれるのが嬉しかつた。獨りになると、彼女はすぐ病氣になつた。彼女は極めて愛情の深い、柔和な心の持ち主であつた。生活が早くから彼女の心を揉みぬいたのである。

パーゼル・シューピンは彼女の又従弟に當たつた。父親はモスクワに勤めてゐて、兄弟たちは幼年學校へ入學した。けれど彼は末つ子で、體も華奢だつたので、母親の秘藏つ子となつて、家に残された。彼は大學へ入學させられることになつてゐたが、中學時代から學資の繼續に骨が折れた。彼は早くから、彫刻に對する趣味と傾向を示し始めた。どつしり構へ込んだ樞密顧問官のゾルギンが、ある時アンナ夫人の所で彼の彫刻を見て(そのとき彼は十六歳であつた)、この年若い才能を保護しようと言明した。父の急死は若いシューピンの未來を、殆んど根本的に覆しさうになつた。優れた才能の保護者たる顧問官は、彼にホームアの石膏像を與へたが、たゞそれつ切りだつた。けれど、アンナ夫人が金銭上の保護を續けてくれたので、彼は曲がりなりにも、十九の年に大學の醫科へ入つた。シューピンは醫學などに一向興味はなかつたけれど、その時の定員の都合で、ほかの科へはどこへも入れなかつたのである。それに解剖學を研究しようとする考へもあつた。けれど解剖學を究めないで、二年級へ進級もしないうちに、自分の天職に身を捧げる決心で、試験間際に大學を引いて了つた。

彼は眞面目に勉強したけれど、それもたゞ合ひ間合ひ間で、多くはモスクワ郊外を彷徨ひながら、百姓

その娘の首をつくつたり、肖像を描いたり、老若貴賤あらゆる人々と近づきになつたりした。その中にはイタリヤの模型師や、ロシアの畫家などもゐた。そして、美術學校入學などといふ話には耳も藉さず、いかなる教授の權威をも認めようとしなかつた。彼は疑ひもなく、しつかりした才能を持つてゐたので、だん／＼モスクワでも名を知られるやうになつた。彼の母は巴里の名門の出で、善良な賢い婦人であつたので、彼に立派なフランス語を仕込み、明け暮れ彼のことを心配して、一生懸命に世話をやいてゐた。彼女はシューピンを誇りとしてゐたが、まだ若いのに肺病でなくなつた。死ぬ問ぎにはアンナ夫人に、わが子を引き取つて貰ひたい、と頼んだのである。そのとき彼はもう二十一であつた。アンナ夫人は、彼女の最後の願ひを聞き入れた。で、彼はいま別荘の離れに、小さな一室を占領してゐる譯なのである。

四

『さあ、ご飯にしませう、ご飯に。』とアンナ夫人は哀れつぽい聲で云つた。で、一同は食堂へ赴いた。『ゾーヤ、わたしの側にお坐り。』と夫人は世話をやいた。『それからエレーナ、お前はお客さまのお相手をなさい。それからパーエル、どうかお願ひだから悪ふざけをして、ゾーヤをからかはないでおくれ。わたし今日は頭が痛いんだから。』

シューピンはまたもや兩眼を天へ向けた。ゾーヤは半分笑ひかけたやうな表情でそれに答へた。この

ゾーヤ——正確に云へばゾーヤ・ニキーチシナ・ミユルレル——はロシア生まれの可愛い獨逸娘であつた。少しやぶの方ではあつたが、眞つ赤な小さい唇をして、鼻の先に割れ目が見え、髪が白つぽくて、全體にぼつちやりした感じだつた。彼女はロシアのロマンスを中々器用に歌ふし、ピアノも陽氣な曲や感傷的な曲を、手綺麗に弾きこなした。着物の好みなども垢抜けがしてゐたけれど、何となく子供じみたところがあつて、それに餘りきちんとし過ぎてゐた。アンナ夫人は彼女を娘の學友に入れたのだが、殆んど始終自分の傍へ引きつけてゐた。エレーナはそれに對して些かも苦情を云はなかつた。彼女はゾーヤと差し向かひになつたとき、何を話してゐるのか、まるで見當がつかなかつたのである。

食事はかなり長く續いた。ベルセーネフはエレーナを相手に大學の生活や、自分の計畫や希望など話してゐた。シューピンはその方に耳を澄ましたながら、わざと大仰に腹の減つたらしい様子をして、無言のまゝむしや／＼と貪り食らつた。そして時々ゾーヤの方へ、滑稽味たつぷりな、萎れ切つた視線を投げた。娘はそれに對して、例の物憂げな微笑をもつて答へてゐた。食事が濟んでから、エレーナはベルセーネフとシューピンを誘つて、庭の方へ出て行つた。ゾーヤはその後を見送つて、ひよいと軽く肩をすくめながら、ピアノに向かつて腰を下ろした。アンナ夫人はそれを見て、

『どうしてあんたも散歩に行かないの?』と尋ねたが、答へを待たずにかう云ひ添へた。『何かわたしにしんみりしたものを聞かして頂戴……』

『ウェーベルの「最後の思ひ」にしませうか?』とゾーヤは尋ねた。

『あゝ、さう、ウェーベルをね。』と云ひながら、アンナ夫人は肘椅子に腰を下ろした。すると一滴の涙がその睫毛に宿つた。

その間にエレーナは二人の青年を、アカシヤで編んだ東屋へ案内した。中には木造のテーブルが立つて、周りにベンチが置いてあつた。シューピンは邊りを見廻して、幾度かびよん／＼飛び上がった。やがて、『ちよつと待つて下さい！』と囁いたと思ふと、自分の部屋へ駈け出して行つたが、すぐに一塊りの粘土を持つて引き返した。そして頸をひねつたり、何やら獨り言を云つたり、笑つたりしながら、ゾーヤの姿を作り始めた。

『また古い洒落ですの。』エレーナはそれをちらと見てかう云つたが、すぐベルセーネフの方へ向き直つた。二人は食事の時の話しを、こゝでもやはり續けてゐるのであつた。

『古い洒落ですつて！』とシューピンは繰り返した。『たつて、永久に盡きざる創作の材料なんですからね！ 今日なんか殊に堪忍袋の緒を切られましたよ。』

『それはなぜですの？』とエレーナは尋ねた。『まるでいやな。意地悪のお婆さんの話してもしてらつしやるやうね。あんな可愛い若い娘さんぢやありませんか……』

『勿論、』とシューピンは遮つた。『あれは可愛い娘です。實に可愛い娘ですとも。どんな通りすがりの人間でもあの娘を見たら、あんな人と一緒に……ポルカでも踊つたならさぞい／＼だらうな、とかう考へるに相違ありません。また當人もそれを承知して、いゝ氣持ちでゐるに相違ないんです……それなのに、』

なぜあんなに羞づかしさうにもぢ／＼したり、内氣らしいしなを作つたりするんでせう？ いや、僕の云はうと思つてゐることは、あなたもご承知の筈です。』と彼は齒の間から押し出すやうに云つた。『もつとも、いまあなたはほかの事に氣をとられてゐらつしやるやうだ。』

シューピンはゾーヤの姿を毀して了つて、忌ま忌ましさうにせか／＼と粘土を揉んで、何かの形を作り始めた。

『では、あなたは大學教授がご志望なんですの？』とエレーナはベルセーネフに尋ねた。

『さうです。』こちらは膝の間に赤い両手を押し込みながら、かう答へた。『それは僕にとつて楽しい空想なんです。無論、僕もさういふ偉い……なにを占めるのに、自分の力が足りないのは、よく知つてゐます……つまり、素養が足りないといふ意味なんです。けれど、僕は外國留學の命令を當てにしてゐるんです。必要に應じて、三年でも四年でも外國で勉強したら、その時は……』

彼は言葉を止めて俯向いたが、やがて急に目を上げて、間の悪さうな微笑を浮かべながら、髪を掻きなでた。ベルセーネフは女と話しをするときには、いつもよりなほ口が重くなつて、餘計發音が不明瞭になるのであつた。

『あなたは歴史の教授になりたいと思つてゐらつしやいますの？』とエレーナは尋ねた。

『えゝ、でなければ哲學の方か……』と彼は聲を低めて云ひ足した。『もし出來得るならばです。』

『この男はもう今でも哲學の方にかげちや、鬼でも負かすくらゐが、つちりしてゐるんですよ。』シューピン

は爪で粘土に深い條をつけながら、傍から口を入れた。「外國留學なんかする必要があるもんですか？」
『さうしたなら、あなたはご自分の位置にすつかり満足なさるでせうか？』とエレーナは片手で頼杖をついて、まともにベルセーネフの顔を見詰めながら、かう云つた。

『そりや満足ですとも、エレーナさん、満足ですとも、それ以上の天職はありません。實際グラノフスキイ教授の足跡を辿る譯ですからね……さういふ仕事を考へたわけでも、わたしの心は喜びと當惑で一杯になるのです。え……當惑、それは自分の微力を意識するところから出て來るのです。なくなつた父が僕のかうした志望を祝福してくれました……僕は父の臨終の言葉を忘れることが出來ません。』
『あなたのお父様は今年の冬におなくなりになつたんですね？』

『さうです、エレーナさん、二月に。』
『何ですか、』とエレーナは言葉を續けた。「お父様は立派な著述の原稿をお残しなすつたさうですが、それは本當でございますの』

『さうです、残しました。父は實にいゝ人でした。もし生きてゐたら、あなたは父がお好きになつたに違ひありません。』
『わたしもさう信じますわ。その著述の内容はどんなものでございますの？』

『父の著述の内容は、ちよつと一口に申し憎いのです。父はシェリング派の學者でしたから、時々明瞭を缺ぐやうな表現を用ひましてね……。』

『アンドレイ・ペトローギッチ、』とエレーナが遮つた。「どうかわたしの無學をお許し下さいまし。そのシェリング派と申しますのは、どういふ意味でございませう？』

ベルセーネフは微笑にほゝ笑んだ。

『シェリング派といふのは、獨逸の哲學者シェリングの追隨者のことでした、シェリングの教義……』

『アンドレイ・ペトローギッチ！』だしぬけにシューピンがかう叫んだ。「後生だからお手やはらがに頼むよ。君はエレーナさんにシェリングのことを、一席講じる積もりぢやないのかい？ そいつはご容赦願ひたいもんだね！』

『何もそんな……』とベルセーネフは口籠もりながら赤くなつた。「僕はたゞ……』

『なぜ一席講じちやいけないんですの？』とエレーナが引きとつた。「ねえ、パーエルさん、わたしたちはお互ひに講義を聞く必要があるんですわ。』

シューピンはちつとその顔を見据ゑてゐたが、不意にからくゝと笑ひ出した。

『一體何を笑つてらつしやるの？』と彼女は冷やかな、殆んど突慳貪な調子で尋ねた。
シューピンは口を噤んだ。

『いや、澤山ですよ、腹を立てないで下さい。』しばらく経つて、彼はかう云つた。「どうも失禮しました。しかし正直なところ、こんないゝお天氣に、こんな美しい木の蔭で、哲學の講義を始めるなんて、いゝ物好きぢやありませんか。それより鶯や、薔薇や、若々しい瞳や、ほゝ笑みでも語らうぢやありませんか。』

せんか。』

『さうね。それからフランスの小説や、女の着物の話しもね。』とエレーナが後を続けた。

『それだつていゝぢやありませんか、もし美しいものなら。』とシューピンは云ひ返した。

『かも知れませんか。でも、わたしたちが着物の話しなんかしたくなかつたら？ あなたはご自分で自由な藝術家と名乗つてゐらつしやる癖に、何だつて他人の自由を束縛しようとなさるんですの？ 一つ伺ひますが、さういふ考へ方をしてゐらつしやる癖に、なぜあなたは、ゾーヤの攻撃をなさるんですの？ あのこそ薔薇や着物の話しをするのに、丁度恰好の相手ぢやありませんか。』

シューピンは急にかつと赤くなつて、ベンチから腰をもち上げた。

『あゝ、さうですか？』と彼は神経的な聲で云ひ出した。『あなたの當てこすりが分かつて來ました。

あなたは僕をあの人のところへ追ひやらうとなさるんですね、エレーナさん？ 云ひ換へれば、僕はここにゐて餘計な人間なんですか？』

『わたしはこゝからあなたを追ひ立てようなんて、そんなこと考へもしませんでしたわ。』

『つまり、あなたはかうおつしやりたいんでせう。』とシューピン癩性らしく言葉を續けた。『僕はあの娘の相手くらゐが丁度恰好なところで、それ以外の人たちの仲間入りは潜越たと云ふんでせう？ つまり、僕はあの甘つたるい獨逸娘と同じやうに、空つぽの、つまらない、淺薄な人間だと云ふんでせう？ さうぢやありませんか』

エレーナは眉をひそめた。

『あなたはいつもあの人のことを、そんなに云つてらつしやる譯でもないでせう。パーエルさん。』と彼女は注意した。

『あゝ！ それは非難ですわね！ 今度は非難だ！』とシューピンは叫んだ。『えゝ、そりや僕も敢へて隠しません——ある瞬間、ほんの一瞬間、あの下品な生き生きした頬に……けれど、もし僕があなたに非難の返報がへしをして、あなたにご注意する氣になつたら……いや、失敬します。』彼に急に語調を變へた。『僕はどんな出たら目を云ひ出すか分からない。』

彼は頭の形に捏ね上げた粘土をなぐりつけると、そのまま東屋から駈け出して、自分の部屋へ入つて了つた。

『子供だわ。』その後を見送りながら、エレーナはかう云つた。

『藝術家なんですよ。』ベルセーネフに靜かに微笑しながら、かう云つた。『藝術家つてみんなあんな風ですよ。氣紛れは赦してやらなくちやなりません。それが彼等の權利なんですからね。』

『そりやさうですわ。』とエレーナは答へた。『でも、パーエルは今までその權利を人に認めさせるだけの事を、何一つしなかつたんですもの。一體あの方はこれまで何をしたでせう？ わたしに腕を貸して下さいな。一緒にあの並み木道を散歩させよう。わたしたちはお父様の遺稿の話しをしてたところを、あの人に邪魔されたんですわね。』

ベルセーネフはエレーナの腕を取つて、一緒に庭を散歩し始めたが、餘り早く中絶された會話は、もう縫りを戻すことが出来なかつた。ベルセーネフはまた、學者といふ天職に對する自分の意見や、自分の將來の活動に關する所感など述べ始めた。彼はエレーナと並らんでそろ／＼と進んだ。足を踏み出すのも、彼女の腕を支へるのも、すべて不器用らしい恰好で、時々肩でエレーナを突たりした。そして一度も相手の顔を見なかつた。けれど彼の言葉は、全然自由と云へないまでも、かなり輕々と流れて出たし、その言ひ廻しも單純で正確だつた。木立ちの幹や、小道の砂や、草の上を靜かに彷彿彼の目の中には、高潔な内心の感激が靜かに輝き、その落ち付いた聲の中には、懐しい人の前で所信を語る機會を與へられた人の喜びが響いてゐた。エレーナは注意深くその話しを聞いてゐた。そして半ば彼の方へ顔を向けたまゝ、やゝ青ざめたその顔や、避けるやうにしてはゐるけれど、友情に充ちたつゝまじやかな目から、少しも視線を離さなかつた。彼女の魂は次第に開けて行つて、何かしら優しく、善良な、正しい感情が、その胸に注ぎ込まれるやうな、その内部に生長して行くやうな按配であつた。

五

シューピンは夜になるまで、自分の部屋から出なかつた。もうすつかり暗くなつて、片割れ月が中空に高くかゝり、銀河が白く續いて、星が繁く瞬き始めた頃、ベルセーネフはアンナ夫人を始めとして、エレーナとゾーヤに別れを告げた後、友人の部屋に近寄つた。戸には鍵がかゝつてゐた。彼はノックし

始めた。

『誰だね?』と云ふシューピンの聲が響いた。

『僕だよ。』ベルセーネフは答へた。

『明けてくれよ、パーエル。氣紛れは澤山だよ。よく耻づかしくないことだね?』

『氣紛れぢやないよ。僕は眠つてゐるんだ。そして、ゾーヤの夢をみてゐるんだ。』

『お願ひだから止さないか。君だつて子供ぢやないだらう。入れてくれ給へ。話したいことがあるんだから。』

『君はまだエレーナさんと喋り足りないのか?』

『止せつたら止せよ。明けてくれ給へ!』

シューピンは態とらしい躰の聲で答へた。ベルセーネフはちよつと肩をすくめて外へ出た。それは暖な夜で、周囲の者がすつかり息を潜めて、ちつと聞き耳でも立てゝゐるやうに、何だか特別靜かな感じだつた。ベルセーネフも立ちこめた夜霧に包まれて、思はずそこに足を止めながら、同じく息を潜めて耳を澄ました。女の絹ずれのやうな輕い囁きが、時々近くの梢に起こつて、ベルセーネフの心に甘い息づまるやうな氣持ちを呼びさました。それは半ば恐怖に似た氣持ちだつた。兩の頬に輕い瘰癧が走つて、目は瞬間的に滲み出る涙に曇つた。彼はまるきり音のしないやうに歩いて、どこかの蔭に身を隠したいやうな氣がした。と、一陣の風がさつと横合ひから襲つて來た。彼は微に身震ひして、その場に立ち慄

んだ。寝ぼけた甲蟲が木の枝から落ちて、道の上にこつんと落ちた。ベルセーネフは小さな聲で『あつ！』と叫んで、また歩みを止めた。けれど彼はエレーナの事を考へ始めたので、かうした刹那の感覺は忽ち消えて了つた。彼の心に残つてゐるのは、たゞ夜のすがくしさと、夜半のそゞろ歩きの楽しい、生き生きした印象ばかりであつた。彼の魂は若い處女の面影で一杯になつてゐた。ベルセーネフは頭を垂れて歩きながら、彼女の言葉や問ひを、一句々々思ひ浮かべてゐた。

ふと急がしげな足音が後の方に聞こえた。彼は思はず耳を敬てた。誰やら彼を追つかけて、走つてくる様子であつた。はあ／＼といふ息切れの聲まで聞こえた。やがて不意に眞つ黒な大木の蔭から、帽子も被らず髪を振り亂したシューピンの姿が、彼の前にぬつと現れた。彼は月の光りをうけて、眞つ青な顔をしてゐた。

『君がこの道筋を選んでくれたので、まあよかつた。』と彼は苦しさうにかう云つた。『もし君に追ひつけなかつたら、僕は夜つびで眠れなかつたに相違ない。さあ握手しよう。君はこれから家へ歸るところだらう？』

『さうだ。』

『ちや、送つてやらう。』

『だつて帽子も被らずに、そんなことが出来るかね？』

『大丈夫さ。僕はネクタイも取つて了つたくらゐだ。今夜は暖いもの。』

二人の友は幾足か黙つて進んだ。

『ねえ、君、今日僕をしたことは實際ばかけてゐたらう？』と不意にシューピンが問ひかけた。

『遠慮なく云ふと、その通りだ。僕は君の氣が知れなかつたよ。あゝいふ態度はついぞ見たことが無かつたもの。一體何だつて腹を立てたんだね。ばか／＼しい！ あんな詰まらないことのために！』

『ふむ。』とシューピンは唸つた。『君はそんな風に云ふんだね。だが僕にして見れば、詰まらない事どころぢやないよ。ねえ、君。』と彼は云ひ足した。『僕は君に自白しなくちやならない。僕は……その……まあ、僕のことを何とでも考へるが……僕は……いや、さうだ！僕はエレーナさんに戀ひしてゐるんだ。』

『君がエレーナさんに戀ひしてゐる！』とベルセーネフは鸚鵡返しと云つて、歩みを止めた。

『さうだ。』とシューピンは態とらしい無造作な調子で、言葉を續けた。『君はびつくりしたのかい？』

それどころぢやない、僕はつい今日の晩まで、向かうでもだん／＼僕を愛するやうになると、秘かに心頼みにしてゐたのだ。けれど今日こそはつきり分かつた——僕はまるで期待を繋ぐ譯に行かない。あの人はほかの男を愛してゐるのだ。』

『ほかの男？ それは一體誰だ？』

『誰だつて？ 君をさ！』とシューピンは叫んで、ベルセーネフの肩を叩いた。

『僕を！』

『君をさと。』シューピンは繰り返した。

ベルセーネフは思はず一歩しさつて、そのまゝちつと立ち凍んだ。シューピンは油断なくその様子を見つめてゐた。

『君はまだびつくりするのかい？ 實に謙抑な青年だね。しかし彼女は君を愛してるよ。その點については安心して可なりだ。』

『なんてばかなことを云つてるんだ！』やつとのことでベルセーネフは、いま／＼しさうにかう云つた。

『いや、ばかなことぢやないよ。だが、何だつて僕等はほんやり突つ立つてるんだらう？ 歩かうぢやないか。歩いてゐる方が樂だ。僕は前から彼女を知つてゐる。しかもよく知つてゐるのだ。だから考へ違へなどする筈がない。君はあの人の胸にびつたり來るんだよ。一時は僕もあの人の氣に入つたことがある。しかし第一に、僕はあの人の人にとつて餘り輕薄な青年すぎる。ところが君は眞面目な男で、精神的にも肉體的にも清淨な人格だ。君は……待ち給へ、僕はまだ了ひまで言つてゐないんだよ——君は正直な中庸を得た感激家だ。ロシアの中流貴族階級が誇りとしてゐる、科學の使徒の典型的な代表者だ！それから第二に、エレーナさんはこの間、僕がゾーヤの手に接吻してゐるところを見つけたんだ。』

『ゾーヤの？』

『さうだ、ゾーヤの手なんだ。どうも仕様がなないぢやないか？ あの女の肩は實にいゝからな。』

『肩が？』

『さうさ、肩だつて手だつて、同じことぢやないか？ エレーナさんは、僕がかうした食後の自由作業をやつてるところを見つけたのさ。しかも食事の前に、僕は彼女の面前で、ゾーヤの悪口を云つたんだからね。エレーナさんは残念ながら、かういふ矛盾の自然さを理解しないんだ。丁度そこへ君といふ人間が現はれた。君は信じてゐるだらう……まあ何でもいゝ、信仰といふものを持つてるだらう？……君は顔を赤くしたり、もじ／＼したり、シルレルやシェリングにあこがれたりしてゐる（ところが、あの人はしじう非凡な人間を求めてるんだからね）。かうして君は遂に征服したのだ。で、僕は不幸を紛らすために、洒れ飛ばさうと努めてゐるのだが……しかし……それでも……』

シューピンは不意に泣き出した。そして脇の方へ離れながら、地べたへ腰を下ろして、両手で髪のを引つ摺んだ。

ベルセーネフはその傍へ近寄つた。

『バーゼル、』と彼は口を切つた。『そりや餘り子供じみてるぢやないか！ しつかりし給へ！ 君は一體今日どうしたといふのだ？ 何だか知らないが、ばかな事を考へ出して、そのためにめそ／＼泣くなんて！ 僕は正直なところ、君が芝居をやつてるやうな氣がするくらゐだ。』

シューピンは顔を上げた。その顔には涙が月光をうけて光つてゐたが、顔は微笑を浮かべてゐた。

『アンドレイ、』と彼は云ひ出した。『君は僕のことを何とでも思ふがいゝ。僕は今ヒステリーを起こし

その夜、素早く二人の傍を滑り抜け、目立たぬやうに邊りを見廻しながら、通りを横ぎつて、左の方へ行つて了つた。亭主はすべて郊外の小さな雜貨屋の例に洩れず、ぶく／＼した氣のなさ／＼な男だつたが、娘の出で行つた後を見送りながら、喉を一つ鳴らして欠伸をした。シューピンはベルセーネフに向かつてかう云つた。

『あれはね……あれは、その……こゝに僕の懇意な家族が住んでゐてね……あれはつまりその……君變に氣を廻しちやいけないよ……』かう云ひ終らないうちに、彼は娘の後を追つて駈け出した。

『まあそれにしても、涙だけは拭き給へ』とベルセーネフは叫んだが、こみ上げる笑ひを制しきれなかつた。

けれど宿へ歸つたとき、彼の顔には愉快さうな表情など影もなかつた。彼はもう笑つてゐなかつた。彼はシューピンの云つたことを、冗談にも信じようとは思はなかつたけれど、彼の發した一言は、深くこの青年の胸にしみ込んだ。

『バーエルが僕をからかつてるんだ。』と彼は考へた。『けれど、あの人もいつかは戀ひをするだらうが……一體誰に戀ひをするだらう?』

42
ベルセーネフの部屋にはピアノが置いてあつた。小さなもので新しくもなかつたけれど、やゝ狂つたまゝに、軟い氣持のいゝ調子を保つてゐた。ベルセーネフはその前に坐つて、和音を鳴らし始めた。すべてのロシアの貴族と同様に、彼も少年時代に音楽を習つた。けれど殆んどすべてのロシア貴族と同様

43
にかなり下手な方だつた。たゞ夢中になるほど音楽が好きだつたのである。正確に云へば、彼は音楽に含まれてゐる藝術とか、表現形式とかいふものが好きなのではなかつた（シンフォニーやソナタばかりでなく、オペラでさへも倦意を誘つた）。彼が愛したのは音楽の本然的な力であつた。つまり音の結合や交流が心に呼びさます漢とした、甘美な、取り止めもない、しかも一切を蔽ひ包むやうな感覺なのである。彼は一時間以上もピアノの傍を離れないで、幾度も同じ和音を繰り返したり、さも不器用らしく新しいコンビネーションを搜したり、短七音のところを手を休めながら、消え行く響きにちつと耳を傾けたりした。心臓は弱々しく萎えいたんで、目には幾度も涙が溢れた。けれど、彼はそれを耻づかしいとも感じなかつた。それは闇の中に流れる涙だつたからである。

『バーエルの云ふ通りだ。』と彼は考へた。『今からさういふ豫感がする——かういふ晩は二度とまた來ないだらう。』

漸く彼は立ち上がつて、蠟燭に火を點し、部屋着をひつ掛けた後、書棚からラウメルの『ホーヘンシタウフェン史』の第二巻を取り出した。そして、二度ばかり溜め息をついてから、熱心に讀書をはじめた。

六

その間にエレーナは自分の部屋へ歸ると、明け放した窓の傍に坐つて、両手で頬杖をついた。每晚居

間の窓際で十五分ばかり過ぎるのが、彼女の習慣になつたのである。かういふとき彼女は自分自身と問答して、一日中の行爲を整理するのであつた。彼女は最近満二十になつた。背が高く、顔は浅黒く青みを帯び、丸みを持った眉の下に、淵をたゞへた大きな灰色の目は、あるかないかの雀斑にとりまかれてゐた。額と鼻は殆んど一直線をなし、口はひき緊り、頤はかなり尖つてゐた。黒みがゝつた栗色の編み毛は、ほつそりした頸筋に低く垂れてゐた。彼女の體全體——注意深い、幾分ものに驚き易さうな顔の表情にも、明るけれど變はり易い眼ざしにも、妙に緊張したやうな微笑にも、なだらかな落ちつきに缺けた低い話し聲にも、何となく神経的な、電流のやうな激しさと、性急さが感じられたので、多くの人は彼女を美しいと認めないばかりか、却つて反感さへ懷きはせぬかと、思はれるほどであつた。手は細くて桃色を帯び、指が長かつた。足もやはり細かつた。彼女は少し前屈みにさつさと歩いた。それは殆んど突進といふやうな感じだつた。

44

彼女の生ひ立ちには甚だ奇怪なものであつた。始め父を崇拜してゐたが、やがて母に熱烈な愛情を懷くやうになつた。そして最後は、その兩方に對して冷淡になつて了つた。殊に父に對してこの變化が激しく目立つた。最近彼女は、母親をまるで病身な祖母でも扱ふやうにした。始め彼女が神童の評判をとつてゐたころ、父は彼女を自慢の種にしてゐたが、大きくなつてからは、彼女を恐れ始めた。そして娘のことを「まるで感激性の強い共和黨員だ、一體誰に似たのだらう！」と云ひ云ひした。人間の弱點は彼女を憤慨させ、愚劣さは怒りを呼びさました。そして虚偽となると、金輪際赦すことが出来ないのである。

つた。彼女の要求は、何ものに對しても譲ることを知らず、彼女の祈りにはしばしば非難がまじつた。どんな人でも、一旦彼女の尊敬を失ふと（彼女は他人に對する裁きを性急に決定した。餘り性急すぎることも珍らしくなかつた）、もうその人は彼女にとつて、存在しないのも同じだつた。すべての印象は彼女の魂にかつきりと力強く印せられた。生活は彼女にとつて樂な仕事ではなかつた。

アンナ夫人が娘の教育の仕上げ方を頼んだ家庭教師は（ついでに云つておくが、生活に倦怠を感じたこの貴婦人は、始めから娘の教育に手を付けなかつたのである）、破産したロシアの收賄官吏の娘で、専門學校の出身であつた。恐ろしく感傷的な、人のいゝ、その癖まやかしな所のある女で、のべつ戀ひしてばかりゐたが、結局千八百五十年、エレーナが満十七歳になつたとき、どこかの將校と結婚したが、すぐに棄てられて了つた。この家庭教師は非常な文學好きで、自分でも詩など作つてゐた。彼女はエレーナに讀書の趣味を植ゑつけたが、エレーナは讀書だけでは満足できなかつた。彼女は幼い頃から實行——實行的な愛に渴してゐたのである。

夜のそ

貧しき者、飢ゑた者、病める人々は、彼女の注意を呼び醒まし、不安を掻き立て、精神的苦痛を與へるのであつた。彼女はかういふ人々を夢にさへ見た。そして知人といふ知人に、彼等のことを根掘り葉掘り聞いた。施し物をするときの態度なども通り一遍のものでなく、自分でそれと意識しないけれど、さうした行爲を重大視して、殆んど興奮の情さへ示すのであつた。すべて苦しめられ虐げられてゐる動物は、屋敷内の瘠せ犬、死を宣告された仔猫、巢から落ちた雀の子は云ふまでもなく、虫けらや蛇の類

にいたるまで、エレーナの守護を受けないものはないほどだった。彼女は少しも厭な顔をせず、自分で彼等に餌をやった。母はそれを止めだてしなかつた。けれどその代り、父親は娘のやり方に不満を洩らし、下司の愛情だと云つて罵つた。そして家の中は犬や猫で、足の踏み場もないと云ひ云ひした。

『レーノチカ』と彼はよく娘に云つた。『早くおいで、蜘蛛が蠅の血を吸つてるよ。この不幸な生き物を助けてやらなくちや!』するとレーノチカはさも心配さうに駈けつけて、蠅を救ひ出した上に、その足から蜘蛛の絲を取つてやるのであつた。『ふむ、お前がそんなに親切な子なら、今度は自分の血を吸はしてやるがよい。』と父親は皮肉を云つたが、彼女はそんな言葉に耳をかさうともしなかつた。

十の年にエレーナは、カーチャと云ふ乞食の娘と知り合ひになつて、よくこの娘と會ひに内證で庭へ出て行つた。その度に彼女は甘いものを持つて行つてやつたり、頭へ被る布や、十錢銀貨を恵んだりした。——たゞ玩具だけはカーチャの方で取らなかつた。彼女はこの娘と並んで葎の茂つた淋しい庭の片隅で、乾いた土の上に腰を下ろした。そして喜ばしい謙抑の情を感じながら、カーチャの持つてゐる堅いパンを噛り、その物語りを聞くのであつた。カーチャには年取つた意地悪の叔母さんがあつて、この老婆がよく彼女を打つた。カーチャはこの叔母さんを憎んでゐたので、そのうちにこの叔母さんの傍から逃げ出して、勝手に廣い世の中で暮らす楽しみを、始終空想してゐた。エレーナは心の中に尊敬と恐怖の念を秘めながら、かうした耳馴れぬ新しい言葉を聞き澄まし、ぢつと穴の明くほどカーチャの顔を見つめてゐた。そのときエレーナの目には、彼女の持つてゐる一切のもの——殆んど野獸じみるほど

素げしつこく動く黒い目も、日焼けのした手も、妙に籠もつた細い聲も、方々破れた着物さへも、何かしら一種特別な、神聖に近いものゝやうに思はれた。

エレーナは家へ歸つてから後も、長い間乞食たちのことや、神のみ心のことなど考へ續けた。胡桃の枝を切つて杖を造り、袋を首にかけて、カーチャと一緒に家を逃げ出し、矢車草で編んだ冠を被つて、方々の街道を彷徨ひ歩く場景を、心の内に描くのであつた。彼女は一度カーチャがかういふ冠を被つてゐる姿を見たのである。もしかかういふ時に誰か家の者が入つて來ると、彼女は如何にも不機嫌さうな顔をして、不愛想な上目づかひをした、あるとき彼女は雨の降る中を、カーチャとあひびきに出かけて行つて、着物を汚して了つた。父親はそれを見て、汚らしい百姓娘と云つた。エレーナはかつと眞つ赤になつた——そして彼女は恐ろしい、不思議な氣持になつた。カーチャはよく半分野蠻性を帯びた、兵隊歌のやうなものを歌つてゐた。で、エレーナはこの歌を聞き覚えて了つた。アンナ夫人はふとそれを洩れ聞いて、恐ろしく憤慨した。

『お前は一體どこからそんな厭らしいものを習つて來るの?』と彼女は娘に尋ねた。

夜のそ
『お前はたゞ母をじろりと見たきりで、一言も口をきかなかつた。彼女は自分の秘密を打ち明けるよりも、八つ割きにされる方がまだしもだと感じた。するとまた彼女は恐ろしいやうな、甘い心持ちになつた。もつとも、カーチャとの交際は長く續かなかつた。不幸な娘は悪性の熱病に犯されて、四五日の夜中に死んで了つた。』

エレーナはカーチャの死を聞いたとき、悲しみの餘りしばらくは夜も寝られなかつた。乞食娘の最後の言葉は絶えず耳の底に響いて、彼女を呼び招くやうに思はれた……

かうして月が移り、年が變はつた。まるで雪の下を流れる水のやうに、エレーナの青春は外面的な無爲と、内面的な闘争と不安の中に、音もなく流れて行つた。彼女には友達といふものがなかつた。スターホフ家に入入りする令嬢たちの中で、彼女と親しくするものは一人もなかつた。エレーナは兩親の権力に壓迫されるやうなことがなかつたので、十六歳の頃からは、もう殆んど一人立ちになり切つてゐた。彼女は自分自身の生活を生き始めたが、それは孤獨な生活であつた。彼女の心は一人淋しく燃え上がつたり、消えたりした。そして、籠の中の小鳥のやうにも掻き通したが、しかし別に籠らしいものはなかつた。誰も彼女を壓迫したり、掣肘したりするものはなかつたけれど、それでも彼女は悶えたり、惱んだりしてゐた。彼女はどうかすると、自分でも自分が分からなくなつて、われながら恐ろしくなる事さへあつた。彼女を取り巻いてゐるすべてのものが、無意味なものともつかなければ、不可解なものともつかないやうに思はれた。

「どうして愛なしに生きて行けよう？ しかも愛すべき人なんか誰もいない！」と彼女は考へた。かういふ想念、かういふ感覺のために、彼女は恐ろしくなつた。

18の年に彼女は質の悪い熱病にかゝつて、殆んど危く死にかゝつた。もと／＼健康でしつかりしてゐた彼女の肉體組織も、根本的な震撼を受けたために、長い間もとに歸ることが出来なかつた。やつと

のことで、病氣の痕跡が名残りなく消えて了つたけれど、父親は、いつまでも多少意地悪い調子で、彼女の神経質なことを零してゐた。どうかすると、彼女は自分が何か途徹もないことを望んでゐる。ロシヤ中の誰一人考へもつかない事を望んでゐる、といふやうな氣持ちがした。その後、心が靜まつて來ると、彼女は自分で自分を笑つて、一日々々と暢氣にすごして行つたが、また不意に何とも名のつけやうもない激しい感情が、内部に沸き立つて、外へはけ口を求めて止まなかつた。さうなると、彼女はもう抑へつける事が出来なかつた。やがてこの嵐も通りすぎて、疲れた翼は遂に大空へ飛び昇らずに、ぐつたり垂れて了ふのであつた。けれどかうした發作は、何かの跡を残さずには濟まなかつた。どんなに内部の苦悶を現はすまいと努めても、騒ぎ立つた心の悩みは、かへつて表面の落ち付いた態度に感じられた。で、兩親はよく肩をすくめて、彼女の『奇妙な癖』に驚いたり、小首を傾けたりするのであつた。

この物語りが始まつた當夜、エレーナはいつもより長く窓の傍を離れなかつた。彼女はベルセーネフのことや、彼と話し合つたことを、いろ／＼に考へて見た。彼女はベルセーネフが氣に入つたのである。彼の感情の温かさ、その考への純眞さを信じたのである。ベルセーネフはこの晩ほど彼女を相手に、澤山口敷を利いた事がなかつた。彼女は彼の臆病らしい目つきや微笑を思ひ出して、自分でもにつこり笑ひながら考へ込んだが、それはもうベルセーネフのことではなかつた。彼女は明け放した窓越しに夜を眺め始めた。長い間、低く垂れかゝつた暗い空を眺めてゐたが、やがて立ち上がつて、顔に垂れた髪を頭で振り拂ひ、自分でも何のためか知らずに、冷えた露な兩手を空へ向けて差し伸べた。それからこ

その両手をぐたりと落すと、寢臺の前に膝をついて、顔を枕に押しつけた。そして、急に襲つて來た感情に負けまいと、一生懸命に努力したけれど、たうとう奇妙な譯の分からぬ、熱い涙を流して泣き出した。

七

翌日十一時ごろに、ベルセーネフが歸り車をつかまへて、モスクワへ出かけた。彼は郵便局で金を受け取り、少しばかり本を買ひ込んだ上、その序にインサーロフに會つて、話しがしたかつたのである。ベルセーネフは昨日シュービンと話しをしてゐる中に、ふとインサーロフを自分の別荘へ呼ばばうと、考へついたのである。

けれど、容易にインサーロフを捜し當てることが出来なかつた。インサーロフは前の下宿を引き拂つて、別の家に移つてゐたが、そこまで行き着くのが大變だつた。それは、アルバートとボワルスカヤの間に建てられた、ペテルブルグ風の不恰好な石造家屋の裏庭にあつた。ベルセーネフは方々についてゐる汚ならしい入り口を、あちらこちらと空しく彷徨ひ歩きながら、庭番や通りすがりの見知らぬ人に尋ねて見た。ペテルブルグでも庭番といふものは、尋ねて來た人の視線を避けようとするものだが、モスクワでは尙さらである。誰一人として、ベルセーネフへ答へようとするものがなかつた。たゞ肩に鼠色の絲を一かせ載せた物好きな仕立て屋が、上着をぬいだチョッキ一つの姿で、片目に傷のある、剃刀を當てない燻つたやうな顔を、高い通風窓から黙つてぬつと突き出したのと、馬糞の山の上へ登つた角のな

い黒山羊が、こちらへふり向いて、哀れつばい鳴き聲を立てた後、前より一層忙しさに食みかへしを始めたくらゐのものである。やつとの事で、古外套をひつかけて、ひどい長靴をはいたどこかの女が、ベルセーネフの困つてゐるのを見かねて、インサーロフの下宿を教へてくれた。

インサーロフは幸ひ家にゐた。彼が間借りしてゐたのは、通風窓から平然として彼の難儀を見物してゐた、例の仕立て屋の家であつた。殆んどがら明きになつた大きな部屋で、黒つばい緑色の壁には四角な窓が三つついてゐた。片隅には小さな寢臺が置いてあり、反對側の隅には、革張りの長椅子が据ゑてあつた。そのほか天井の眞下に、大きな鳥籠がぶら下がつてゐた。その中にはかつて鶯が棲んでゐたものである。

インサーロフは、ベルセーネフが入り口の鬮を跨ぐが早いか、つか／＼と出迎へるやうに進み寄つたが、別に「やあ、君か！」だの「これは思ひがけない！ どういふ風の吹き廻しで？」だのと云ふやうな叫び聲を立てなかつた。それどころか「今日は」さへも云はなかつた。彼はたゞベルセーネフに握手したゞけで、たつた一つしかない椅子に案内した。

「掛け給へ。」と彼は云つて、自分もテーブルの端に腰を下ろした。

「まだご覧の通り、とり散らしてゐてね。床の上に積み上げた本や書類の山をさしながら、インサーロフはかう云ひ足した。『まだ設備萬端、整へるところまで行かないんだよ。暇がなくてね。』

インサーロフのロシア語は完全に正確で、一語々々の發音もしつかりして、生粹なものと云ふことが

出来た。もつとも喉の奥から出るやうな聲が、氣持ちよくは感じられたけれど、何となく非ロシア的な響きを帯びてゐた。インサーロフが外國生まれだと云ふ事を(彼はブルガリヤ人であつた)一そう明瞭に示してゐるのは、その容貌であつた。彼は年頃二十四五の、瘦せた、腺病質らしい青年で、胸は厚みがなく、手は筋だらけであつた。顔の輪廓はすべてきつぱりとしてゐた。眞ん中に段のついた鼻、青みがかつて見えるほど黒い癖のない髪、狭い額、ちつと物を見つめる癖のある小さい窪んだ目、濃い眉――そして美しい眞つ白な齒は、彼がにつこり笑ふと、餘り緊まりすぎるほど緊まつた薄い唇の蔭から、瞬間的にちらりと覗くのであつた。彼は古いけれど小ざつぱりした制服を着て、上から下まできちんと一つ残さず釦を掛けてゐた。

『君はどうして前の下宿を引き拂つたんだね?』とベルセーネフは尋ねた。

『こちらの方が安いからさ。それに大學にも近いし。』

『だつて今は休暇ぢやないか……それに夏市中で暮らすなんて、いゝ物好きだね! 越すことに決めたくらゐなら、別荘でも借りたら好きさうなものに。』

インサーロフはこれに對して、なんにも返事をしなかつた。そして、ベルセーネフにパイプを勧めながら『失敬、紙巻きも葉巻きも持つてゐないんだよ。』と云つた。

ベルセーネフにパイプを吹かし始めた。

『實はね、』と彼は言葉を續けた。『僕クンツォの近くに、小さな家を借りたんだ。實に安くつて、實

に便利なのさ。さういふ譯でね、餘分な部屋まで二階についてるんだよ。』

インサーロフは今度もまるで返事をしなかつた。

ベルセーネフは煙草の煙りを吸ひ込んだ。

『で、僕はこんなことまで考へたんだよ。』細く煙りを吐きながら、彼はまたかう云ひ出した。『もし假りに誰か……例へば君でもいゝと思ふんだがね……もしひよつと……もし僕の家の一階に入ることを同意してくれたら……どんなにかいゝだらうな! ドミートリイ、君どう思ふ?』

インサーロフは例の小さな目で、ちらと彼を見上げた。

『ぢや、君の別荘で一緒に暮らさうと、勧めてくれるんだね?』

『さうなんだ。二階に餘分な部屋があるんだもの。』

『有り難う、アンドレイ、しかし僕の財政は、そんなことを許すまいと思ふよ。』

『と云つて、一體どう許さないんだね?』

『別荘住まひなど許してくれないんだ。僕は二所に宿を持つ譯に行かないよ。』

『だつて僕は……』とベルセーネフは云ひかけて、言葉を止めた。『さうしたからつて、君に餘分な出費がかかる譯ぢやないんだがね。』と彼は言葉を續けた。『そりやまあ、こゝの部屋はこのまゝにしとかなくちやなるまいが、その代り向かうは萬事が極めて安直なんだからね。たとへば食事なども一緒にするやうに、取り計らふことだつて出来るぢやないか。』

インサーロフは黙つてゐた。ベルセーネフは、間が悪くなつて来た。

『とにかく、そのうちにいつか訪ねてくれ給へな。』しばらくたつて、彼はまたかう云ひ足した。『僕のうちからつい一足の所に、君に是非紹介したいと思ふ家族が住んでゐるんだ。その令嬢がどんなに素
てゐるが、なか／＼立派の才能の所有者だよ。君はこの男とも気が合ふに相違ないと思ふよ（ロシア人
は何もほかに材料がないと、自分の知人をもてなしに使ひたがるものだ）。全くやつて來給へな。けれど
それよりか、いつそ引越して來るといふんだよ。一緒に仕事をしたり、本を讀んだりしようぢやない
か……僕はね、君、歴史と哲學を専攻してゐるので、君にも興味があるだらうと思ふよ。本も澤山ある
し。』

インサーロフは立ち上がつて、部屋の中を一廻りした。

『失敬だが、聞かしてくれ給へ。』彼はたうとうかう尋ねた。『君の別荘は家賃いくらなんだね？』

『百ルーブリだ。』

『そして部屋数は？』

『五間。』

『して見ると、まあ一間二十ルーブリといふ勘定になるね？』

54 『勘定……飛んでもない話だ。だつて、それは僕にとつて、まるでいらぬ部屋なんだもの。てん

『そりやさうかも知れないが……ぢや、かういふ事にしよう。』インサーロフは斷乎とした、同時に率
直な表情で頭を一振りしながら、かう云ひ足した。『もし君がその計算で割り前をとつてくれたら、僕は
その場合ひにのみ、君の提言を容れることが出来る。二十ルーブリの金なら、僕にも拂ふ力がある。殊
に君の話によると、その他の點で節約が出來さうだからね。』

『そりや無論だよ。しかしどうも気がさすね。』

『その條件以外ぢやお斷りだよ、アンドレイ。』

『ぢや、どうとも好きにし給へ。だが、君も随分強情だね！』

インサーロフは今度もやはり返事をしなかつた。

二人の青年は、インサーロフの移轉の日取りを打ち合はせた。二人は亭主を呼んだ。亭主は始め娘を
よこした。それは大きなけぼしした布（ぬい）を頭に被つた、七つばかりの女の子だつた。娘はインサーロフの
云つた事を注意深く、殆んど恐ろしさうな様子で聞き終ると、黙つて部屋を出て行つた。やがてその後
から、臨月近い腹を抱へた身重の母親が現はれた。やはり頭に布を被つてゐたが、たゞ型が小さかつた。
インサーロフは今度クンツォフ附近の別荘へ越して行くが、この部屋はやはり借りたまゝにして、荷物
を預けて行くと説明した。仕立て屋の女房もやはり憎えた様子で、奥へ引つ込んだ。最後に亭主がやつて
來た。この男は始めすつかり合點したらしい様子で、たゞ考へ深さうな調子で『クンツォフの附近？』

そ
と言つたばかりだったが、後になつてから急に口を明けて、「部屋はやはりあんたのものとして置くんで
すかね？」と喚いた。インサーロフはその不安を鎮めてやつた。
夜前
『だつて、はつきりさせとかなけりやなりませんからね。』と仕立て屋はいかつい聲で云つて、そのま
ま姿を隠した。

ベルセーネフは自分の成功に満足しきつて、わが家をさして歸つて行つた。インサーロフはロシヤ人
に珍らしい殷懃な、愛想のいい態度で彼を戸口まで見送つた。そして一人になると、上着をぬぎすて、
書類の片付けにかゝつた。

八

56
その日の夕方、アンナ夫人は客間に坐り込んで、今にも泣き出しさうな様子をしてゐた。部屋の中に
は夫人のほかに、ニコライ・スターホフと、その叔父に當たるウプール・スターホフといふのがゐた。
このウプールは六十歳ばかりの退職少尉で、體を動かすのも大儀なほど、でぶ／＼に肥え、黄色な腫れ
ぼつたい顔に、睡むさうな黄色い目をしよ／＼させ、血の氣のない厚い唇を突き出してゐた。彼は退
職になつてから、ずつと引き續きモスクワにゐて、商家生まれの妻君が残した小金の利子で暮らしてゐ
た。彼は何ひとつしなかつたばかりでなく、ほとんど考へる事さへなかつたらしい。もし考へるやうな
ことがあつたら、その考へを腹の中にしまつておく質だつた。彼は一生涯にたつた一度だけ興奮して、

57
活動性を示したことがあつた。それはほかでもない、倫敦の萬國博覽會に出品されたコントルポツバルデン低音喇叭
と稱する新樂器のことを新聞で讀んで、この樂器を取り寄せようといふ望みを起こし、何といふ事務所
を通じて、どこへ金を送つたらいいのかと、そんな事まで問ひ合はしたほどである。ウプールはいつも
ゆつたりした煙草色のフロツクを着て、白いハンカチを頸に巻いてゐた。そして、多量にかつ頻繁に食
事をするのが好きだつた。彼はたゞ困つた時だけ、つまり何か意見を吐かなければならなくなつた時に
限つて、右手の指を痙攣的に宙に動かす癖があつた。始め拇指から小指を動かし、それからまた反對運
動に移りながら、やつとのことで「何とか、その……しなけりや……」と云ふのであつた。
ウプールは窓際の肘椅子に腰をかけて、緊張した息づかひをしてゐた。ニコライは兩手をポケットに
突つ込んだまゝ、大股に部屋の中を歩き廻つてゐた。その顔には不満の表情が讀まれた。
たうとう彼は立ち止まつて、小首をひねつた。

『さやう』と彼は口を切つた。『わしらの青年時代には、教育法かまるで別だつた。若い者が年長者を
馬鹿にするやうなことは、夢にも考へなかつたものだ。ところが、この頃はたゞ見て呆れるばかりだ。
或ひはわしの方が間違つてをるかも知れん。或は彼等の方が正しいのかも知れん。しかし、わしには自
分の考へ方といふものがある。わしもまんざら凡くらに生まれついた譯ぢやないからな。あなたこの點
をどう思ひますか、叔父さん。』

夜前
ウプールはたゞ相手の顔をちらと見て、指をひら／＼動かしたばかりである。

『早い話しがエレーナだ。』とニコライは言葉を續けた。『わしはエレーナの氣持ちが分からん、全くだ。あれの目から見ると、わしはまだ高尚さが足らんらしい。あれの心は實に博大なもので、ちつぽけな油蟲や蛙を始めとして、自然界全體を抱擁するに足るほどだが、たゞ血を分けた父親だけは例外なのだ。まあ結構なことさ。わしもそれを心得てをるので、敢へて干渉がましい事をせんよ。何分そこには神經と、學問と、高遠な理想がごつちやになつてをるので、これはもうわしなどの専門外だ。ところがシュービン先生となると……そりや實際すばらしい非凡な藝術家だらう。それはわしも強^{あな}ち否定せんよ。しかし年長者に對して、何といつても、その、いろ／＼厄介をかけてゐる人間に對して、輕蔑がましい態度をとるにいたつては、正直なところ dans mon gros bon sens (如何にわしが特別善良な性質の人間だと云つても) 打ち棄てておろすにいかん。わしは生來やかましい方ではないが、萬事につけて程といふものがある。』

『どうしてシュービンさんはいらつしやらないの?』と彼女は云つた。『何だつていつまでも待たされるんだらうね?』

ニコライは肩をすくめた。

『だが、一體なんだつてあれを呼ぶんだね? わしはそんなことを少しも要求しちやをらん。却つて望ましくなくらくらゐるだ。』

『どうしてといふ事がありますか、あなた? あれはあなたのお氣持ちを悪くして、せつかくの治療

を邪魔したかも知れないぢやありませんか。わたしはあれに話しをしなくちやなりません。あれがどうしてあなたのお腹を立たしたか、それをわたしは知りたいのでございます。』

『繰り返して云ふが、わしはそんな事を要求しちやをらんよ。何も物ずきに……devant les domestiques (召使さん)……』

アンナ夫人はやゝ顔を赤らめた。

『あなた、そんな事をおつしやるつて法はありませんわ。わたし一度も devant les domestiques ……さあお行き、フェデューシカ。そしていゝかい、すぐこゝへシュービンさんをお連れして來るんだよ。』

男の子は出て行つた。

『そんな事はまるで不必要なんだ。』とニコライは齒の間から押し出すやうに云つて、また部屋の中を歩き廻りにかゝつた。『わしは決してさういふ積りで、話しを持ち出したんぢやないよ。』

『何をおつしやいます、パーエルはあなたにお詫びをしなくちやなりませんよ。』

『飛んでもない、あいつの詫びなんか聞いて何になるんだ? それに、詫びとは一體なんだらう?』

たゞ口先ばかりぢやないか。』

『何になるといふ事がありますか? あれに云ひ聞かせなくちやなりません。』

『それぢやお前自分で云ひ聞かせなさい。お前の云ふことの方をよく聞くだらう。わしは何もあれに

そ 云ひ分はないんだから。」

夜の 前 『いえ、あなた。あなたは今日いらつしやると早々から、ご機嫌が悪いんですもの。わたしのお見
うけしたところでは、あなたはこの頃お瘠せになつたくらゐですわ。あなたの治療もきゝ目がないうち
やないか、といふ氣がしてなりません。』

『治療は是非しなくちやならないんだよ。』とニコライは注意した。『わしの肝臓はちと具合が悪いの
でな。』

この瞬間シュービンが入つて來た。彼は疲れてゐるやうに見うけられた。殆んどあるかないかの軽い
冷笑が、唇の上に躍つてゐた。

『叔母さん、僕をお呼びになつたのですか?』と彼は口を切つた。

『えゝ、そりや呼びましたとも。冗談ぢやありませんよ、パーエル、何て恐ろしい事せう。わたし
はお前のすることが誠に氣に入りません。叔父さまを蔑ないがしろにするなんて、よくそんなことが出來たもの
だね!』

『叔父さんが僕のことを云ひつけたんですか?』とシュービンは尋ねながら、例の微笑を唇に浮かべ
たまゝ、スターホフを見やつた。

『こちらは顔を反けて、目を伏せた。』

60 『さうです、お云ひつけないすつたのです。お前がどんな粗忽をしたか知らないけれど、お前は今すぐ

お詫びをしなくちやなりません。だつて叔父さまはいま、大變健康を害してゐらつしやるんだからね。
それに、人は誰でも若いときには、恩のある人を尊敬しなくちやならないものです。』

『へえ、大變な論理だな!』とシュービンは考へた。それから彼はスターホフの方へ向いて、

『叔父さん、僕はいつでもあなたにお詫びするのを辭さない積もりです。』と恭々しく頭を下げながら
云つた。『もし僕が本當にあなたに對して、何か失禮な事をしたとすれば。』

『わしは何も……決して』相變はらずシュービンの視線を避けながら、ニコライはかう云ひ返した。

『もつとも、わしは喜んで君を赦して上げるよ。君も知つてをる通り、わしは喧しく云はない人間だか
らな。』

『あゝ、それは少しも疑ふ餘地のない所です!』とシュービンは云つた。『しかし、ちよつとももの好き
に聞かして戴きたいのですが、アンナ叔母さん僕の罪がどこにあるのか、ご承知なんですか?』

『いえ、わたしは何も知りませんよ。』とアンナ夫人は口を入れて、ぐいと頸を伸ばした。

『あゝ、何たることだ!』とニコライは急せきこみながら叫んだ。『わしはかういふ押し問答や、芝居じ
みた眞似が大嫌ひだと、これまで何遍云つたか知れやせん。この事はお前にもよく頼んでおいたぢやな
いか! 家庭の團欒だとか interieurs (の内部) とか云つて、家族は持つべきもののやうに説かれてをる

夜の 前 すが、いつだつて家へ歸つて、ゆつくり休まうと思ふと、すぐにこんな芝居じみた不愉快な騒ぎが持ち上
がるので、少しもゆつくりと落ち付けはせん。だから仕方なしに、クラブだとか、それとも……それと

その、ほかの所へ出かけるやうになるのだ。人間は生身のものだから、自分自身の生理もあり、要求もある譯だ。そこへもつて来て……」

ニコライは云ひさした言葉を尻切り蜻蛉にしたまゝ、いきなり部屋を飛び出して、戸を手荒に叩きつけた。アンナ夫人はその後を見送つた。

『クラブですつて？』と彼女は悲痛な調子で囁いた。『あなたはクラブへいらつしやるのぢやござんすまい、この浮氣者！ クラブにはわたしの牧場で上げた馬なんか、贈りものにするやうな人はありやしない——おまけに葦毛の二頭揃ひを！ あれはわたしの大好きな毛色だつたのに、あゝ、あゝ、何て軽はずみな人だらう。』と彼女は聲を高めて云ひ添へた。『クラブなんかへいらつしやるのぢやござんすまい。ところで、パーエル。』と彼女は立ち上がりながら、言葉を續けた。『お前よく恥づかしくないことだねえ！ もう小さな子供でもない筈なのに。お蔭でわたしは頭が痛くなつて来た。ゾーヤはどこにあるか、お前知らない？』

『二階の居間にゐるらしいです。あの要領のいゝ女狐は、かういふ天氣模様だと、いつも自分の穴に隠れますからね。』

『おや、どうしたんだらう、どうしたんだらう！』とアンナ夫人は身の廻りを捜し始めた。

『おろしわさびを入れたわたしの杯を、どこかで見なかつたかえ？ パーエル、後生だから、これからわたしを怒らせないやうにしておくれ。』

『あなたを怒らせるところですか、叔母さん！ 一つあなたの手を接吻さして下さい。ところで、あなたのわさびは書齋の小テーブルの上で見ましたよ。』

『ダリヤつたらいつもどこかへ置き忘れるんだからね。』とアンナ夫人は云つて、絹服をさら／＼鳴らしながら出て行つた。

シューピンはその後から出て行かうとしたが、ふとウプールのゆつくり呼びかける聲を聞いて、彼はそこに足を止めた。

『お前のやうな青二才は、あんな手ぬるいことになしに……うんと取つちめてやればよかつたんだ。』と退職少尉はゆつくり間を置きながら云つた。

シューピンはその傍に近寄つた。

『何だつて僕をとつちめなくちやならないんですか、敬愛すべきウプール叔父さん？』

『何のためだつて？ お前はまだ若造なんだから、尊敬しなくちやいかんよ。さうだとも。』

『誰をです？』

『誰をつて、分かりきつとるぢやないか。生意氣はいゝ加減にしろ。』

シューピンは胸の上に両手を組み合せた。

『あゝ、あなたはロシア村落の共同精神の代表者ですね。』と彼は叫んだ。『あなたは黒い土の中から生えぬいた力です、世界的建築の礎石です！』

ウヴァール老人は指をひらくと動かし始めた。

『よしてくれ、お前、煽てちやいかん。』

『なるほどね。』とシューピンは言葉を續けた。『どうやらもう若い人でもないやうだが、何と子供らしい、幸福な信仰を藏してゐることだらう！ 尊敬しろだつて！ ねえ、尊敬すべきわが原始人、どうしてニコライ叔父さんが僕に腹を立てゝゐるか、あなたその譯をご存じですか？ 實はね、わたしは今日午前中、あの人と一緒に例の獨逸女の家にゐたんですよ。そして三人で「わが傍を離れ給ふな」を歌つたんですよ。こいつあなたに聞かしたかつた。これにやあなたも閉口したでせうよ。そこで彼等はさうん／＼歌ひ抜いたんだが、その中に僕は厭氣がさして來た。どうも餘り甘つたるすぎて、困りもんだと思つたのです。そこで僕は二人をからかひにかゝつたところ、それがうまく行つたんです。始め獨逸女は僕に腹を立てたが、やがて大將にくつてかゝるやうになつた。すると今度は大將が獨逸女に腹を立てて、俺は家にゐる時だけが幸福だ、家庭だけが天國だ、とやつたものです。で、女は大將に向かつて、あなたは徳義心を持つてゐない、と云ひ返した。僕は女に向かつて獨逸語で「ゴッ！」と云つてやつたものです。それから大將は歸つて、僕だけ残つた譯です。だから大將はこゝへ、つまり天國へやつて來たんだが、天國でもやはりくさくさする。まづかういふ次第で、先生ぶつ／＼云ひ出したんですよ。さあ、これでいよく誰が悪いか、あなたのご意見は如何ですか？』

『勿論、お前だ』とウヴァール老人は斷定した。

シューピンはその顔に目を据ゑた。

『尊敬すべきわが古武士先生、敢へて伺ひますが、』と彼はわざとらしく恭しい調子で切り出した。『その謎めいた言葉を發せられたのは、あなたの思考能力の作用の結果でせうか、それとも音と稱せられる空氣振動を惹起したい、刹那的要求の示唆によるものでせうか？』

『煽てちやいかんと云ふのに。』とウヴァール老人は呻くやうに云つた……

シューピンはから／＼と笑ひながら、部屋の外へ驅け出した。

『おい。』十五分ばかり経つてから、ウヴァール老人は叫んだ。『そのなんだ……ヨートカを一杯持つて來い。』

走り使ひの男の子が、ヨートカと下物を盆に載せて持つて來た。ウヴァール老人はそつと杯を盆からとつて、長い間一生懸命に見つめてゐた。それは自分の手に持つてゐるものが、何かよく分らないやうな按配だつた。それから彼は男の子を眺めて、お前はワシカと云はなかつたか、と尋ねた。やがて悲しげな顔つきをしながら、ヨートカを一息に飲んで、下物を頬ばると、ハンカチを取りに隠しへ手をやつた。けれど男の子は、もう盆をもとの所へもつて行つて、鯨の残りを平げて了つた上、且那樣の外套の傍に身を縮めて、いつの間にか寢入つて了つた。ところが、ウヴァール老人はいつまでも指を擡げて、ハンカチを目の前に支へたまゝ、例の緊張した目つきで、窓と、床と、壁をかはる／＼見つめてゐた。

シューピンは離れの居間へ歸ると、本の頁を開いた。その時ニコライの従僕がそつと部屋へ入つて、大きな紋章つきの封印をした、小さな三角形の封筒を彼に渡した。その中にはかう書いてあつた。

『君は恐らく潔白な人間として、けさ話しのあつた手形のことを、おくびにも出してくれないこと、信ずる。わたしの態度も、平素の信條も、金額の些小なことも、その他さまざま事情も、君はよく承知のことと思ふ。そのみならず、當然他人として尊重すべき、家庭内の秘密といふものも存在する。家庭の平和といふものは、たゞ魂を持たぬ者のみが、敢へて否定し得る神聖無比なもので、わたしは前をさういふ人間の仲間とは考へない！(この手紙は一讀後返却せられ度し) N・S』

シューピンはその下に鉛筆で走り書きした。

『ご安心下さい、わたしはまだ人のポケットから、ハンカチを盗むやうな事はしません。』

彼は手紙を従僕に返して、また讀書にかゝつた。けれど間もなく、本は彼の手から滑り落ちた。彼は赤く染まつて行く夕空や、木立ちから別に離れて立つてゐる、二本の逞しい松を眺めながら、かう考へた。

『晝間は松は青みがゝつてゐるが、夕方になると、何て素ばらしい緑色に變はるのだらう』
彼は心中ひそかに、エレーナに出あふだらうと期待しながら、庭へ下りて行つた。豫感ば彼を欺かな

かつた。遙か向かうの灌木に包まれた小道に、彼女の服がちらりと見えた。彼はすぐ追ひついて、エレーナと肩を並らべながら、かう云ひ出した。

『僕の方を見ないで下さい。僕はそれだけの価値もない人間です。』

彼女はちらとシューピンを見て、ほんの申し譯につこり笑ふと、ずん／＼庭の奥の方へ歩いて行つた。シューピンはその後から續いた。

『僕は、こちらを見ないで下さいと頼みながら、しかもあなたに話しかけてゐる。』と彼は云ひ出した。

『これは明瞭な自己撞着です！しかしそんな事はどうでもいゝ。僕としちや始めての事ぢやありませんからね。僕は今思ひ出しましたが、まだ昨日の馬鹿げた行爲について、お詫びらしいお詫びをしてゐませんでしたね。あなた、僕に腹を立てゝはゐらつしやいませんか、エレーナさん？』

彼女は歩みを止めたが、すぐには返事をしなかつた——それは腹を立てゝゐた爲ではなく、たゞ彼女の想念が遠くかけ離れてゐたからである。

『いゝえ。』彼女はやつとかう云つた。『わたしちつとも怒つてなんかゐませんわ。』

シューピンは唇を噛んだ。

『何といふ心配さうな……そして、何といふ無關心な顔つきだらう！』と彼は呟いた。『エレーナさん、』と彼は聲を高めながら、言葉を續けた。『僕にちよつとしたアネクドットを話さして下さい。僕に一人の友人がありました。この友人にまた友人があつて、始めはちやんとした、人間らしい振る舞ひをし

てゐましたが、その後酒に身を持ちくづして了ひました。ある朝早く、友人が往來でこの男に出あつたのです。(いひ忘れましたが、二人はすつかり疎遠になつてゐたのです) あつて見ると、先生やはり酔つ拂つてゐる。友人はいきなりそつぽを向いて了ひました。すると先方は傍へよつて来て、かう云つたものです。「僕はね、君がお辭儀をしないからつて、そんなことで腹を立てやしないが、何だつてそつぽを向くんです？ もつとも、僕は氣分がくしゃくしゃするので、こんなことを云ふのかも知れない。わが亡き骸がらに平安あれ！」

シューピンは口を噤んだ。

『それだけ？』とエレーナは尋ねた。

『それだけです。』

『わたし分かりませぬわ。一體それは何のことですか？ あなたは今わたしに、そちらを見るなどおつしやいましたね。』

『え、ところが今度は、そつぽを向くのはよくないつて話しをしたんですよ。』

『一體わたしが……』とエレーナは云ひかけた。

『さうぢやないとおつしやるんですか？』

エレーナは心もち顔を赤らめて、シューピンに手をさし伸べた。彼はそれを堅く握りしめた。

『今あなたは、わたしがよくない氣持ちを持つてゐるやうに邪推して、旨くその尻尾を掴んだと思つ

てゐらつしやるかも知れませんが、』とエレーナは云つた。『それはあなたの考へ違ひよ。わたしはあなたによそくしくしようなんて、そんなこと考へてもゐなかつたわ。』

『さうかも知れませんが、さうかも知れません。けれど白状おしなさい。あなたの頭には、いま無數の考へが宿つてゐるけれど、あなたはその内の一つだつて、僕に打ち明けようとはなさらないでせう。どうですか？ 多分僕の云つた事は當たつたでせう？』

『さうかも知れませぬわ。』

『しかし、それはどういふ譯ですか？ なぜですか？』

『わたしの氣持ちは、わたし自身にもはつきりしないんですの。』とエレーナが云つた。

『さういふ時にこそ、他人に打ち明けなくちやならないんですよ。』とシューピンは隙かさずかう云つた。『しかし、僕はその譯を云つて上げませう。あなたは僕の事を悪く思つてらつしやるんです。』

『わたしが？』

『え、あなたが。あなたはこんな風に考へてゐらつしやるでせう——僕は藝術家だもんだから、僕の云ふ事もする事も、みんな半分は芝居なんだ——僕は結局、何一つ仕出かすことが出来ないばかりでなく(この點は恐らくあなたのご意見通りでせう)、深い眞剣な感情さへ持つことの出来ない人間だ——かういふ風にね。あなたの考へによると、僕は心から泣くことさへ出来ない、お喋りの金棒引きなんて夜す——しかも、一切は僕が藝術家だといふ事に基因するのです。かうなつて見ると、僕ら藝術家は實に

そ 何とも云へない不幸な、神様に見放された人間ぢやありませんか？ 例へて見れば、あなたは僕の悔悟を本當になさらないでせうね、それは僕誓つてもいゝくらゐです。」

『いえ、パーエルさん、わたしあなたの悔悟を信じますわ、そしてあなたの涙も信じます。ただね、わたしこんな氣がしますのよ——あなたは悔悟そのものに、慰みを感じてゐらつしやるんでせう。そして涙にもやはり。』

シューピンはぎくりとした。

『いや、これはどうもよく醫者のいふ不治的症候らしいな。これぢやもう頭を下げて、降伏するより仕方がありませんよ。しかし、まあ何といふ事だらう？ 僕はかういふ美しい魂と隣り合つて暮らしてゐながら、いつまで自分を相手にまご／＼してばかりゐるんだらう？ 永久にこの魂の中へ入り込んで行く事は出来ないよ、諦めなけりやならないんだらうか？ なぜこの魂が憂愁に沈んでゐるのか、なぜ喜びに溢れてゐるのか、どういふものか、その中に發酵してゐるのか、何をこの魂が望んでゐるのか、どこへ行かうとしてゐるのか——それを永久に知ることが出来ないとは……ねえ、エレーナさん』や、やしばらく無言の後、シューピンはかう云つた。『あなたはどんな事があつても、いついかなる場合ひにも、決して晝かきに戀ひしませんか？』

エレーナはまともな彼の目を見つめた。

『しようと思ひませんね、パーエルさん、しませんわ。』

『つまり、それを證明することが必要だつたんですよ。』シューピンはわざとらしく滑稽な、しよげた顔つきをしてかう云つた。『もうこの上は、あなたの孤獨な散歩を、お妨げしないのが、禮儀上當然かと思ひます。これももし大學教授だつたら、何を根據にさういふ斷定をなすつたかと、反問したかも知れないんですが、僕は大學教授どころか、あなたのお考へによると、たゞの子供なんです。しかし、子供にはそつぽを向けないもんですよ、それをご記憶願ひます。さやうなら、わが亡き骸に平安あれ！』

『さやうなら。』

シューピンは外へ出た。スターホフの別荘から、ほど遠からぬ所で、びつたりベルセーネフに出あつた。彼は帽子を後へずらせ、頭を垂れて、急ぎ足に歩いてゐた。

『ベルセーネフ。』とシューピンは聲をかけた。

こちらは足を止めた。

『行き給へ、行き給へ。』とシューピンは言葉を續けた。『僕はたゞちよつと呼んで見ただけだ。別に引き止めはしないよ——いきなり庭へ入つて行き給へ、エレーナさんが見つかるから。あの人は君を待つてゐるらしいよ……いづれにしても、誰かを待つてゐるんだ……君この言葉の力が分かるかい——あの人は待つてゐるんだよ！ え、君、實に驚くべき事ぢやないか？ まあ考へてみ給へ。もうこれで二年間、僕はあの人と一つ屋根の下に寢起きして、始終あの人に戀ひしてゐながら、今、たつたいまあの人を理解し

た、といふより、寧ろあの人の真相を見たんだ。そして茫然としちやつたね。君どうかそんなわざとらしい、皮肉な冷笑を浮かべて、僕の顔を見ないでくれ給へ。そんな表情は君の鹿爪らしい顔つきに似合はないよ。いや、勿論、分かつてるよ——君は僕にアンヌシカの事を、思ひ出させようとしてるんだらう。なに、そりや僕も否定しないさ。われ／＼のやうな人間には、アンヌシカくらゐが丁度頃合ひだよ。僕はアンヌシカやゾーヤなどのために、萬歳を唱へる。それどころか、例のアウグスチーナさへも祝福するね！ 君はこれからエレーナさんの所へ行き給へ。僕は……君、僕がアンヌシカの所へでも、行くと思ふのかい？ 大違ひ、もつと悪いんだ。チクラソフ公爵の所へ出かけるのさ。カザン地方の鞆鞆人の出身で、さういふ藝術の保護者があるんだよ。オルギンなどと、どつこい／＼の手合ひだ。君この招待状を見てくれ。この頭字はどうだ、R S V P (を返事)と来た。田舎へ來ても閑日月なしだよ。失敬！』

ベルセーネフは、シュービンの饒舌を無言のまゝ聞いてゐた。彼は友人のために、少しきまりの悪い思ひをしてゐるしかなかった。やがて彼はスターホフの家の別荘の庭に入つた。

72
シュービンは本當にチクラソフ公爵の所へ出かけた。彼は公爵に向かつて、この上もなく愛想のいい表情を取り繕ひながら、思ひ切つて大膽な皮肉を並らべ立てた。カザン地方の鞆鞆出の藝術保護者は、大きな聲でから／＼と笑つた。その家の客人たちもそれに調子を合はしたが、誰も愉快な氣持ちはならなかつた。そして別れた後でみんなぶり／＼腹を立てた。それは丁度、餘り深く知り合つてゐな

い二人の紳士が、ネフスキイの大通りで偶然出くはして、互ひに白い齒を見せたり、わざとらしく目を細めたりしながら、すれ違つて了ふが早いか、すぐさま以前の無關心な、氣むづかしい、そして多くの場合ひ、痔疾患者らしい表情に立ち歸るのに似通つてゐた。

エレーナはさも親しげな態度で、ベルセーネフを迎へたが、場所はもう庭ではなくて、客間の中だつた。彼女は殆んど待ち遠しさうな様子で、すぐに昨日の話しを蒸し返した。彼女は一人きりだつた。ニコライはどこかへそつと姿を隠したし、アンナ夫人は、頭に濡れ手拭ひを載せて、二階で横になつてゐた。ゾーヤはその傍に坐つて、袴ハカマをきちんと正し、兩手を膝の上に重ねてゐた。ウヴール老人は中二階に引つ込んで『催眠場』と呼ばれてゐる幅の廣い、寢心地のいい、長椅子の上で休んでゐた。

ベルセーネフはまた亡き父のことを話し出した。彼は父の記憶を、敬虔の氣持ちで保存してゐたのである。こゝでこの亡父のことを一言して置かう。

夜のそ
ベルセーネフの父は、八十二人の農奴の所有者でありながら（もつとも、それは死ぬ前に解放して了つた）、古いゲツチンゲンの大學生であり、バヴリヤ文化普及會の會員であり、『世界に於ける精神の豫表について』と題する大部な原稿の著者であつた。この勞作の中では、シェリング主義とスエーデンボルグ主義と共和主義が、思ひ切つて獨自な交錯を示してゐた。彼はベルセーネフがまだ子供のとき、妻の死後

間もなく、彼をモスクワへ連れて来て、自分でその教育に従った。彼は授業毎に自分で準備をして、並みならぬ忠實な努力を續けたが、それは全然失敗に終つた。彼は空想家で神祕派の學者だつた上に、低い聲で激み勝ちな話し振りで、その云ひ廻しは比喻が多く、妙にこんがらがつて曖昧だつた。彼は夢中になるほど愛してゐる息子さへ、遠慮して避けるやうな態度を採つた。かういふ譯なので、息子が彼の授業中、たゞ目をばち／＼させるばかりで、毛筋ほどの進歩も見せなかつたのは、怪しむに足りない事である。老人は（彼はその時もう五十に近かつた。非常に晩婚だつたのである）、たうとう具合ひが面白くないのを悟つて、息子のアンドリューシャをある塾へ入れた。アンドリューシャは規則的に勉強を始めただけれど、やはり父親の監督を脱する譯に行かなかつた。老父は絶えず塾へ參觀に来て、さまざまな注意や世間話して、塾長をうるさがらしてゐた。塾の監督も、この招かれざる客を持てあました。といふのは、彼が始終教育に關する得體の知れぬ、彼の言葉を借りると、最高の叡智に充ちた本を持つて來たからである。子供たちでさへ、老人の淺黒いあばた面や、いつも必ず妙に裾の尖つた鼠色の燕尾服を纏つてゐる、こつ／＼に瘠せた姿を見ると、何だかきまりが悪くなるのであつた。その時分子供たちは、鶴のやうな歩き振りをする、鼻の長い、一度も笑顔を見せたことのない、氣むづかしさうな老人が、自分たち一人々々の事を、殆んど親身の息子と同じやうに、心底から氣に病んでゐるといふ事を、夢にも知らなかつたのである。あるとき彼は子供らに、ワシントンの話しをしようと思ひ立つた。

『年若き學生諸君！』と彼は云ひ出したが、その奇妙な聲の響きを聞くが早い、年若き學生たちは

四方へ散つて了つた。この潔白なゲツチンゲン派の學徒は、薔薇の花びらに埋もつたやうな生活をしてゐる譯ではなかつた。彼はいつも歴史の歩みや、あらゆる種類の疑問や思案に壓倒されてゐた。若きベルセーネフが大學へ入つた時、彼は息子と一緒に講義を聞きに通つた。けれど、その時はもう健康が彼に裏切り始めた。千八百四十八年七月のフランス革命は、彼を根柢から震撼させた（つまり、著述を全部書きかへねばならなかつたからである）で、彼は五十三年の冬、息子の大學卒業を待たずに死んで了つた。けれど、前もつて學位受領の祝ひを述べて、飽くまで科學に奉仕するやう、わが子を祝福した。『わしはお前に學燈を手渡しする。』と彼は死ぬる二時間まへに云つた。『おれは今まで出来るだけ堅くこの學燈を奉持してゐた。お前も最後まで決して放してはならぬぞ。』

ベルセーネフは長い間、エレーナに父親の話しをした。以前エレーナの前で感じてゐた間の悪さは、いつの間にか消えて了つた。そして、前ほどひどく舌纏れしなくなつた。會話は大學の事に移つた。

『ときに。』とエレーナが尋ねた。『あなたのお友達の中に、非凡な人がありますか？』

ベルセーネフはまたシュービンの事を思ひ出した。

『いや、エレーナさん、正直なところ、われ／＼の仲間には、非凡な人間なんか一人もゐませんよ。また、そんなものが出る筈がないです！ 一時はモスクワ大學に、黄金時代といふべきものもあつたさうですが、それは昔の話です。今はもうたゞの學校で、大學と呼ばれる資格はありませんよ。僕は學校の仲間を相手にするのが、苦しかつたです。』と彼は聲を低めて云つた。

『苦しいんですつて?……』とエレーナは囁いた。

『もつとも』とベルセーネフは言葉を續けた。『ちよつと云ひ直さなくちやなりません。僕は一人の學生を知つてゐます——たゞし、科は違ひますが——これは全く非凡な人間です。』

『その方の名は何とおつしやるんです?』とエレーナは活氣づきながら尋ねた。

『インサーロフ、ドミートリイ・ニカノールイチです。これはブルガリヤ人なので。』

『いや、ロシア人ぢやありません?』

『では、なぜモスクワに住んでゐらつしやるんでせう?』

『勉強に來たのです。しかも、その目的は何だと思ひになります? その男の頭には、たゞ一つの考へしかありません。ほかでもない、祖國をトルコの梶くさきから解放するといふ事なんです。父親はティールノフ生まれの、かなり富裕な商人でした。ティールノフは、今でこそ小さな田舎町ですけれど、昔ブルガリヤがまだ獨立王國だつた時分には、ブルガリヤの首府だつたのです。インサーロフの父は、ソフィヤで商賣をして、ロシアと取り引きを結んでゐました。その妹、つまりインサーロフの肉身の叔母さんは、今でもキーエフに暮らしてゐます。その中學の教頭をしてゐる、歴史教師の妻君なんです。千八百三十五年、つまり今から十八年前に、恐ろしい兇行が行はれたんです。ほかでもありません、インサーロフの母親が急に行くへ不明になつて、一週間たつてから、その慘殺死體が発見されたのです。』

エレーナは慄然とした。ベルセーネフは言葉を止めた。

『續けて話して下さい、續けて。』と彼女は云つた。

『それはトルコの大官が掠奪した上、殺したのだといふ噂が擴まりました。その夫、つまりインサーロフの父は、その眞實を確めて、復讐を企てましたが、たゞ七首あぐらで薄手を負はしたばかり……そして、たうとう銃刑に處せられたのです。』

『銃刑ですつて? 裁判もしないで』

『さうです。インサーロフはその時やつと數へ年の入つてましたが、近所の人たちの世話になることになりました。すると、キーエフにゐる妹が、兄の一家の悲惨な運命を聞いて、甥を引き取らうと云ふ考へを起したのです。そこで、インサーロフはオデッサを経て、キーエフへ送られました。それからキエフに十二年暮らしたものですから、それでロシア語があんなに達者なのです。』

『その方はロシア語をお話になるのですか?』

『われわれと少しも變はりありません。インサーロフが滿二十になつたとき(それは千八百四十八年の始め頃でした)、彼は急に國へ歸りたいと云ひ出しました。彼はソフィヤやティールノフを始めとして、ブルガリヤ全國を縦横に踏破して、そこで二年ばかり過ごすうちに、また祖國の言葉を覚え込んだのです。トルコ政府がインサーロフに壓迫を加へ始めたので、彼はこの二年間に、かなり危険に瀕した場合にもあると思ひます。僕はインサーロフの頸に大きな傷あとを見ましたが、きつとその時うけた傷なん

でせう。しかし、彼はその話しをするのを好まないんです。彼もやはり、一種の沈黙の行者ですね。僕はいろ／＼詳しく問ひたゞさうと思ひましたが、なか／＼その手に乗らうとしないで、ごく大掴みな返事で胡魔化してしまふのです。おそろしく強情な男でしてね。千八百五十年に、またもやロシアへ、モスクワへ歸つて來ました。それは自分の教育を完成して、ロシア人と接近したうへ上、大學卒業後は……』

『その時はどうするんでせう？』とエレーナは遮つた。

『そりやそのとき次第ですよ。前から見とほしは出來ませんからね。』

エーナは長い間、ベルセーネフから目を離さなかつた。

『あなたのお話しは大へん面白うございましたわ。』と彼女は口を切つた。『その方はどんな様子の人ですの、その、何と云ひましたか……インサーロフつて方は？』

『さあ、どう云つたらいいでせう？ 僕は悪くないと思ひますが……まあ、今に自分でご覧になりませうよ。』

『それはなぜですか？』

『僕その男をこゝへ、お宅へ連れて來ますよ。あさつてこの村へ越して來て、僕と同じ家に暮らす筈なんですから。』

『まあ、さうですか？ でも、その方は宅へ來るとおつしやるでせうか？』

『そりや云ひますとも！ 大喜びでせう。』

『高慢な方ぢやありませんか？』

『インサーロフが？ 決して。ですが、何でしたら、高慢と云つていゝかも知れません。たゞあなたの考へてゐらつしやるやうな意味ぢやないのです。例へば金なども、決して誰にも無心した事がありませんからね。』

『金に困つてらつしやいますの？』

『えゝ、金持ちぢやありません。ブルガリヤへ行つたとき、父の後に残つた僅かばかりのものを掻き集めたり、叔母さんからも補助を受けてゐますが、それも全くの端金なんです。』

『きつと、しつかりした性格の方でせうね。』とエレーナは口を入れた。

『えゝ、そりやまるで鐵のやうな人間です。けれど、それと同時に、あなたもやがてご覧になるでせうが、何か一つに集中したやうな、内部に深く沈潜したやうな性格でありながら、どこことなく子供らしい、誠實な所を持つてゐるのです。もつとも彼の誠實さは、われ／＼のやうにやくざな誠實さとは違ひます。つまり、何一つ隠すべきこともないやうな、さういふ人間の誠實ぢやないのです……まあ、今に僕が連れて來ますから、しばらく待つて下さい。』

『遠慮ぶかい方ぢやありませんか？』とまたエレーナが尋ねた。

『いゝえ、遠慮ぶかい所なんぞはありません。遠慮ぶかいのは、たゞ自尊心の強い人間ばかりです。』

『まあ、あなたは自尊心が深くないんですの？』

ベルセーネフはちよつとまごついて、両手を擴げた。

『あなたはわたしの好奇心をお燃やしましたわ。』とエレーナは言葉を續けた。『ねえ、どうなんですか、その方は？ トルコの大官に敵討ちをなさらなかったでせうか？』

ベルセーネフは微笑した。

『敵なんか討つのは、小説の中だけです。それに二十年もたつ間には、その大官だつて、死んで了つたでせうよ。』

『でもインサーロフは、その事をなんにもおつしやいませんの？』

『なんにも。』

『なぜソフィヤへいらつしつたんでせう？』

『それは父親の住んでゐた所ですもの。』

エレーナは考へ込んだ。

『祖國の解放！』彼女は呟いた。『こんな言葉は口に出すのも恐ろしいやうね、餘り偉大すぎて……』

この時アンナ夫人が部屋へ入つて來たので、話しはそれきり途切れて了つた。

その晩ベルセーネフは家へ歸る途中、奇妙な感じに胸の波立つのを覺えた。インサーロフをエレーナに紹介しようと企てたのを、彼は別に後悔もしなかつた。若いブルガリヤ人に關する自分の物語りが、

彼女に深い印象を與へたのは、極めて自然な事に思はれた……この印象を強めようと努力したのは、彼自身ではなかつたか！ けれど暗い秘密の感情が、彼の心の奥深く巣つくてゐた。彼は醜い憂鬱に胸を曇らせた。けれどこの憂鬱も『ホーヘンシュエタウフエン史』を手に取つて、きのふ中絶した頁から讀み始める妨げとはならなかつた。

一一

二日たつてから、インサーロフは約束通り、手廻りのものを持つてベルセーネフを訪れた。ベルセーネフは下男を置いてゐなかつたが、インサーロフは誰の助けも借りないで、自分の部屋を片づけ、椅子テーブルを置き直し、埃を拂ひ床を掃いた。彼は書き物卓の始末に格別ながくかゝつた。それは彼のきめた窓と窓の間に、巧く嵌まり込まなかつたのである。けれど、インサーロフは持ち前の根氣強さで、たうとう自分の目的を達した。

部屋の整頓を済ますと、彼は無理やりベルセーネフに、十ルーブリの前金を取つて貰つた。それから太い杖を手に持つて、新しい住ま居の附近を一見するために、ぶらりと外へ出かけた。三時間ばかりして歸つて來ると、ベルセーネフの招待に應じて、食事を共にすることに決めたが、彼はその際、今日だけは折角の招待を辭退しないけれど、これから先は宿のかみさんに交渉して、賄ひをして貰ふことにきめた、と聲明した。

「飛んでもないことだ！」とベルセネーフは抗辯を試みた。「君とてもひどい物を喰べさせられるよ。あのかみさんは、まるで料理が出来ないんだからね。どうして僕と食事をするのが厭なんだね？ 實費を半分づゝ負擔したらいいぢやないか？」

「僕の財政は、君と同じ食事をすることを許さないのだ。」インサーロフは落ちついた微笑を浮かべながら、かう答へた。

この微笑の中には、反駁を許さないやうな何ものかを感じられたので、ベルセネーフはもう二度と云ひ出さなかつた。食後、彼はインサーロフに向かつて、スターホフ家へ案内しようと思ひ出したが、インサーロフは、今晚ブルガリヤの同志たちに通信を書く豫定になつてゐるから、スターホフ家訪問は別の日にしてくれ、と答へた。インサーロフの意志の堅固な事は、ベルセネーフも前からよく承知してゐたけれど、今度一つ屋根の下に暮らすやうになつてから、インサーロフは一ど約束した事を違へないのと同様に、一旦かうと決めた事を、決して翻へす人間でないのを、始めて實際に確かめることが出来た。生えぬきのロシア人であるベルセネーフにとつては、この獨逸式と云ふより以上の正確さが、始めは何となく野審じみて、少々滑稽に思はれるほどであつた。けれど間もなくそれにも慣れて、結局かうした性癖はどつしりと重みがあつていゝ——といふのが妥當でないとすれば——少くとも、大いに好都合だと考へるやうになつた。

82 引つ越して來た翌日、インサーロフは朝の四時に床を出て、クンツォの村を全部歩き盡くした後、河

で水浴をして、冷たい牛乳を一杯飲むと、仕事にかゝつた。仕事はなか／＼多かつた。彼はロシア歴史と、法律と、政治經濟を研究し、ブルガリヤの民謡や年代記を翻譯し、近東問題に關する材料を集め、ブルガリヤ人のためのロシア文法と、ロシア人のためのブルガリヤ文法を編纂してゐるのであつた。

ベルセネーフは彼の部屋へ入つて行つて、フォイエルバッハの話しを始めた。インサーロフが注意ぶかく耳を傾けてゐた。餘り言葉を夾まなかつたけれど、時々云ふ事はなか／＼要領を得てゐた。その言葉から察しるところ、彼はフォイエルバッハを研究する必要があるか、それとも知らずに済まして構はないかといふ問題を、自分で自分にはつきりさせようと努めてゐるらしかつた。ベルセネーフは話頭を彼の仕事の方に轉じて、何か見せてくれないかと頼んだ。インサーロフは、自分の翻譯したブルガリヤの民謡を、二つ三つ朗讀して、所感を聞かしてくれと云つた。ベルセネーフは正確な翻譯だけれど、活氣に乏しいと云つた。インサーロフは、その批評を參考までに聞いておく、といふ様子を見せた。ベルセネーフは民謡から話題を轉じて、ブルガリヤの現状に移つた。そのとき彼は始めて氣がついた——ブルガリヤの名を口にしただけで、インサーロフの顔色はすっかり變はつて了つたのである。それも顔が熱して來るとか、聲が高くなるとかいふやうな、そんな生やさしい事ではなくて、體ぜんたいが堅く引き緊まつて、前へ突進するやうな意氣込みを示し、唇の輪廓がくつきりとして、斷乎たる表情を帯び、目の奥には何か深く秘められたやうな、消ゆることなき火が燃えたのであつた。インサーロフは自分の歸國事情を詳しく話すのを好まなかつたが、ブルガリヤ一般のことについては、誰とでも氣持ちよく話し

そた。彼はゆつくりした調子でトルコ人のことや、その壓迫ぶりや、同胞の悲哀や不幸や、彼等の懐いてゐる期待などを物語つた。彼の一語々々には、長いあひだ燃え續けてゐる唯一の情熱と、一つに集中された細心の考慮が感じられた。

『もしかしたら、』とベルセーネフは何かの序にかう考へた。あのトルコの大官は、この男に親の仇をとられたのかも知れないぞ。』

インサーロフが口を嚙むか嚙まないかに、入り口の戸が開いて、闕の上にシュービンの姿が現れた。彼はなんだか餘り碎けた、人の好きさうな態度で、部屋へ入つて來たやうに思はれた。彼をよく知つてゐるベルセーネフは、この友達が何かいら／＼してゐるのを悟つた。

『堅苦しいことは抜きにして、自己紹介をやります。』とシュービンは晴れ晴れとした、明けつばなしの顔つきで口を切つた。『僕はシュービンと云つて、この青年の（彼はベルセーネフを指さした）友人です。君はインサーロフ氏でせう、違ひますか？』

『僕がインサーロフです。』

81 『それぢや手を貸して下さい、近づきになりませう。ベルセーネフが僕の事を話したか、どうか知りませんが、君の事はいろ／＼聞かしてくれましたよ。君はこゝへ越して來たんですか？ そりや素敵！ 僕がこんなにじろ／＼君の顔を見るからつて、腹を立てちやいけませんよ。僕の商賣は彫刻なんですから、近い中に、君の首を造らせて貰ふだらうと思ひます。さういふ事になりさうなのが、今から見え透い

てみますよ。』

『僕の首なら、いつでもお役に立てますよ。』とインサーロフは云つた。

『今日は一體どうするつもりなんだね、え？』シュービンはいきなり低い椅子に腰を下ろして、大きく擴げた膝の上に両手で肘杖をつきながら、かう尋ねた。『アンドレイ・ペトローギッチ、今日はなにか計畫があたりになりますか？ 實に素晴らしい天気ぢやないか。乾し草と母の匂ひがふん／＼して……まるで濃いお茶でも飲むやうな氣持ちだ。何か一つ手品を考へ出さなくちや。クンツォゾの新しい住人に、この村の數かぎりない美を紹介しようぢやないか？』

『先生こゝろの中ぢやいら／＼してゐるんだ。』とベルセーネフはまたしてもかう考へた。

『おい、なんだつて黙つてゐるんだね、わが友ホレシオ？ その權威ある口を聞き給へ。僕等は手品を考へ出すのぢやないのかね？』

『さあ、インサーロフ君がどうだらう。この人はこれから仕事をするやうに云つてたからね。』シュービンは椅子の上でくるりと向きを變へた。

『君は仕事をするんですか？』と彼は妙に鼻にかゝつたやうな聲で尋ねた。

『いや。』とインサーロフは答へた。『今日の一日は散歩に捧げてもいゝです。』

『あゝ！』とシュービンは云つた。『そりや素敵だ。さあ、親愛なるアンドレイ・ペトローギッチ、君の聰明な頭を帽子で蔽ひ給へ。そして、目の向いた方へ出かけようぢやないか。われ／＼の目は若いんだ

それから、遠くまで見通しが利くよ。僕はとてもひどい料理屋を知つてゐるんだ。そこぢや思ひ切つて不味い飯を食はせるけれど、愉快なことは無類だよ。出かけよう。」

三十分ばかり経つたとき、三人はモスクワ河の岸つたひに歩いてゐた。インサーロフはかなり奇妙な、耳のおつ立つたやうな帽子を被つてゐた。シューピンはそれを見て、餘り自然でない歡喜の情を表明した。インサーロフは急がずに歩いた。あたりを見廻したり、呼吸をしたり、話しをしたり、微笑したりするの、すべてゆつたりと落ちついてゐた。彼はこの日を休息に捧げつくして、完全にそれを享樂してゐた。

『分別のある利口な子供が日曜日に遊ぶのが、丁度あんな風だね。』とシューピンはベルセーネフに耳打ちした。さういふシューピン自身は、思ひ切つた悪ふざけをして、先にどん／＼駆け出したり、有名な彫刻のポーズを眞似たり、草の上で筋斗がへりをしたりした。インサーロフの落ちついた態度は、彼をいら／＼させたといふよりも、寧ろ不自然な燥ぎ方をさせたのである。

『おいフランス人、なんだつてそんな道化た眞似をするんだい！』と二度ばかりベルセーネフが彼に注意した。

『さうさ、僕はフランス人だよ、半分フランス人だよ。』とシューピンが云ひ返した。『ところで、君は冗談と眞面目の間を歩き給へ、ある料理屋のボーイが僕に云つて聞かしたやうにさ。』
三人の青年は河岸から曲がつて、深く掘れた狭い窪地つたひに、金色に熟した背の高い裸麥が、兩側

から塀のやうに迫つた間を進んだ。その塀の一つが、水色がよつた蔭を三人に投げかけた。輝かしい太陽は、穂の上をすれ／＼に滑つて行くやうに思はれた。雲雀が歌ひ、鶉が鳴き交はした。いたる所に青靑とした草が擴がつて、暖い風がその葉を動かしたり、裏がへしたり、花を揺つたりしてゐた。

長い彷徨と、休息と饒舌の後に、(一度シューピンは、通りかゝつた齒のない百姓をつかまへて、人飛びまでやつて見たほどである。百姓は旦那方に何をされても、始終えへらく笑つてゐた)、一行は『とてもひどい』料理屋についた。ボーイは彼等の一人々々を、殆んど突き飛ばさなばかりの勢で走り廻つた。そして、本當に思ひ切つて粗末な料理を持つて來た。しかも葡萄酒は、後バルカン式とも云ふべきものだつた。けれどそれも、シューピンの豫言した通り、一同が心底から笑ひ興ずる邪魔にはならなかつた。シューピン自身は誰よりも一ばん大仰に燥いだが、しかし誰よりも一ばん浮き立たなかつたとも云へる。えたいの知れない、偉大なエネリンとか云ふものゝ健康を祝して乾杯したり、殆んどアダム時代に住んでゐたブルガリヤ國王の爲に、祝杯を上げたりした。それはクルームとか、フルームとか、フロームとか云ふ名前だつた。

『それは九世紀の人だよ。』とインサーロフが訂正した。

『九世紀？』とシューピンは叫んだ。『おゝ、何といふ幸福だらう！』

その前の夜
シューピンはかうしてふざけたり、悪戯をしたり、駄洒落を弄したりする間にも、始終インサーロフを試験して、彼の氣持ちを探らうとしながら、心の中ではしきりにわく／＼してゐるらしかつた。ベル

そのセーネフはそれに気がついた——けれどインサーロフは、依然としてゆつたりと明朗な態度を續けてゐた。

やがて彼等は家へ歸つて、着換へをした。そして、今朝からの生活氣分を變へないために、今晚さつそくスターホフ家へ出かけることに決めた。シューピンは彼等の來訪を注進するために、一人で先へ驅け出した。

一一一

『ヒーロー・インサーロフが今こゝへお見えになりますよ！』シューピンはスターホフ家の客間へ入りながら、もの／＼しい調子でかう叫んだ。そのとき部屋の中にはエレーナと、ゾーヤだけしかゐらなかつた。

『誰？』とゾーヤは獨逸語で尋ねた。いつも不意を打たれた時に、自分の母國語で話すのが、彼女の口癖であつた。エレーナはきつと身を反らした。シューピンは悪戯つ子らしい微笑を唇に浮かべながら、ぢつと彼女を見つめてゐた。エレーナはちよつといま／＼しい氣持ちがしたけれど、なんにも云はなかつた。

83 『あなた聞こえましたか？』と彼は繰り返した。『インサーロフ氏がこゝへやつて來るんですよ。』
『聞こえましたよ。』と彼女は答へた。『そしてあなたが、ヒーロー・インサーロフとお呼びになつたの』

89 も、確かに聞きました。あなたは呆れた人ね、ほんとに。インサーロフさんが、まだこの家へ片足も踏み込まない中に、あなたはもう悪ふざけをしなけりや氣が済まないんですよ。』

シューピンは急に悄氣了つた。

『あなたのおつしやる通りです、あなたのおつしやることは、いつも本當ですよ、エレーナさん。』と彼は呟いた。『しかし、あれはほんのちよつと口から出たげなんです。全く、僕たちは今日あの男と一緒に、まる一日遊び廻りましたが、實際のところ立派な人間ですよ。』

『わたしそんな事をお聞きしてやしませんわ。』とエレーナは云つて、立ち上がった。

『インサーロフつてお若い方？』とゾーヤが尋ねた。

『百四十四歳ですよ。』とシューピンはいま／＼しさに答へた。

使ひ走りの男の子が二人の親友の來訪を告げた。やがて二人は入つて來た。ベルセーネフはインサーロフを紹介した。エレーナは二人に椅子をすゝめて、自分でも腰を下ろした。ゾーヤは二階へ上がつて行つた。アンナ夫人に知らせねばならなかつたのである。すべて初對面のときの例として、かなり内容のない會話が始まつた。シューピンは黙つて片隅から觀察してゐた。けれど、べつだん觀察することもなかつた。エレーナの顔には、たゞ彼シューピンに對するいま／＼しさを、抑へたやうな跡が見えるばかり——たゞそれきりだつた。彼はベルセーネフとインサーロフを眺めながら、彫刻家として二人の顔を比較して見た。二人とも餘り美男子ではない、と彼は考へた。ブルガリヤ人の方は特色のある、彫刻

を 的な顔をしてゐた。

「あゝ、いま丁度いゝぐらゐに光線を受けたぞ。」大ロシア人の方は、どちらかと云ふと、繪にむく顔で、線はないけれど、ある風貌を持つてゐる。「しかし、どちらにも戀ひすることは出来る。彼女はまた今のところ、愛してはゐないけれど、やがてベルセーネフを愛するやうになるだらう。」と彼は一人で決めて了つた。

アンナ夫人が客間に現れた。で、會話はせん／＼別荘式な方向を採つた。全く別荘式なので、農村式ではない。つまり話題の豊富な點で、極めて多趣多様な會話だつたけれど、かなり辛氣臭い短い間が、三分おきぐらゐに話しを途切らした。さういふ間の一つを利用して、アンナ夫人はゾーヤの方へ振り向いた。シューピンはその合ひ圖を悟つて、大仰に顔をしかめた。ゾーヤはピアノに向かつて、自分の十番をありつたけ弾いたり、歌つたりした。ウザール老人は戸口に顔を覗けたが、また指をひらく／＼動かして、退却して了つた。それから茶を飲むと、一同うち揃つて庭を一廻りした。もう外が暗くなつてから、客は辭し去つた。

90
インサーロフは、事實エレーナの期待したほどの印象を與へなかつた。が、より正確に云へば、彼はエレーナの期待したとは違つた印象を與へたのである。彼女はインサーロフのさつぱりした、大様な態度が氣に入つた。そして、彼の顔も氣に入つたのである。けれど落ちついてしつかりした、平凡なくらゐ單純なインサーロフの全體的な感じが、ベルセーネフの物語りによつて、彼女の腦中に出來上がつ

91
た面影と、妙にしつくり調和しないのであつた。エレーナは、自分でもそれと感じない中に、何かより一層『運命的』なものを期待してゐたのである。

「けれど、今日あの人を餘り口敷をきかなかつたのは、わたしの方が悪かつたのだ。」と彼女は考へた。「わたしがいろんな事を問ひかけなかつたからだ。この次ぎまで待ちませう……でも、あの目は表情に富んだ、潔白らしい目だ。」彼女はインサーロフの前に跪拜したかつたのではなく、親友として彼に手を差し伸べたかつたのである。彼女はそれを感じた。たゞ彼女はインサーロフのやうに人物——『英雄』を、あゝいふ風に想像してゐなかつたので、彼女はなんだか勝手が違ふやうな氣がした、この『英雄』といふ言葉はシューピンを聯想させた。このとき彼女はもう床の中に入つてゐたが、急にぱつと顔を赤くして、ぷり／＼腹を立てた。

「けふ會つた人たちはどうだね、氣に入つたかね？」歸る道々、ベルセーネフはインサーロフにかう聞いた。

「すつかり氣に入つたよ。」とインサーロフは答へた。「殊にあの娘が。きつと立派な婦人に相違ない。あの人は動揺してゐるらしいが、それもいゝ性質の動揺だ。」

「しよつちう遊びに行かなくちやいかないよ。」とベルセーネフが云つた。

「あゝ、さうだね。」とインサーロフは答へたが、それきりしまひまで何も云はなかつた。彼はすぐ自分の部屋に閉ぢ籠もつたが、蠟燭はずつと夜中すぎまで點つてゐた。

ベルセーネフがまだラウメルを一頁も読み終らない中に、誰が投げたのか一握りの細かい砂が、窓ガラスにばら／＼当たつた。彼は思はずびくりとして、窓を明けて見ると、布のやうに眞つ白な顔をしたシュービンが目に映つた。

『君はなんて厄介な男だらう！ まるで蛾だね！』とベルセーネフが云ひかけた。

『しつ！』とシュービンが押し止めた。『僕は君の所へ忍んで来たんだよ、マックスがアガートの所へ来たやうにね。僕は是非とも君と差し向かひで、一こと云はなくちやならないんだ。』

『まあ中へ入り給へ。』

『いや、いゝよ。』とシュービンは押し返すやうに云つて、窓じきりに腰をかけた。『この方が愉快だ。スベイン情調に似てるぢやないか。第一に、君に祝辭を述べよ。君の株は上がったぜ。君の提灯を持つ非凡人は落第だ。それは僕うけ合つてもいゝ。僕の公平無私な態度を證明するために、これから僕の云ふ事を謹聴し給へ。まづインサーロフ氏の履歴書を読み上げよう。才能はからつきし、詩情もゼロ、仕事の能力は無限で、記憶力もしつかりしてゐる。頭腦は偏してゐて深くないが、健全で生き生きしてゐる。力もあるし、辯舌の才も、彼自身の——こゝきりの話のだが——退屈至極なブルガリヤの話が出たときだけは、確かに具備してゐるよ。なんだつて？ 僕の意見が不公平だと云ふのかい？ もう一つ注意しておくが、君はあの男と永久に、ぜん／＼隔てのない親友にはなれないよ。また誰も今までさういふ間柄になつたものはないんだ。僕は藝術家なもんだから、あの男に反感を呼び起こすんだ。但し、

僕はそれを誇りとしてゐるよ。無味乾燥だが、しかしわれ／＼一同束になつたつて顔色なしだ。あの男は自分の國に繋がれてゐる——われ／＼空き纏のやうな連中とは譯が違ふよ。われ／＼は民衆に甘えながら、さあ、生命の水よ、どうか俺たちの中へ流れ込んでくれ！ など云つてゐるんだからね。だが、その代り、あの先生の方は仕事も樂だ——たゞトルコ人を追出しさへすりやいゝんだからね、大したことはないよ。しかし、すべてさう云つた資質は、有り難いことに、ご婦人の氣に入らないんだ。魅惑がない、シャルムがない。お互ひにわれ／＼が持つてゐるものがないんだ。』

『なんだつて僕まで巻き添へにするんだね。』とベルセーネフは呟いた。『それにほかの點だつて、君は考へ違ひをしてゐるよ。君はあの男に少しも反感など呼び醒ましちやゐない。それから、あの男も自分の同國人に對するときは、全く隔てのない態度を見せてゐるよ……それは僕も知つてゐる。』

『それは別問題さ！ 同國人に取つてはあの男も英雄だが、正直なところ、僕は英雄といふものを、もつと別な風に想像してゐるんだ、英雄は話し上手ぢやいけない。英雄は牡牛のやうに唸つてゐるべきだ。その代り、ちよつと角を動かしても、壁がどろ／＼つと崩れる、と云つた按配でなくちやならないよ。もつとも、現代の英雄と云ふのは、もつと違つた性質の者が要求されてゐるのかも知れないね。』

『なんだつて君はそんなに、インサーロフの事を氣にするんだね？』とベルセーネフは尋ねた。『一たい君はたゞあの男の性格批評をやるために、わざ／＼こゝまで走つて来たのかね？』

『僕がこゝへ来たのは、家にゐると氣が沈んでならないからだ。』とシュービンは答へた。

「へえ！ ぢや君はまた泣き出す積もりなのかい？」

「勝手に冷かすがい！ 僕がこゝへ来たのは、自分で自分の肘を齧り度いほどの氣持ちがするからだ。絶望と、いま／＼しさと、嫉妬に惱まされてゐるからだ……」

「嫉妬？ そりや誰に？」

「そりや君だ、あの男だ、誰もかれもだ。もし僕がもつと早くあの人の性格を理解して、もつと上手に持ちかけたら……かう思ふと實に堪らないのだ。しかし、今さらぐ／＼云つたつてしやうがない！ 結局、僕はやはり笑つたり、ばかな眞似をしたり、あの人の言葉を借りると、悪ふざけをしたりして、それから最後に首でも絞るのが落ちなんだ。」

「いや、首は絞りもしないだらうがね。」とベルセーネフが口を入れた。

「かういふ晩には、無論やりやしないよ。しかしまあ、秋まで待つて見ようぢやないか。もつとも、かういふ晩にもやはり人は死ぬもんだよ。たゞ幸福の餘りに死ぬんだ。あゝ、幸福！ 見給へ、道に横たはつてゐる木の影が一本々々、かう囁いてゐるやうぢやないか。「わたしはどこに幸福があるか知つてゐます……なんなら云ひませうか？」僕は君を散歩に誘ひたいのだが、しかし君はいま散文の支配下にあるやうだね。まあ、寝たまへ。そしたら數學の公式でも夢に見るだらう！ ところが、僕の魂はずた／＼に千切れさうなんだ。君たちは人が笑つてゐるのを見ると、樂な氣持ちでゐると思ふんだらう。君がたは、人が自己撞着をやつてゐるのを證明したら、つまりその人間は苦しんでゐない、と決めて了

ふんだ……まあ、勝手にし給へ！」

シューピンは足早に窓の傍を離れた。ベルセーネフはその後から、「アンヌシカ！」と叫ぼうとしたけれど、やつとのことで我慢した。實際シューピンの顔色と云つたらなかつた。一二分たつてから、ベルセーネフは慟哭の聲が聞こえたやうにさへ思はれた。彼は立ち上がつて窓を開けた。あたりはしんとしてゐた。たゞ遠くの方で、荷馬車を追ふ百姓らしい男が「モズドーフスカヤの荒れ野」を、のんびりと歌ふ聲が聞こえるばかりだつた。

一三

インサーロフは、クンツォ附近に引つ越してから二週間のあひだに、四五遍スターホフ家を訪問したばかりである。ベルセーネフは隔日に出かけて行つた。エレーナはいつもその來訪を喜んで、二人の間には生き生きとした、興味のある會話が交じへられた。けれどそれでもベルセーネフは、よく悲しげな面持ちで家へ歸つた。シューピンは殆んど顔を見せなかつた。彼は熱病にでもかゝつたやうな熱心さで、自分の仕事に没頭した。時には自分の部屋に閉ぢ籠つて、をり／＼粘土だらけの仕事着で飛び出すかと思へば、時にはモスクワのアトリエで日を過ごした。そこへはモデルだの、イタリヤの模型師だの、友達だの、教師だのがやつて來た。

エレーナは一度もインサーロフと二人で、思ふ存分話しが出来なかつた。彼のゐない時には、彼女も

いろいろ詳しい事を聞かうと心構へをしたけれど、彼がやつて来ると、エレーナは自分のさうした心構へをあまり悪く感じた。それに、インサーロフの落ちつき拂つてゐる事も、彼女をまごつかせたのである。彼女は、インサーロフに心中を披瀝さす権利など持つてゐないやうな気がしたので、機会を待つことにした。が、それにもかゝらず、インサーロフが訪ねて来る度に、二人の間に交はされた言葉の數こそ少いけれど、彼女はだん／＼相手に引き付けられて行くのを感じた。けれど、インサーロフと差し向かひになる機会がなかつた——他人と接近するためには、たとへ一度でも、第三者を交じへずに、しんみり話す必要があつた。

彼女はしよつちうベルセーネフと彼の話しをした。ベルセーネフは、エレーナの心がインサーロフのために衝撃シヨツクをうけてゐるのを悟つて、自分の友人が、シュービンの斷言したやうに、落第しなかつたのを喜んだ。彼は熱心に自分の知つてゐる事を、細大もらさず話した（われ／＼は自分が人の氣に入りたと思ふ時に、よく友人を賞揚するものである。しかもその行爲によつて、自分自身を褒めてゐるといふことに、少しも氣づかないのである）。たゞエレーナの青白い頬がやゝ赤らんで、目がぎら／＼光りながら擴がつたとき、かつて經驗した悪性の憂愁が、彼の心臓を引き緊めるのであつた。

あるときベルセーネフは時ならぬ時分に、スターホフ家を訪れた。それは午前十時すぎであつた。エレーナは彼の待つてゐる廣間へ出て來た。

『まあ、どうでせう。』彼はわざとらしい微笑を浮かべながら、かう云ひ出した。『インサーロフが行くへ

不明になりましたよ。』

『え、行くへ不明ですつて？』とエレーナが云つた。

『あなくなつたんですよ。をと／＼ひの晩どこかへ出て行つて、それつきり歸つて來ないんです。』

『出かけるときに、行く先を云はなかつたんです？』

『云はなかつたんです。』

エレーナは椅子に腰を落とした。

『多分モスクワへいらしたんでせう。』平氣らしく見せようと努めながら、彼女はかう云つた。が、それと同時に、平氣らしく見せようと努めてゐる自分自身に、ひそかに一驚を喫した。

『僕はさう思ひませんね。』とベルセーネフは反對した。『一人きりで出かけたんぢやないんですから。』

『ぢや、誰と一緒に？』

『をと／＼食事前に、誰かしら二人の男がひよつこり訪ねて來たんです。きつと國の人なんでせう。』

『ブルガリヤ人ですか？ どうしてさうお思ひになりました？』

『だつて僕の耳に入った限りでは、みんな僕の知らない言葉で話してゐましたもの。が、とにかく、スラブ語には相違ありません……ねえ、エレーナさん、あなたは始終インサーロフに餘り神祕的な所がない、とおつしやいますが、この訪問などは、随分神祕に充ちてるぢやありませんか？ どうでせう、二人はインサーロフの部屋へ入るといきなり、怒鳴つたり、口論を始めたりますんです。しかも恐ろし

そ ぐ亂暴な、毒々しい調子なんです……あの男も怒鳴りましたよ。』
夜 前 の 『あの人も？』

『え、あの男も。二人の仲間を怒鳴りつけたんです。二人はお互ひ同志、あらを云ひ立てたらしい風でした。まあ、その訪問者をお目にかけたかつたくらゐです！ 淺黒い顔で、頬骨が廣く、何となく鈍い表情をして、鼻は鷲の嘴みたいなんですからね。貧しい身なりをして、全身ほこりと汗にまみれた様子は、ちよつと職人と云ひたいやうですが、しかし職人でもないし、それかと云つて、知識階級とも違ふ……どういふ種類の人間か、まるで見當がつかないんです。』

『で、その人たちと一緒に出かけたんですの？』

『さうです。二人に食事をさせて、それから一緒に出て行きました。かみさんが話してゐましたが、その連中は大きな甕一杯の粥を、二人で平げて了つたさうです。まるで狼かなんそのやうに、競争でむしや／＼やるんですつて。』

エレーナは弱々しい薄笑ひを洩らした。

『まあ、見てゐらつしやい。』と彼女は云つた。『それはみんな蓋を叩いて見ると、何か恐ろしく散文的なことなんですよ。』

98 『さうだといふですがね！ しかし、あなたはさういふ言葉をお使ひになりますけれど、それは間違つてゐますね。インサーロフには、少しも散文的なところなんかありません。もつとも、シュービンの

99 斷言するところによると……』

『シュービンですつて！』とエレーナは遮つて、肩をすくめた。『でも、あなたとつてさうお感じになるでせう、その粥をむしや／＼平らげた二人の人は……』

『セミストクレスも、サラミスの海戦の前夜に喰べましたね。』とベルセーネフは微笑を浮かべながら云つた。

『さうですわ。でもその代り、翌日は戦争だつたんですからね。けれど、とにかくあの人が歸つて來たら、わたしに知らせて下さいましね。』

とエレーナは云ひ添へて、話題を轉じようと試みた。けれど、とかく話しに接ぎ穂がなかつた。

ゾーヤが姿を現はして、部屋の中を爪立ちで歩き始めた。それは、アンナ夫人がまだ目を醒まさないといふ事を、二人に知らせるためであつた。

ベルセーネフは暇を告げた。

その晩エレーナの手もとへ彼の手紙が届いた。

「歸つて來ました。」と彼は書いてゐた。『すつかり日に焼けて、眉まで埃がたまつてゐるのです。けれど、どこへ、何のために行つたのか分かりません。あなた聞き出して下さいませんか？』

『あなた聞き出して下さいませんか、だつて！』とエレーナは呟いた。『一體あの人がわたしと話しをするとも云ふのかしら？』

翌朝の七時すぎに、エレーナは庭へ出て、二匹の子犬を飼ふために設けられた、小さな小屋の前に立つた（それは、庭作りが垣根の下に棄てられてゐるのを見つけて、お嬢さんの所へ持つて来たのである。彼は洗濯女から、お嬢さんがすべての畜類に憐みをかける、といふ事を聞き込んだのだが、彼の目算は果たして誤らなかつた。エレーナは庭作りに二十五カペイクお禮にやつた、彼女は小屋の中を覗いて、小犬が無事でびん／＼してゐて、新しい藁が敷いてあるのを確めると、何気なく後を振り返つた。と、彼女は危く叫び聲を立てないばかりであつた。インサーロフがたつたひとり、小道づたひに彼女の方へ歩いて来るのであつた。

『今日は。』エレーナに近づいて、帽子をとりながら、彼はかう云つた。彼がこの二三日の間に、實際おそろしく日やけてゐるのに、エレーナは氣がついた。『僕ベルセーネフ君と一緒に来ようと思つたんですが、あの人がなんだかぐ／＼してゐるので、この通り一人で出かけました。お宅にはどなたもゐらつしやいけません。みんな休んでゐらつしやるか、それとも散歩に出かけられた様子なので、僕はこゝへ来て見たのです。』

『あなたはなんだか、云ひ譯してゐらつしやるやうですね。』とエレーナは云つた。『そんな必要はございませんの。わたしたちはみんなあなたとお目にかゝるのを、心から喜んでゐるんですもの……あの蔭

になつたベンチに腰を掛けませう。』

エレーナは腰を下ろした。インサーロフはその傍に並んで坐つた。

『あなたはこの二三日、お宅にゐらつしやらなかつたやうでございますね?』と彼女は口を切つた。

『さうです。』と彼は答へた。『僕は他行してゐました……ベルセーネフ君から、お聞きになつたのですか?』

インサーロフはエレーナの顔を見て、につこり笑ひながら、帽子をおもちやにし始めた。彼は微笑を浮かべながら、しきりに目をばち／＼動かして、唇を突き出してゐたが、この動作は彼の顔に極めて善良らしい表情を與へるのであつた。

『ベルセーネフ君は多分こんな事も云つたでせう——僕がなんだか得體の知れない……汚らしい連中と一緒に出かけたつて。』と彼は微笑を續けながら、かう云つた。

エレーナはちよつとまごついたが、インサーロフにはいつでも正直な事を云はなくちやならないと、すぐにさう直覺した。

『えゝ。』彼女はきつぱり云つた。

『で、あなたは僕のことをどうお思ひになりました?』彼は不意にかう尋ねた。

『わたし考へましたわ……』と彼女は云つた。『あなたはいつも、ご自分の行爲をはつきり意識してゐらつしやるから、悪い事なんか決してお出来にならない方だつて、さう思ひましたわ。』

『いや、それは有り難うございます。實はね、エレーナさん。』なんとなく馴れ馴れしげに彼女の方へすり寄りながら、インサーロフはかう云ひ出した。『僕らの仲間はこちらで小家族をなしてゐるんです。その中には餘り教養のない連中もゐますけれど、しかしみんな共同の目的に心身を捧げてゐるのです。たゞ困つたことには、どうも喧嘩といふやつなしには濟まないんです。ところが、僕だけはみんなが知つてゐて、信用してくれるもんですから、今度もさういふ喧嘩の仲裁に呼びに來たのです。で、僕はそちらへ出むいた譯なんです。』

『こゝから遠いんですの？』

『片道六十露里エルスタぐらゐあります。トロイツキー村なんですからね。あすこの修道院の傍に、やはり國の者がゐるんです。しかしとにかく、僕の骨折りも、無駄ではなかつたです。巧く納めて來ましたよ。』

『さぞお骨が折れたでせうね？』

『骨が折れました。一人がどこまでも強情を張りましてね。なか／＼金を渡さうとしないんです。』

『まあ、お金から始まつた喧嘩ですの？』

『さうです、しかも大した金ぢやないんですよ。一體あなたは、なんと想像しておいでになつたのです？』

『あなたはそんな詰らない事のために、六十露里エルスタからある所へいらつしやいましたの？ 三日も無駄

にして？』

『それだつて、詰まらない事ぢやありませんよ、エレーナさん。國の者が關係してゐる事ですからね。それを拒絶するのは罪惡です。現にあなたとつて、お見受けしたところ、小犬のためにさへ助力を與へてゐらつしやるぢやありませんか。わたしはそれに感心してゐるんですよ。僕が時間を潰したのは、大した事ぢやありません、後でとり返しをつけますよ。われ／＼の時間は、われ／＼自身のものぢやないですからね。』

『ぢや、誰のものですの？』

『われ／＼を必要とするすべての人のものです。僕がこんな事を、あなたに明けすけ云つて了つたのも、つまりあなたのご意見を尊重するからですよ。しかし、あなたはベルセーネフ君の報告を聞いて、さぞびつくりなすつたでせうね！』

『あなたがわたしの意見を尊重なさるんですつて？』とエレーナは小聲で云つた。『なぜですか？』インサーロフはまたにつこり笑つた。

『それはあなたが立派なお嬢さんだからです。貴族型でないからです……それだけのことで……』ちよつとの間、沈黙が続いた。

『インサーロフさん。』とエレーナは云つた。『あなたはけふ始めてわたしに、隔てのない話しをなすつたんでせう？』

『どういふ譯です？ 僕はいつもあなたに、考へた事をすつかりお話しした積もりですが。』
 『いゝえ、今が始めてですわ。そして、わたしはそれが大變うれしいんですの——ですから、わたしもあなたに遠慮なくお話ししようと思ひますの。ようござんすか？』
 インサーロフは聲を出して笑ひながら、

『いゝですとも。』と答へた。

『前もつてお断りしておきますが、わたしは恐ろしくもの好きなんですのよ。』

『構ひません、言つてごらん下さい。』

『わたしベルセーネフさんからあなたの經歷や、青年時代のことをいろ／＼伺ひました。それでわたしはある一つの事情を、一つの恐ろしい事情を承知してゐるのですけれど……あなたその後お國へお歸りになつたさうですね……もしわたしの問ひがぶしつけだと思ひになりましたら、どうかお願ひですから、返事をしないで下さいまし。たゞある一つの事が、氣になつて堪らないものですから……ねえ、あなたはその男とお會ひになりましたか……』

エレーナは息が窒まりさうになつた。彼女は自分の大膽さが、耻づかしくもあれば、恐ろしくも思はれたのである。インサーロフはこゝろもち目を細めて、指で頤をいぢりながら、ちつと相手を見つめてゐた。

『エレーナさん、』彼はたうとうかう云ひ出した。その聲はエレーナがどきりとするほど、いつもより

却つて低めであつた。『あなたが誰の事をおつしやつたのか、僕には分かつてゐます。いや、その男には會ひませんでした。いゝ按配にね！ それに捜しもしませんでした。僕がその男を捜さなかつたのは、そいつを殺す権利がないと思つたからぢやありません——なに、僕は平氣でそいつを殺して了つたでせう——たゞ國民全體の復讐が問題になつてゐる時……いや、かう云つちやいけない……國民の解放が問題になつてゐるとき、個人的な復讐などに拘泥してゐられないからです。これは、お互ひに兩立しません。やがて時が來れば、その方だつて遁れつこありません……決して遁れつこありません。』と云つて、彼は首を振つた。

エレーナはその横顔を見つめた。

『あなたは心からお國を愛してゐらつしやいますのね？』と彼女はおづ／＼尋ねた。

『それはまだ分かりません。』と彼は答へた。『そのうちに、われ／＼の誰かゝ祖國のために死んだら、その時こそ彼は祖國を愛してゐたと云へるでせう。』

『では、もしブルガリヤへ歸ることが出来なくなつたら、あなたはロシアの生活を随分苦しいと思ひになるでせうね？』と彼女は言葉を續けた。

インサーロフは目を伏せた。

『それは僕にとつて堪へられないだらうと思ひます。』と彼は云つた。

『いかゞでせう、』とまたエレーナは問ひかけた。『ブルガリヤ語を覚えるのはむづかしいでせうか？』

「ちつともむづかしくはありません。ロシア人としてブルガリヤ語を知らないのは、耻辱ですよ。ロシア人はすべて誰でも、スラブ系統の言葉を知らなくちやなりません。お望みなら、僕ブルガリヤ語の本を持つて来て上げませう。全くなんの造作もないのが、すぐお分かりになりますよ。ブルガリヤの民謡は素敵ですよ！セルビヤに負けないくらいです。いや、待つて下さい。僕が一つ翻譯してお聞かせしませう。その内容は……あなたはほんの少しでも、ブルガリヤの歴史を知つてゐらつしやいますか？」

「いゝえ、ちつとも存じません。」とエレーナは答へた。

「待つて下さい。僕あなたに本を持つて来てさしあげませう。それですと、重要な事實だけは分かります。ぢや歌を聞いて下さい……いや、それより書いた翻譯を持つて來ませう。あなたはきつとブルガリヤ人が好きにおなりになります。それは僕信じますよ。あなたはすべて虐げられたものを愛する人なんですから。あなたはご存じでせうが、ブルガリヤは實に自然から恵まれた國なんですよ！ところがその國を踏み躪り、その民を虐げる奴があるんです。彼は思はず手を動かしながらかう云つた。するとその顔が急に暗くなつて來た。『われ／＼は何もかも奪はれたんです——宗教も、權利も、國土も！穢らはしいトルコ人が、われ／＼を家畜のやうに驅使して、そして無遠慮に屠殺するんです。』

「インサーロフさん！」とエレーナは叫んだ。

彼は言葉を止めた。

「ご免なさい。僕は冷靜にこの話しをすることが出來ないんです。しかしあなたは今、僕が自分の國

を愛するかと、お聞きになりましたね？一體この地上で、ほかに何を愛することが出来るでせう？神を除いて永久に變はることのない、あらゆる疑惑を超越した、信ぜずにゐられない唯一のもの、それは一體なんでせう？勿論、祖國です。この祖國が奉仕を要求してゐるとき……どうか記憶して下さい——ブルガリヤ中で一番つまらない百姓も、一ばんみじめな乞食も、僕と同様たゞ一つの事ばかり望んでゐるのです。われ／＼一同は唯一の共通な目的を持つてゐるのです。これがどれだけの確信と力を與へるか、まあ想像して下さい。』

インサーロフはちよつと口を噤んだが、またブルガリヤのことを話し出した。エレーナは貪るやうな、深い、悲痛な注意をこめて、彼の言葉を聞いてゐた。インサーロフが話し終つたとき、彼女はもう一度たづねた。

「ぢや、あなたはどんな事があつても、ロシアにお残りになりませんか？」

彼が辭し去つたとき、エレーナは長いことその後を見送つてゐた。彼はこの日から彼女にとつて、全く別人になつたのである。彼女が見送つたインサーロフは、二時間前に迎へたインサーロフとは、まるで違つた人であつた。

その日から彼は次第に足しげく、スターホフ家へ出入りするやうになり、ベルセーネフの訪問はだんだん間遠になつて行つた。二人の友人の間には、何か奇妙なものが介在するやうになつた。彼等は二人ともよくそれを感じてゐたが、はつきり何と名ざすことも出來なければ、それを闡明するのも恐れてゐ

た。かうして一月ばかり経つた。

一五

アンナ夫人は前にも云つたやうに、引つ込み思案の方であつた。けれどときどき思ひがけなく、何か突拍子もない、人をびつくりさせるやうなパルティドレジュール 娯樂を催して見たいといふ、矢も楯も堪らないほどの欲望を起すのであつた。このパルティドレジュール 娯樂が厄介であればあるほど、準備に手がかゝればかゝるほど、そしてアンナ夫人が自分で仰山に騒げば騒ぐほど、彼女の機嫌がいゝのであつた。もしこの氣紛れが多に起るとすれば、彼女は棧敷を二つ三つぶつ通しに買はせ、知人をありたけ呼び集めて芝居へ出かけたり、時には假面舞踏會へ出かけることさへあつた。夏だと、郊外のどこか遠い所へ繰り出した。翌日になると、夫人はしきりに頭痛を訴へて、うん／＼云ひながら、床から起きられなくなるのだが、二箇月ばかり経つと、また『異常なもの』に對する渴望が燃え立つのであつた。

今度もそれと同じやうなことが起つた。誰か彼女の合はす席で、ツァリーツイノの絶景を噂したところ、アンナ夫人はあさつてツァリーツイノへ行かうと、不意に聲明した。すると邸内にたゞならぬ騒ぎがもち上がった。主人のニコライを迎へに、急使がモスクワへ駆けつけた。それと一緒に家扶が酒や、パイヤ、その他の食料を仕込みに出かけた。シューピンには、驛遞用の幌馬車を備ふやうに命令が下つた（自用の箱馬車だけでは足りなかつたのである）。同時に豫備の馬も用意しなければならなかつ

た。走り使ひの男の子は、二度もベルセーネフとインサーロフの宿へ駆け出して、二通の招待状を届けた。それは、ゾーヤが始めはロシア語、二度目はフランス語で書いたものである。當のアンナ夫人は、娘たちの衣裳のことでやきもきしてゐた。

さうかうしてゐる間に、この娯樂が殆ど瓦解しさうになつた。主人のニコライが不機嫌な、氣むづかしい『あら捜し』的な氣分で、モスクワから歸つて來た（彼は相かはらず情婦のアウグスチーナに、むか／＼してゐたのである）。そして事情を知ると、自分に行かないときつばりはねつけた。クンツォザからモスクワへ、モスクワからツァリーツイノへ、ツァリーツイノからまたモスクワへ、モスクワからまたクンツォザへ、と云ふ風にあちこち駆け廻るのは、ばか／＼しい話だと云つた。そして最後に、地球の一點が他の一點より愉快だといふ事を、まづ最初に證明して貰ひたい、さうしたら出かけよう、とつけ加へた。これは勿論だれも證明できなかつた。で、アンナ夫人は相當年配の男づれがないために、折角のパルティドレジュール 娯樂を断念しようと思つたが、ふとウヴァール老人のことを思ひ出して、棄て鉢ぎみで老人の部屋へ使ひを送り、『溺れる者は藁にも掴まる』と云はせた。老人は晝寢から起こされて、下へおりて來た。黙つてアンナ夫人の申し出を聞き終つた後、例の指をひらく／＼動かしてゐたが、結局承諾の旨を答へて、一同を驚かした。アンナ夫人はその頬を接吻して、やさしいウヴァールさんと云つた。ニコライ・スターホフは輕蔑したやうに、やつと笑つて『何て出たら目だ。』と云つた（彼はかういふ時に、『シツクな』フランス語を使ふのが好きだつた）。

翌朝の七時に、いろんなものを山ほど積み込んだ箱と幌の馬車が、スターホフ家の門内から出た。箱馬車には夫人、令嬢、ゾーヤ、小間使ひ、それにベルセーネフが乗り込んだ。インサーロフが馭者臺に陣どつた。幌馬車の方には、ウヴァール老人とシュービンが乗り込んだ。ウヴァール老人は人さし指を動かして、シュービンを自分の方へ呼び寄せたのである。彼は道々シュービンが、自分をからかひ續けるのを承知してゐたが、この『黒い土から生えぬいた力』と若い彫刻家の間には、何か特別の奇妙な關係が存在してゐた。それは半分喧嘩に似た隔てのない友情であつた。もつとも、今日はシュービンもこの太つちよの親友を、まるで構はうとしなかつた。彼は口数が少く、放心したやうな風で、妙に張りがなかつた。

二臺の馬車が、眞晝にさへもの凄く陰鬱に見えるツァリーツイノの城跡へ近づいたとき、太陽は一點の雲影さへない青空に、高くさし昇つてゐた。一行は草原の上に下りて、すぐさま、公園の方へ向かつた。先頭にはエレーナとゾーヤが、インサーロフと連れ立つて進んだ。その後からはアンナ夫人が、ウヴァール老人と腕を組み、幸福に充ち充ちたやうな表情で歩いて行つた。老人は重さうに體を揺すぶりながら、ふう／＼息をついてゐた。新しい麥藁帽子が額をこする上に、足が長靴の中で焼けるやうにほつた。けれど彼はいゝ氣持ちなのであつた。シュービンとベルセーネフは、殿しんがりに控へた。

『君、われ／＼はお互ひに老兵扱ひで、豫備に廻されちやつたよ。』とシュービンがベルセーネフに囁いた。『あちらは今ブルガリヤ熱だね。』と彼は眉を動かして、エレーナの方をさしながら、かうつけ加へ

た。

それは申し分のない上々の天氣で、あたりは花と虫の羽音と、小鳥の歌聲に充ち、遙かかなたには、幾つもある池の水が鏡のやうに光つてゐた。明るい祭日らしい氣分が、人々の胸を擱んだ。

『あゝ、いゝ氣持ちだこと！ 本當にいゝ氣持ちだこと！』とアンナ夫人は、ひつきりなしに繰り返してゐた。ウヴァール老人は、夫人の感に耐へたやうな叫びに答へて、さうだ／＼と云ふやうに頷いてゐたが、一度などは『今更らしく云ふがものはないさ！』と云つたくらゐである。エレーナはとき／＼インサーロフと言葉を交はしてゐた。ゾーヤは二本の指先で帽子の縁ぐらを抑へながら、先の開いた鼠色の靴に包まれた小さな足を、薔薇色のバレージ織りの服の蔭から、なまめかしく覗かせてゐた。そして時には横、時には後うしろの方へ流し目を送つた。

『やつ！』不意にシュービンが小聲に叫んだ。『どうやらゾーヤ嬢が、こちらを振り向いてゐるらしいぞ。ひとつあの先生の所へ行つてやらう。エレーナさんはいま僕を輕蔑してゐるんだからな。もつとも、ベルセーネフ君、君の方は尊敬されてゐるが、しかし結局おなじ事になるよ。本當に行つてやらう。もう不景氣な面をさげてゐるのは澤山だ。だが、君には自分の取るべき態度として、植物的性質を seçむやうにすゝめるよ。君の立ち場としては、それが君の考へ得る最善の方法だ。それに學者らしくて、うつりもいゝからな。ぢや、失敬！』

シュービンはゾーヤの傍へ驅け寄つて、腕を環わパンのやうな恰好にさし出しつゝ、『あなたのお手を、

マダム。』と云ひながら、ゾーヤを引つ抱へて、どん／＼先へ歩き出した。エレーナは立ち止まつてベルセーネフを呼び、同じく彼の腕をとつたが、やはりインサーロフと話しつゞけてゐた。彼女はインサーロフに向かつて鈴蘭や、楓や、檜や、菩提樹などを指さしながら、ブルガリヤ語では何と云ふかと尋ねた（ブルガリヤ熱！とベルセーネフは青ざめながら、かう考へた。）

不意に前の方で叫び聲が起こつた。一同は頭を上げた。見ると、シュービンの煙草入れが、灌木の茂みの中へ飛んで行つた。ゾーヤの手から投げられたのである。

『待つてらつしやい、今にこの返報をしますからね！』と彼は叫んで、茂みを分けて捜しに行つた。

彼が煙草入れを見つけて、ゾーヤの傍へ引つ返さうとしたとき、やつと傍まで寄るか寄らないかに、またもや煙草入れは、小道を横ぎつて飛んで行つた。この悪戯が五度ばかり繰り返された。彼はのべつ大聲に笑ひながら、脅すやうな眞似をした。ゾーヤはたゞくす／＼忍び笑ひをして、猫のやうに體を縮めるばかりだつた。たうとう彼はゾーヤの指を掴んで、ぎゅつとばかり緊めつけたので、彼女は金切り聲を振り擡つた。そして、長い間わざと憤つた様子をしながら、しきりに指をふう／＼吹いてゐた。シューピンは彼女の耳に口を寄せて、何やら小聲に歌つた。

『若い者つてふざけたいんですね。』とアンナ夫人は嬉しさに、ウヴァール老人に云つた。

老人は指をひらく／＼と動かした。

『ゾーヤさんはどうでせう？』とベルセーネフはエレーナに云つた。

『では、シューピンさんは？』と彼女は答へた。

その間に一行は『見晴らし』と呼ばれてゐる東屋に近づいて、ツァリーツイノの池の眺望を楽しむために足を止めた。池は一つまた一つと、數露里エムスターに亘つて續いてゐた。そして向かうには、鬱蒼たる森が黒く連なつてゐるのであつた。一ばん大きな池の縁まで、岡の斜面を一杯に蔽つてゐる若草は、なんとも云へない鮮かな、エメラルドにも似た色彩を池水に添へてゐた。池は岸の傍でさへ波を立てず、一筋の白い水泡みぶも見せなかつた。滑かな水面にはさゞ波も寄せなかつた。それは冷えきつた硝子の大塊が大きな盤の中に、重々しく明るく落ちついてゐるやうな感じだつた。空もその底に沈み、房々とした木立ちはぢつと身うごきもせず、澄み切つた水の面に見入つてゐた。一同は長いあひだ無言のまゝ、この眺めに見とれた。シューピンさへも鳴りを静め、ゾーヤまで考へ込んだほどである。

最後に一同はうち揃つて、ボート遊びがしたいと云ひ出した。シューピンとインサーロフとベルセーネフは、草の上をわれ先にと駆け出した、彼等は大きなペンキ塗りのボートを見つけ、二人の船頭を捜し出して、婦人たちを呼んだ。婦人たちはその方へ下りて來た。ウヴァール老人は用心ぶかくその後を續いた。老人が舟に乗り込んで、腰を落ち付けるまで、盛んな笑聲が絶えなかつた。

『旦那、氣をつけて下さいよ。わつしらを土左衛門にしないやうに頼みますぜ。』船頭の一人で、アレクサンドリヤ風のルバーシカを着た若い男が、かう云つた。

『ちよつ、このひよつとこ奴が！』とウヴァール老人は云つた。

ボートは岸を離れた。青年たちはオールに手を出して見たが、本當に漕げるのは、インサローフ一人きりだった。シューピンは、何かロシアの民謡を合唱しようと思ひ出して、まづ自分から『われらの母なるブルガを下りて……』と節をひきながら歌ひ始めた。ベルセーネフとゾーヤ、それにアンナ夫人までが聲を合はした（インサローフは歌へなかつたのである）。けれどその中に聲が揃はなくなつて、第三節目あたりで、ごちゃ／＼になつて了つた。たゞ、ベルセーネフだけがバスで『波間に影も見えずして……』と歌ひ續けたが、これも間もなくでれて了つた。船頭二人は目くばせをして、無言のまゝにつと白い歯を見せた。

『どうした？』とシューピンはその方へ聲を掛けた。『旦那がたは歌がお下手らしいかね？』アレクサンドリヤ風のルバーシカを着た若い衆は、たゞ頭を一ふりしただけである。『よし、それなら待つてゐろ、この獅子鼻め。』とシューピンは言葉を續けた。『今に腕前を見せてやるから。ゾーヤさん、一つ歌つて下さい、ニードルマイヤーの湖水を。おい、漕ぐのをやめろ！』

濡れたオールは、翼のやうに空中へ持ち上げられたまゝ、音高く雫を落としながら、ちつと動かなくなつた。ボートはそれから少し前進を續けたが、まるで白鳥のやうに、水の上を軽く一廻りして、そのまゝちつと靜止した。ゾーヤはしばらく勿體ぶつてゐた……。

『さあ！』とアンナ夫人がやさしく促した……ゾーヤは帽子を抛り出して、歌ひ始めた。

『O, lac, l'année à peine a fini sa carrière……（お湖よ、年はやうやく廻り終りて……）』

餘り大きくはないけれど、澄み切つた彼女の聲は、鏡のやうな池の面を滑つて行つた。そして遙か彼方の森の中で、その一こと一ことが反響した。それはまるで誰かが森の中で、くつきりと明瞭な、しかも神秘的な感じのする、この世のものと思はれぬ超人的な聲で、歌つてゐるやうな按配だった。ゾーヤが歌ひ終つた時、とある岸邊の東屋から、聲高なブラボーの叫びが起こつて、そこから赫ら顔の獨逸人が、二三人ばら／＼と飛び出した。それはツァーリツイノへ騒ぎに來た者らしい。中には上着もネクタイも――甚しいのはチョッキもつけてないのがあつた。彼等は猛烈な勢で『ビス！ ビス！』と怒鳴つたので、アンナ夫人は大急ぎで、ボートを池の反対側へ廻さした。けれど、ボートがまだ岸へつかないうちに、ウヴァール老人はもう一ど一行を驚かした。彼は森のある一箇所が、殊にはつきり木魂を返すのを發見して、急に鶉の鳴き眞似を始めた。始め一同はぎくつとしたけれど、すぐに心から面白がつた。ウヴァール老人の眞似は非常に正確で、眞に迫つてゐたのである。彼はこの成功に勵まされて、今度は猫の鳴き聲を眞似た。けれど、猫の鳴き眞似は餘り巧くゆかなかつたので、彼はまた鶉の鳴き聲を一つやつて、みんなの顔を見廻すと、口を噤んで了つた。シューピンは飛びかゝつて、彼に接吻したが、老人はそれを突きのけた。このときボートは岸についたので、一行は陸へ上がった。

その間に馭者は、ボーイと小間使ひに手傳つて貰つて、食糧の入つた籠を馬車から運び出し、古い菩提樹の木蔭の草に食事の用意をした。一同はそこに擴げられた卓テーブルの周りに坐つて、パイやサンドウイッチなどに手を伸ばし始めた。みんな恐ろしく腹を減らしてゐたのである。アンナ夫人はのべつみんな

なに喰べものを勧めながら、綺麗な空気の中で食事するのは、たいへん體の藥になるから、せい／＼澤山喰べて下さいと云つた。夫人はウワール老人にも、同じことを云つて勧めた。

『どうぞご心配なく。』と老人は一杯に頬張りながら、唸るやうにかう云つた。

『まあ、こんな結構なお天氣にあたつて、本當に有り難いことだわ！』と夫人は絶えず云ひ續けた。彼女はまるで人が違つたやうに思はれた。確かに二十歳ぐらゐは若返つたやうに思はれた。ベルセーネフは夫人にその事を云つた。『さうですとも、さうですとも。』と彼女は答へた。『わたしだつて昔はどこへ出ても、ひけを取りませんでしたよ。十本の指から外れるやうな事はなかつたんですよ。』

シュービンはゾーヤと組みになつて、のべつ彼女に葡萄酒をついでやつた。彼女は斷わつたけれど、シュービンは無理に飲ました。そして結局、自分で一杯飲み干しては、またゾーヤに飲ますことにして了つた。彼はゾーヤに向かつて、彼女の膝を枕にしたいと云ひ出した。けれどゾーヤは、『さういふ餘りと云へば端たない事』を斷じて許さなかつた。エレーナは誰よりも一ばん眞面目であつた。けれどその心の中は、かつて久しく經驗したことのない、なんとも云はれぬ落ち付きに充ちてゐた。彼女は自分が限りなく善良な人間のやうな氣がして、インサーロフばかりでなくベルセーネフまでも、自分の傍に引きつけておきたかつた……ベルセーネフはその意味を秘かに悟つて、そつと溜め息をついた。

時間はどん／＼經つて、もう夕景になつた。アンナ夫人は急に騒ぎ出した。

『あらまあ、こんなに遅くなつて了つた。』と彼女は云ひ出した。『もう充分遊んで、喰べるものも喰べ

て了つたから、もうそろ／＼口の端をふいてもいゝ時分ですよ。』

夫人がそは／＼し始めたので、みんなも騒ぎ出して、腰をもち上げた、そして、馬車を待たしてある城跡の方へ歩き出した。幾つかの池を通りすぎながら、一行はツァリーツイノの名残りを惜しむために、足をしばし止めた。日没前の鮮な夕ばえが、いたる處に燃えてゐた。空は赤く染まつて、木の葉は折から吹き起こつたそよ風に波だ／＼され、ちら／＼と目まぐるしく光つて、遙か彼方の水は、さながら金を溶かしたやうに揺れ動いた。公園のそこ／＼に散在してゐる、赤みがかつた塔や東屋などが、黒みがかつた木立ちの縁に對照して、くつきりと浮き出してゐた。

『さやうなら、ツァリーツイノ、今日のピクニックは決して忘れませんよ！』とアンナ夫人は思はず感激の聲を發した……

けれど、まるで彼女の發したこの最後の言葉を裏書きするやうに、全く容易に忘れることの出来ない、奇怪な事件がもち上がった。

ほかでもない、アンナ夫人がツァリーツイノに最後の別辭を送るか送らないかに、彼女から五六歩へだてた高いライラックの茂みの蔭で、突然不揃ひな叫びや、高笑ひの聲が起こつた——と、だらしのない恰好をした男の一隊が、ばら／＼と小道へ飛び出した。それは、先ほどゾーヤの歌に熱心な拍手を送つた、音樂の愛好者たちだつた。彼等は大分いゝ機嫌らしかつたが、婦人たちの姿を見ると立ち止まつた。けれど、中にも一人恐ろしく脊の高い、牡牛のやうな頸筋と、牡牛のやうに血走つた目をした男が、

仲間の傍を離れて、不器用らしく會釋をしたり、ゆらく體を揺すぶつたりしながら、驚きの餘り化石したやうになつてゐるアンナ夫人に近づいた。

『ボンジュール、マダム。』と彼はしや嘎れた聲で云つた。『ご機嫌は如何ですかね？』

アンナ夫人は思はず一歩後へすさつた。

『あなたは、われ／＼が、ビス、ブラザー、フオロ叫んだとき、』と大男はまづいロシヤ語で云ひ續けた。『なぜアンコール歌つてくれませんか？』

『さうだ、さうだ。なぜ歌はなかつた？』といふ聲が仲間の方から起こつた。

インサーロフは前へ進んで出ようとしたが、シューピンはそれを押し止めて、自分でアンナ夫人を庇つた。

『失禮ですが、』と彼は切り出した。『全くあなたの行爲は、われ／＼に驚異の念を呼び起こしますよ。あなた方はお見うけしたところ、カウカサス人種のサクソン系に屬してゐられるやうです。したがつて、社交上の禮儀を心得てゐられるものと想像しますが、それにもかゝはず、あなたは紹介もされない婦人に、馴れ馴れしく話しかけるぢやありませんか。全くのところ、ほかの場合ならわれ／＼は——殊に僕自身は、あなたとお近づきになるのを喜びとしたでせう。なぜと云つて、お見うけしたところ、驚異的に發達した筋肉を所有してゐられるからです。二頭筋と云ひ、三頭筋と云ひ、三角筋と云ひ、僕などは彫刻家として、あなたをモデルにするのを、心から幸福に感ずる次第ですが、しかし今日は僕等に構

はないで貰ひたいです。』

男は馬鹿にしたやうに、首を横へ向け、兩手を腰に當てがつたまゝ、シューピンの長廣舌を聞き終はつた。

『わたしあなたの云ふ事わからない。』彼は最後にかう云つた。『あなた思ひます、きつと、わたし靴屋か時計屋ありますか？ いゝや！ わたし將校あります、官吏あります、さうです。』

『僕もそれは疑ひませんよ。』とシューピンは云ひかけた……

『わたくしさう云ひます。』まるで道に突き出た枝でも拂ひのけるやうに、シューピンを逞ましい腕で押しのけながら、男は言葉を續けた。『わたしたちビス叫んだとき、なぜ歌ひませんか？ わたくしさう云ひます。わたくし、今すぐあちら行きます。たゞこのお嬢さんが——このマダムありません、この人いません——この人かこの人（彼はエレーナとゾーヤを指さした）わたくしに、獨逸語で云ふアイネン・クツス——接吻する宜しい、さうです。それなんでもありません。』

『なんでもない、アイネン・クツス、なんでもない。』といふ聲がまた仲間の方から起こつた。

『In der Stokramenter (よう／＼、畜生！)』これはまるで瘦せこけた小つぼけな獨逸人が、笑ひにむせびながらかう云つた。

ゾーヤはインサーロフの手にしがみ付いた。けれども彼はそれを拂ひのけて、いきなり無禮な大男の前に立ちはだかつた。

『そこをどけてくれ給へ。』彼は餘り大きくはないけれど、鋭い聲でかう云つた。獨逸人は重苦しい聲でからりと笑つた。

『どけてくれ？ これ面白い！ わたしやはり散歩する宜しい。どけてくれ？ なぜどけてくれ？』
『それは君が婦人に失禮な事をするからです。』とインサーロフは云つたが、急にさつと青くなつた。
『それは君が酔つばらつてゐるからです。』

『なに？ わたし酔つばらつてゐる？ これは驚いた。 Hören Sie das, Herr Provisor? (聞いて！) わたし將校あります。この人、失敬云ひます……もうわたし満足サチスフククチオン要求します！ アイネン・クツス要求します……』

『もし君が一步でも前へ出たら……』とインサーロフは云ひかけた。

『ふむ？ その時どうする？』

『君を水の中へ抛り込んでやる。』

『水の中？ Herr Je! (へえ) たつたそれだけ？ さあ、見ませう。それたいへん面白い、どんなに水の中に……』

大男は両手を上げて、前の方へ身を乗り出した。と、不意に容易ならぬ事がもち上がった。彼は一聲妙な叫びを立てたかと思ふと、その大きな胸體がぐらりと揺れて、地面から高く持ち上がり、兩足が空中にばた／＼した。そして、婦人たちが叫び聲を立てる暇もなく、また誰一人どうした事かと思ひ巡ら

す餘裕もないうちに、大男は重々しい水音と共に、ざんぶとばかり池の中へ落ちたと思ふと、忽ち巻き起こつた渦の中に姿を消して了つた。

『あら！』と婦人たちは聲を揃へて悲鳴を上げた。

『やつ大變！』と云ふ叫びが獨逸人の間から起こつた。

一分ばかり経つた……と、濡れた髪の毛のべつたりくつついた丸い頭が、水面に現れた。頭はふう／＼と水を吹いた。そして二本の手が痙攣したやうに、口のすぐ傍でばちやく／＼やつてゐた……

『あゝ、溺れてしまふ、助けてあげて頂戴、助けて上げて！』とアンナ夫人は、インサーロフに叫んだ。こちらは岸の上に仁王立ちになつて、深く息をついてゐた。

『なに、匍ひ上がりますよ。』と彼は少しも同情のない無造作な調子で、嘔んで吐き出すやうに云つた。

『さあ行きませう。』彼はアンナ夫人の手を取りながら、かう云ひ足した。『行きませう。ウプール・イワ
ーヌイチ、エレーナ・ニコラエヅナ。』

『あゝ……あゝ……おゝ……おゝ……』この時やつと岸邊の葦に手を掛けた不幸な獨逸人が、哀れな聲でかう叫ぶのが聞こえた。

一同はインサーロフに續いて歩き出した。彼等は、獨逸人の連中の傍を通り抜けなければならなかつた。けれど、首領を失つたこの一隊はすっかり小さくなつて、ぐうの音も出さなかつた。たゞ中でも一ばん勇氣のある男が一人、頭を振りながらかう云つた。

『いや、これはどうも……實に怪しからん話した……あんな事をされて……』

いま一人の男は帽子までぬいだ。インサーロフは彼等の目に、凄みを帯びて映つたのである。しかもそれは無理からぬことであつた。彼の顔には何かしら不氣味な、危険な表情が現れてゐたのである。獨逸人の連中は、仲間を引き上げに飛んで行つた。大男は固い地面を踏むと同時に、泣き聲で悪口をつき始めた。そして『ロシアの悪黨ども』の後から、きつとこの仕末を訴へてやる、伯爵のフォン・キゼリッツ閣下にちき／＼申し上げる、などと喚き散らした……

けれど『ロシアの悪黨ども』は、彼の怒號に少しも注意を向けずに、出来るだけ早く、城の方へ急いだ。一同は公園を歩いてゐる間、ちつと押し黙つてゐた。たゞアンナ夫人が軽く溜め息をつくばかりであつた。けれど、馬車の傍に近よつて足を止めた時、まるでホーマーの半神半人に見られるやうな、抑へても抑へ切れない止め度のない哄笑が、彼等の間にどつと起こつた。まづシュービンが氣ちがひのやうに、甲高い笑ひ聲を立てると、續いてベルサーネフが、豌豆を太鼓の上へこぼしたやうな笑ひ方を始めた。すると今度はゾーヤが南京玉をばら撒くやうに、小刻みに笑ひ出した。アンナ夫人もいきなりそのコーラスに加はつた。エレーナさへも微笑を禁じ得なかつた。最後にインサーロフまで、たうとう我慢できなくなつた。けれど誰より一ばん大きな聲で、誰より一ばん長く、猛烈に笑ひ飛ばしたのは、ウヴール老人だつた。彼はくしゃみが出て息が空まりさうになるまで、横つ腹を叩きながら笑ひ續けた。やつと笑ひが収まると、涙の隙間からかう云つた。

『わしは……なにが一體びしやりと云つたのかと思つたが……どうだ……あの男が……まるで蛙のやうに……』痙攣の中から絞り出されたやうな最後の言葉と共に、また新しい笑ひの爆發が、彼の全身を揺すぶつた。ゾーヤはまた一層それに油をかけた。

『わたしは、兩足が宙にばた／＼してゐるのを見ると……』

『さう、さう。』とウヴール老人は引き取つた。

『足だ、その足なんだよ……それから、びしやりと云つてな！　そして奴さん、か、か、蛙のやうに！』
『でも、あの人は一體どんな手を使つたんでせう。だつてあの獨逸人の方が倍も、大きかつたぢやありませんか？』とゾーヤは尋ねた。

『それはかうなんだよ。』とウヴール老人は目を拭きながら答へた。『わたしはちゃんと見たがな、片手を腰に掛けて、足をちよつと絡んだと思ふと、忽ちばちやんだ！　わしはなんだらうと思つて見ると……もう奴さん蛙のやうに……』

もう馬車はとうに動き出して、ツァリーツイノの城はいつの間にか眼界から隠れて了つた。けれどウヴール老人はいつまでも平靜に歸ることが出来なかつた。で、また今度も幌馬車に同乗したシュービンは、たうとう老人をたしなめた程である。

インサーロフはなんだかばつが悪かつた。彼はエレーナと向き合つて、箱馬車に乗つて行つたが（今度はベルサーネフが馭者臺に陣取つた）、ちつと黙り込んでゐた。彼はエレーナが心の中で、自分を非難

してゐるに違ひないと思つた。けれど、エレーナは非難などしなかつた。最初の瞬間、彼女は非常な驚愕を感じたが、續いて彼の顔の表情に激しく打たれた。それから、彼女は始終考へてばかりゐた。彼女は自分でも何を考へてゐるのか、充分はつきりしなかつた。けれどこの日味はつた氣持ちは、すつかり消えて了つた（それは彼女も意識した）。そして、何かしら新しい感情にとつて替はられた。しかしそれが何かと云ふ事は、まだ確かめる暇がなかつた。

娯パルティドレシ

樂が餘り長く續いたので、黄昏は急に夜に移つた。馬車はまつしぐらに進んだ。時には熟し始めた麥畠の中を走つて、息苦しいほど麥の薫りに充ちた空氣に包まれ、また時には廣い草原の中を横切つて、思ひがけなくすが／＼しい草の匂ひが、軽い波のやうに顔を打つのが感じた。空の果てはどこを見ても、煙りを立てゝゐるやうに思はれた。やがて、どんよりと赤い月が浮かび出た。

アンナ夫人はうと／＼まどろんでゐた。ゾーヤは窓から首を突き出して、道を眺めてゐた。エレーナはふと心づいた——彼女はもう一時間以上も、インサーロフと話しをしなかつたのである。彼女はインサーロフの方に向いて、大して用もない事を問ひかけた。彼はすぐに喜んで返事をした。やがて何かしら取り止めのない物音が、空中を傳はつて來るやうになつた。それは遠くの方で幾千とない人聲が、が／＼話してゐるやうな具合ひだつた。次第にモスクワが近づくのであつた。遙か向かうに火影がちらし始めて、次第にその數を増して行つた。たうとう轍の下に石が感じられるやうになつた。アンナ夫人が目を醒ましたのをきつかけに、箱馬車の中にゐた人たちは、急にみんな話し始めた。けれど人

が何を云つてゐるのか、もう誰も聞き分ける事が出来なかつた。それほど二臺の馬車と三十二の馬の蹄が、敷き石にぶつつかつて、凄い轟きを立てるのであつた。

モスクワからクンツォゾまでの道は、長くて退屈に思はれた。人々はみんな思ひ思ひの隅に頭をもたせて、睡つたり黙り込んだりしてゐた。たゞエレーナだけは目を塞がなかつた。彼女はぼうつと暗いインサーロフの姿から、少しも視線を放さなかつた。シューピンは急に氣が沈んで來た。風が絶えず目に當たつて、氣分をいら／＼させるのであつた。彼は外套の襟に顔を埋めて、殆んど泣き出さないばかりになつた。ウヴァール老人は左右に／＼揺れながら、さも氣持ち好ささうに駢をかいてゐた。

その中にやつと馬車がびつたり止まつた。二人の從僕がアンナ夫人を箱馬車から助け出した。夫人はすつかりへと／＼になつて了つて、一同に別れの挨拶をしながら、もう殆んど人心地もないと云つた。一同は彼女に禮を云つたが、彼女はたゞ、殆んど人心地もないと、繰り返したばかりである。エレーナは始めてインサーロフの手を握つた。そして、長いあひだ着替へをしようともしないで、窓の傍に坐り續けてゐた。シューピンは、歸り仕度をしてゐるベルセーネフを掴へて、そつとその耳に囁いた。

『どうだ、全く英雄ぢやないか。酔つばらひの獨逸人を水の中へ叩き込むなんて！』

『君はそれさへもしなかつたね。』とベルセーネフは云ひ返した。そして、インサーロフと一緒に自分の家へ歸つた。

二人の友人が宿へ歸り着いた時には、もう空が白みかゝつてゐた。太陽はまだ昇らなかつたけれど、

そ もう全體に底冷えがして、灰色の露が一面に草原へ下りてゐた。早い雲雀は半ば透明な大空の深淵の中
夜前 の で、高く高く轉つてゐた。そこからは大きな残んの星が、まるで一つ目のやうに光つてゐた。

一六

エレーナはインサーロフと知り合つてから間もなく、日記を始めた（それは五度目か六度目かであつた）。次ぎにこの日記の断片を掲げよう。

六月……ベルセーネフさんが本を持つて来てくれたけれど、わたしはどうしても讀めない。それを正直に云ふのは悪いし、讀んだと嘘をついて返すのは、氣が咎める。なんだかあの人が落膽しさうに思はれてならない。あの人はわたしの事だと、なんでも氣がつく。あの人は大變わたしに愛着を感じてゐるらしい。ベルセーネフさんは本當にいゝ人だ。

……一體わたしはどうして欲しいんだらう？ なぜこんなに胸の中が重苦しいのだらう、なぜこんなに物憂いのだらう？ なぜわたしは空飛ぶ鳥を見ると、羨ましくなるのだらう？ なんだか鳥と一緒に飛んで行きたくなる。どこへか知らないが、たゞこゝから遠い所へ飛んで行きたい。かういふ望みを起すのは、悪いことだらうか？ こゝには母もゐれば父もゐる。家庭といふものがあるではないか。一體わたしは両親を愛してゐないのだらうか？ さうだ、わたしは自分の望んでゐるやうな、さういふ愛し方をしてゐない。こんな事を筆にするのは恐ろしいけれど、それはやはり本當なのだ。事によつたら、わ

わたしは大きな罪人かも知れない。そのためにかう氣が沈むのかも知れない。そのためにかう落ちつきがないのかも知れない。何かしら見えない手が、わたしの胸に載つかつて、ぐんぐん押しつけてゐるやうだ。まるでわたしは牢屋の中にて、今にも周りの壁が崩れ落ちさうな氣がする。なぜほかの人はそれを感じないのだらう。もしわたしが肉身に對して冷淡だとしたら、一體わたしは誰を愛するつもりなんだらう？ お父さまは、わたしが犬や猫ばかり愛すると云つて、お叱りになるけれど、これはどうやら本當らしい。この事をよく考へなくちやならない。わたしは餘りお祈りをしない。お祈りしなくちやならない……わたしだつて、愛することが出來さうな氣がするのだけれど！

……わたしは今だに、インサーロフさんの前へ出るとびく／＼する。どういふ譯か分からない。わたしだつてもう小娘といふ譯でもなし、あの人もさつぱりしたいゝ人ではないか。どうかすると、あの人は恐ろしく眞面目な顔つきをなさる。あの人はきつとわたし達などに、かゝらずらつてゐられないのだらう。わたしもそれを感じるの、あの人の時間を割かせるのが、なんとなく遠慮に思はれる。ベルセーネフさんは別だ。あの人となら、まる一日でもお喋りしてゐられさうだ。けれどあの人も、始終インサーロフさんの事ばかり話してゐる。しかも、なんといふ恐ろしいデテールだらう！ わたしは昨夕あの人が七首を手を持つてゐる夢を見た。あの人はわたしに向かつて「お前を殺して自殺する。」と云ふではないか。なんといふばか／＼しい事だらう！

……あゝ、もし誰かわたしに、お前はこれ／＼の事をしなくちやならない。と云つてくれたら、どん

なに嬉しいだらう？ 善良な人間であると云ふだけでは、まだ足りない。善を行ふといふ事……これこそ人生に於ける最も重大な事なのだ。けれど、どんな風にしたらいゝのだらう？ あゝ、もし思ふやうに自分で自分を抑制することが出来たら！ なぜわたしはこんなにしよつちう、インサーロフさんの事を考へるのか、自分ながら合點が行かない。あの人は家へ来ると、ちつと坐つて、注意深く耳を傾けながら、自分では別に努力したり、氣を揉んだりする様子がない。わたしはそれを見てみると、氣持がいい——たゞそれだけの事である。ところが、あの人が歸つて行くと、わたしはあの人の言つた事を一思ひ起こして、自分で自分がいま／＼しくなつたり、興奮したりする……自分でなぜか分からない（あの人はフランス語が下手だけれど、ちつとも氣まり悪さうにしない——それがわたしの氣に入つた）。もつとも、わたしはいつも新顔の人のことを、餘計に考へる癖がある。わたしはあの人と話しをしながら、ふと家の食堂番のワシーリイを思ひ出した。これは、焼けてゐる百姓屋の中から、足の立たぬ老人を助け出して、自分でも危く死にかゝつたのだ。お父さまは感心な奴だとおつしやるし、お母さまは五ルーブリ褒美をおやりになつたけれど、わたしはあれの足もとに身を投げて、禮拜したいやうな氣がした。そのときワシーリイは單純なと云ふより、いつそばか／＼しくらゐる顔つきをしてゐたが、その後飲んだくれになつて了つた。

……今日わたしが一人の乞食女に二カペイカやつたら、その乞食は、なぜ悲しさうな顔をしてゐるのかと尋ねた。わたしは、自分がそんなに悲しさうな様子をしてゐるなどは、少しも考へなかつた。それはきつとわたしが善いにつけ、悪いにつけて、いつも／＼一人ぼつちのせゐだと思ふ。誰一人として手をさし伸べるべき人がないのだ。わたしに近よつてくれるものは、わたしに用のない人で、わたしの望ましい人は……素通りしてさふ。

……今日はどうしたのか、自分ながら譯が分からない。頭がこんぐらがつて了つてゐる。わたしはいきなり跪いて、赦しを乞ひたいやうな氣がする。誰にどうしてか知れないけれど、わたしは何だか殺されさうな氣がする。わたしは心の中で叫んだり、憤慨したり、泣いたりする。そして、沈黙することが出来ないのだ……あゝ、神様！ この物狂はしい發作を静めて下さい！ それが出来るのはあなた一人だけです、そのほかの者はみんな無力なのです。わたしのさゝやかな施しも、勉強も、何一つ、全く何一つわたしを助けることが出来ない。いつそどこかの女中にもなりたい、全く、その方が氣樂に相違ない。

一體なんのための青春だらう、わたしは何のために生きてゐるのだらう、なぜわたしには魂があるのだらう、なぜすべてはかういふ風なのだらう？

……インサーロフさん、インサーロフ氏——わたしは全く何と書いていゝか分からない——は、相變はずわたしの興味をひいてゐる。あの人の心の中はどんなのか、知りたくて堪らない。あの人は見かけたところ明けつ放しな、近より易い人のやうだけれど、わたしには何一つ見えない。どうかすると、あの人は何か試験でもするやうな目つきで、ちつとわたしを見つめることがある……それとも、これは

そわたしの氣の迷ひだらうか。パーエルは始終わたしをからかつてばかりゐるので、わたしはパーエルに腹を立てゝゐる、一たい彼は何を欲してゐるのだらう？ 彼はわたしに戀ひしてゐる。けれど彼の戀ひはわたしに不用なのだ。彼はゾーヤにも戀ひしてゐる。わたしは彼に對して公平でないやうだ。彼は昨日わたしに向かつて、「あなたは丁度中庸を得た不公平の方法を知らない」と云つた……それは本當である。これは大變よくない事だ。

あゝ、人間には不幸が必要なのだ——貧困とか、病氣とか云ふものが必要なのだ。でない、つけ上がつてしやうがない。わたしはそれを痛感する。

……なぜベルセーネフさんは今日わたしに、二人のブルガリヤ人の話をしたのだらう！ あの人は何か思はくがあつて、わたしにあの話しをしたらしい。インサーロフさんがわたしにとつて、何だと云ふのだらう？ わたしはベルセーネフさんに腹を立てゝゐる。

……わたしはペンをとつたが、どう書き始めたものか分からない。あの人がけふ庭でうち解けた話をしたのは、なんといふ思ひ掛けないことだらう！ なんと云ふやさしい、信じ切つたやうな態度だらう！ どうして急にあゝいふ風になつたのか知らず？ まるでわたしたちは、古い昔からの親友でありながら、今度はじめて、互ひの心が知れ合つたやうな感じである。どうしてわたしは今まで、あの人を理解できなかったのだらう！ いまあの人はわたしにとつて、驚くばかり近い人となつた！ それに何よりも不思議な事には、今わたしはずつと心が落ちついて來た。今になつて見ると、きのふベルセーネ

フさんやあの人が腹を立てたのが、滑稽なくらゐである。わたしはあの人をインサーロフ氏などと云つたが、今日は……あゝ、たうとう眞實味に充ちた人が現れた。あれこそ頼りになる人だ。あの人は決して嘘をつかない。あの人は今まで出あつた人の中で、嘘をつかない一人の人間だ。ほかの人はみんな嘘をつく、なにもかも嘘をつく。あゝ、やさしい善良なベルセーネフさん、なぜわたしはあなたを侮辱するのでせう？ でも、やはり駄目だ！ ベルセーネフさんはあの人より學者かも知れない。頭もいゝかも知れない……けれど、なぜかわたしには分からないけれど、あの人に比べると、ベルセーネフさんはまるで小つぼけな人間に見える。あの人が祖國の話しを始めると、だん／＼大きく生長して行つて、顔も立派になつて行けば、聲も鋼はがねのやうに引き緊まつて來る。するとその時は、あの人の前で目を伏せずに見られる人間は、世界中に一人もあるまいと思はれるくらゐだ。あの人は口で云ふばかりでなく、實行する人だ。過去もさうだつたらうし、未來もさうに違ひない。わたしはあの人いろ／＼聞いて見ようと思ふ……あの人が突然わたしの方へ振り向いて、につこり笑つた時の様子！……あゝいふ笑ひ方をするのは、たゞ、兄弟ばかりだ。あゝ、わたしは本當に嬉しい！ あの人が始めて家へ來たとき、わたし達がこんな早く接近しようとは、夢にも考へなかつた。けれど今となつて見ると、わたしが始めてのときに冷淡の態度で終始したのが、かへつて面白く感じられるくらゐだ。冷淡な態度！ 今でもわたしは冷淡なのではないか？

……わたしがこんな落ちついた氣持ちになつたのは、もう久しくないことだ。わたしの内部には、な

そんとも云へない静けさが充ちてゐる。あゝ、なんと云ふ静けさ。何も書くことがない、あの人に始終あふ、それきりだ。その上なにを書くことがあらう？

……パーゼルは部屋に閉ぢ籠もつて了ふし、ベルセーネフさんはだん／＼足が遠くなつて来た……氣の毒な人！ わたしはなんだかあの人が……もつとも、そんな事はあらう筈がない。わたしはベルセーネフさんと話すのが好きだ。決して自家宣傳などしないで、いつも何かしら内容のある、有益な話をして下さる。シューピンなどはまるで違ふ。シューピンは蝶のやうに着飾つて、しかも自分で自分の衣裳に見とれてゐる、これだけは蝶のしない事だ。もつとも、シューピンもベルセーネフさんも……わたしは何を云はうとしてゐるのか、自分でも分からない。

……あの人は家へ来るのが嬉しいらしい、それはわたしにも見えてゐる。けれど、なぜだらう？ 何をわたしの中に見つけたのだらう？ もつとも、わたしたちの趣味には似た所がある。あの人もわたしも、二人ながら詩を好まない。二人ながら美術を解さない。けれど、あの人がどれだけわたしより優れてゐるか分からない！ あの人は落ちついてゐるが、わたしはいつも不安の虜になつてゐる。あの人には道があり、目的があるけれど、わたしは、わたしは一體どこへ行つてゐるんだらう！ どこにわたしの巢があるんだらう？ あの人は落ちついてゐるとは云ふものの、あの人の想念はみんな遠い所にあるのだ。やがてその時が来たら、あの人は永久にわたしたちを棄て、自分の國へ、遙か海の彼方へ去つて了ふのだ。それも仕方がない。たゞあの人の無事を祈るばかりだ！ それでもわたしは、あの人がこゝ

に住んでゐる間に、あの人と知り合つたのを喜ぶだらう。

なぜあの人はロシア人でないのだらう？ いや、あの人はロシア人にはあり得なかつたのだ。お母さまもあの人が好きで、謙遜な方だとおつしやる。善良なお母さま！ お母さまにはあの人が理解できないのだ。パーゼルは沈黙を守つてゐる。彼は自分のあてこすり、わたしに不快なのを承知しながら、嫉妬のために平静であられないだ。意地のわるい悪戯小僧！ 一體どんな権利があつて、あゝいふ態度を見せるのだらう？ 一體わたしがいつか……

こんな事はみんな詰まらない！ なぜこんな考へが、のべつ頭に浮かんで来るのだらう！

……けれどわたしが今まで、二十歳になるまで誰も戀ひしなかつたのは、奇妙な事に相違ない。Dは（これからあの人をDと呼ぶことにしよう。わたしはあのドミートリイと云ふ名が好きだ）全身を自分の事業と、空想に捧げ盡してゐるので、それであゝ、明朗な氣持ちになれるらしい。全くあの人は、何も動揺する理由がないではないか？ すべてを完全に、残りなく捧げ盡した人は、もうよくよすることなどない譯だ。さういふ人は、何に對しても責任を感じない。それは自分が欲しめるのではなくて、事業が欲しめるからである。ついでに書いておくが、あの人もわたしも同じ花が好きだ。今日わたしが薔薇をつみ取つたら、花びらが一枚おちた。すると、あの人がそれを拾ひ上げた……わたしはその花をDにやつて了つた。

……Dはしよつちう家へ遊びに来る。ゆうべなどは一晩中はなして行つた。あの人はわたしにブルガ

リヤ語を教へてやらうと云ふ。わたしはあの人と話してみると、のんびりしたい、気持ちになる。いや、のんびりしたと云ふより以上だ。

……日はどん／＼経つて行く……わたしはいゝ気持ちでもあれば、空恐しいやうでもある。なんだか神に感謝したいやうな気持ちで、今にも涙が溢れ出しさう。おゝ、暖い明かるいこの日頃！

……わたしは相變はらず輕々とした気持ちだ。たゞとき／＼、ほんのとき／＼少し物悲しくなる。わたしは幸福だ。本當にわたしは幸福なのだらうか？

……わたしはいつまでも、きのふのピクニックを忘れないだらう。なんといふ不思議な、新しい、そして恐ろしい印象だらう！ Dがいきなりあの大男を掴んで、毬のやうに水の中へ投げ込んだとき、わたしは別にびつくりしなかつた……けれど、あの人の様子がわたしを驚かせた。それに——なんといふもの凄、殆んど残酷に近いくらゐな表情だつたらう！ そしてあの人が『匍ひ上がりますよ！』と云つたあの語調！ かういふ事がすつかりわたしを顛倒さして了つた。して見ると、わたしは今までの人を理解してゐなかつたのだ。その後でみんなが笑ひ出したとき——わたしまでが一緒に笑ひ出したとき、わたしはあの人を痛ましくてならなかつた！ あ的人是に恥づかしかつたのだ。わたしの手前を恥ぢたのだ。わたしはそれを直覺した。それから暫らく経つて、眞つ暗な馬車の中で、わたしが幾分こはいやうな気持ちで、あの人を顔色を見すかさうと努めたとき、あ的人是に自分でそれを白狀した。全くあの人にほう／＼つかり冗談も云へない。あ的人是にいざ助けようと思つたら、立派にそれをし終せる人である。

けれどあの憤怒、あの慄へる唇、あの目の中に漲つた毒念は、一體なんのためだらう？ それとも、あなるよりほか仕方がないのだらうか？ 立派な男子であり、勇敢な闘士であると同時に、つゝましく柔和な君子人であることは、不可能なのかも知れない。生活は下品なものだと、この間あの人自身がさう云つたつけ。この言葉をベルセーネフさんに傳へたら、あ的人是にDの考へに賛成しなかつた。一體どちらが本當なのだらう？ けれどあの日も前半は本當に素ばらしかつた！ わたしはあの人と並んでゐると、黙つてゐてさへ気持ちよかつた……けれど、わたしはあゝいふ結末になつたのを嬉しく思ふ。どうもあゝならなければならなかつたらしい。

……またしても不安……わたしは少し健康を害つてゐるらしい。

……わたしはこの二三日、この手帳に何も書かなかつた。書きたくなかつたからである。何を書いても、わたしの胸にあることと違ふやうな気がしたので……一體わたしの胸にある事とは何だらう？ わたしはあの人と長い長い話しをして、いろんな事を啓示された。あ的人是にわたしに自分の計畫を話してくれた（ついでに思ひ出したが、あの人を頸に傷跡がある譯を、けふ始めて知つた……あゝ、あ的人在に死刑を宣告されて、九死に一生を得たのだと考へると、身の毛もよだつやうだ。傷跡はつまりその時の名残りなのである……）あ的人是に戦争が近いのを豫感して、それを寧ろ喜んでゐる。けれどそれも拘らず、あ的人是にかつて見うけた事がないくらゐ洗んでゐる。あ的人在……あ的人在のやうな人物に、何をくよ／＼する事があるのだらう？ お父さまが町から歸つて、わたしたち二人を見ると、なんだか

そ
 妙な目つきでじろりとご覧になつた。ベルセーネフさんが見えた。恐ろしく瘦せて、顔色の悪くなつたのが目につく。ベルセーネフさんは、わたしがシュービンに對して、餘り冷淡でそつけなさ過ぎると、非難めいた事を云つた。わたしはパーエルの事などまるで忘れてゐたのだ。こんど會つたら、なるべくその償ひをしよう。今わたしはあの人のどころでない……世界中のだれ一人にも構つてゐたくない。ベルセーネフさんはなんだか氣の毒さうな調子で、わたしに話しかけた。それは一體どういふ意味なのだらう？ なぜわたしの周囲も、わたしの内部も、こんなに暗黒なのだらう？ わたしは自分の周囲にも内部にも、何かしら謎めいたものが持ち上がつてゐるやうな氣がする。これを解く鍵を見つければならぬ……

……わたしはゆうべ寝なかつた。頭が痛い。なんのために書くのだらう？ あの人はけふ早く歸つて了つた。わたしはあの人と話したい事があつたのに……あの人は、わたしを避けるやうにしてゐるらしい。さうだ、あの人はわたしを避けてゐる。

……鍵は見出された！ 神よ！ 哀れみ給へ……わたしは戀ひしてゐるのだ！

一七

エレーナが自分の日記にこの運命的な、最後の一句を書き込んだ丁度その當日、インサーロフはベルセーネフの部屋に腰かけてゐた。ベルセーネフは、げげんさうな表情を顔に浮かべながら、彼の前に

立つてゐた。インサーロフはたつたいま彼に向かつて、翌日モスクワへ引つ越しするといふ決心を傳へたのである。

『飛んでもない！』とベルセーネフは叫んだ。『これから一ばんいゝ時期に入らうとしてゐるのに、君はモスクワでどうする積もりなんだね？ なんだつて急にそんな氣になつたんだらう！ 何か變はつた知らせでも受け取つたのかね？』

『なにも知らせなんか受け取りやしない。』とインサーロフは打ち消した。『しかし、いろ／＼考へて見た結果、こゝに滞在してゐる譯にいなくなつたんだ。』

『どうしてそんな事が……』

『ベルセーネフ君』とインサーロフは云つた。『どうかお願いだから、さう追窮しないでくれ給へ、後生だ。僕は自分でも、君と分かれるのが辛いんだけど、どうも致し方がないんだ。』

ベルセーネフはちつと彼の顔を見つめた。

『君の決心を翻すことが出来ないのは、僕も承知してゐる。』彼はたうとうかう云つた。『それぢや、これは動かす譯にゆかないんだね？』

『斷じて動かせない。』とインサーロフは答へて席を立つと、そのまま出て行つて了つた。

ベルセーネフは部屋を一廻りした後、帽子を取つて、スターホフ家へ出かけた。

『あなたは何かわたしに知らせたい事があるのでせう。』二人さし向かひになるが早いか、エレーナは

から尋ねた。

『さうです。どうしてお察しになりました？』

『そんな事はどうでもよござんすわ。何か聞かして下さい。』

ベルセーネフはインサーロフの決心を傳へた。

エレーナはさつと青くなつた。

『それはどういふ譯でせう？』彼女はやつとの事でかういつた。

『あなたもご存じでせうが、』とベルセーネフは云ひ出した。『インサーロフ君は、自分の行爲を他人に説明するのが嫌ひなんです。しかし僕の考へるには……まあ、坐りませう、エレーナさん、あなたは餘り気分がお勝れにならないやうですから……僕はこの思ひがけない出發の原因を、想像できさうな氣がするんです。』

『どんな、どんな原因なのでせう？』自分でもそれと氣がつかないで、冷たい掌の中にベルセーネフの手を堅く握り緊めながら、エレーナはかう云つた。

138 『實はかうなんです。』ベルセーネフは寂しい微笑を浮かべながら、口を切つた。『なんと云つて説明したらいいでせう？ まづ僕が始めてインサーロフ君と親しくなつた、今年の春にまで溯らなくちやなりません。僕はその時ある親戚の家で、あの男に出あつたのです。その親戚には娘が一人ありました。大へん綺麗な娘なのです。僕はインサーロフ君が、その娘に氣があるやうに思はれたので、その事をぶつ

けに云つてやりました。すると、インサーロフ君はからくくと笑つて、そりや君の考へ違ひだ、僕のハートは少しの痛手も負つてゐない、けれどもそんな事が起こつたら、僕はすぐ出發してさふ。なぜと云つて、個人的感情を満足させるために、自分の事業や義務に背きたくないからだ、とかう云ひました。——これはあの男の云つた言葉そのまゝなんです。僕はブルガリヤ人だから、ロシア人の愛は必要がないのだ。』とかう云ひましてね……』

『それで……どうですの……あなたは今……』打撃を覺悟してゐる人のやうに、われともなく顔をそむけながら、いつまでもベルセーネフの手を離さないで、エレーナはかう囁いた。

『僕が思ふのには、』とベルセーネフは云ひかけたが、急に聲を低めた。『僕が思ふのには、あのと時漠然と豫想した事が、今度いよゝ適中したのです。』

『と云つて……あなたのお考へでは……どうかわたしを苦しめないで下さい！』不意にエレーナは前後を忘れてかう口走つた。

『僕が思ふのには、』とベルセーネフは急いで引き取つた。『インサーロフは今度あるロシアの娘に戀ひしたので、約束通り逃げ出すことに決心したのです。』

エレーナは前よりもつと強く彼の手を握り緊めた。そして、突然ほのほのやうに顔から頸筋へかけて流れた羞恥の紅くちなを、他人の目から隠さうとでもするやうに、一そう低く首を垂れた。

『ベルセーネフさん、あなたは天使のやうに善良な方ですわ。』と彼女は云つた。『でも、あの人お別れ

には見えるでせうね？」

『さう、僕もきつと挨拶に来ると思ひます。だつてそのまゝ行つて了ふなんて、あの男にしても……』

『さう云つて下さい、あの人にさう云つて下さい……』

けれど、そのとき哀れな少女は我慢し切れなくなつて、涙が双の目から堰を破つたやうに流れ出た。彼女はそのまま部屋を走り出た。

「なるほど、あれまでにインサーロフを愛してゐるのか？」のろく／＼と家へ歸りながら、ベルセーネフはかう考へた。「これは實に意想外だ。もうこれほど強烈になつてゐようとは、思ひもよらなかつた。あの女は僕が善良だと云つた。」と彼は瞑想を續けた……「どういふ動機で、どういふ感情に驅られて、僕があつた事をエレーナさんに知らせたか、そんな事は誰にも分かつたものぢやない！ しかし、とにかく善良なからぢやない、善良なからぢやない。つまるところは、本當に自分の傷口に七首が刺さつてゐるかどうか、それを確かめたいと云ふ、情ない要求のためなんだ。僕は當然満足すべきなのだ——あの二人は互ひに愛しあつてゐて、僕はそれを助けたんだから……シューピンは僕のことを、未來に於ける科學とロシア民衆の仲介者と云つたが、全體に仲介者と云ふ役割りが、生まれながらの運命らしい。だが、もし僕の考へ違ひだつたら？ いや、あれは考へ違ひぢやない……」

ベルセーネフは悲痛な氣持ちになり切つてゐたので、ラウメルの事も頭に浮かんで來なかつた。

翌日の午後一時すぎに、インサーロフがスターホフ家へやつて來た。まるでわざと狙つたやうに、そ

の時アンナ夫人の客間に、一人の女客が坐つてゐた。それは近所の司教の妻君で、なか／＼美しい上品な婦人だつたが、かつて警察相手の問題を起こした、曰くつきの人物であつた。ほかでもない、ある暑い日ざかりに、街道に近い池で一浴びしようといふ氣を起こしたところ、生憎そこはさる偉い將軍の家族の往復する道すぢに當たつてゐたのである。

始めは第三者の同席が、エレーナにとつて嬉しく思はれた。彼女はインサーロフの足音を聞くや否や、顔にまるで血の氣がなくなつて了つたのである。けれど、インサーロフと差し向かひで話さないうちに、彼がこのまゝ歸つて了ふかも知れないと思ふと、心臓が痺れるやうな氣持ちがした。インサーロフはばつたの悪さうな様子で、彼女の視線を避けるやうにしてゐた。

「あの人はもうすぐ別れの挨拶をするのだらうか？」とエレーナは考へた。果たしてインサーロフはアンナ夫人の方へ向いて、口を開きさうにした。エレーナは急いで立ち上がり、彼を少し離れた窓際へ呼んだ。司教の妻君は驚いて振り向かうとしたが、餘り着付けを固くしてゐたので、身動きする度にコルセットがぎい／＼と軋んだ。で、彼女はそのままちつとしてゐた。

『わたしね、』とエレーナは忙しさに云ひ出した。『あなたが何用でいらしたのか存じてゐますわ。ベルセーネフさんが、あなたのご意嚮を知らせて下さいましたの。でもお願ひですから、後生ですから、今日わたし達に暇乞ひをしないで、あすこゝへ早めにいらして下さいませんか、十一時ころに。わたしあなたに一こと申し上げたいんですから。』

インサーロフは黙つて頭を下げた。

「ぢや、お引き止めしませんわ……お約束して下さいましたね？」

インサーロフはまた頭を下げたが、しかし何とも云はなかつた。

「レーノチカ、こちらへおいで。」とアンナ夫人は云つた。「まあご覧よ、奥さんのオペラバッグのお見事なこと。」

「自分で縋ひとりしましたの。」と司教の妻君は云つた。

エレーナは窓の傍を離れた。

インサーロフはスターホフ家に、十五分ばかりしかるなかつた。エレーナはそつと彼の様子を觀察してゐた。インサーロフは相變はらず、目のやり場に困つた風で、一つ所でもぞく／＼してゐたが、急に妙な歸り方をして、かき消すやうに行つて了つた。

エレーナは、この一日が恐ろしく長いやうに思はれた。が、それより夜の方がもつと／＼長かつた。エレーナは両手で膝を抱いて、その上に頭を載せながら、ぢつと寢臺の上に坐つたり、窓の傍によつて熱した額を冷たい硝子に當てたりしながら、たゞ一つの事をいつまでもいつまでも、頭がふらく／＼になるまで考へ抜いた。心臓は化石したのか、胸の中から消えて了つたのか、とにかく彼女は心臓の存在を感じなかつた。その代り、頭の中では血管がずつき／＼と脈を搏つて、髪が焼けさうに感ぜられ、唇はかさ／＼に乾いてゐた。

「あの人は来るに違ひない……お母さまにお別れの挨拶をしなかつたんだもの……あの人は嘘などつきはしない……一體ベルセーネフさんが云つたのは本當かしら？ そんな事はあらう筈がない……でもあの人は言葉で來ると約束しなかつた……一體わたしは永久にあの人と別れたのだらうか……」かう云つたやうな想念が、彼女を離れようとしなかつた……全く離れなかつたのである。かうした想念はやつて來るのでもなければ、歸つて行くのでもなく、まるで霧のやうに絶えず揺れてゐるのであつた。

「あの人はわたしを愛してゐる！」不意に彼女の全身に、かういふ考へがぱつと燃え上がった。彼女ははぢつと闇を見つめた。そして、誰の目にも見えない微笑が、彼女の唇を綻ばした……けれど、彼女はすぐに頭を振つて、組み合はせた指を頸筋へ持つて行つた。すると前と同じ物思ひが、またもや霧のやうに、彼女の内部で揺曳し始めた。夜明け前になつて、彼女は着物をぬぎすて、床の中へ身を横たへたが、寢入ることは出来なかつた。最初の朝日影が、さつと部屋へ差し込んだ……

「あゝ、もしあの人があつたしを愛してゐたら！」彼女は不意にかう叫ぶと、全身を照らす朝の光りを恥ぢもしないで、掻き抱くやうに両手を擡げた……

彼女は床を出ると、着替へを済まして、下へおりた。まだ家中だれも起きてゐるものがなかつた。彼女は庭へ出た。けれど、庭はひつそりと靜まりかへつて、緑の色がいかにもすが／＼しく、小鳥は庭をわがもの顔に囀り交はし、花はさも喜ばしげに顔を覗けてゐるので、彼女はなんだか、うす氣味わるくなつて來た。

「おゝ！」と彼女は考へた。もしあれが本當だつたら、この地上のものは草一本だつて、わたしより幸福なものはない——でもあれが本當だらうか？」

彼女は自分の部屋へ歸つた。そして、なんとかして時間を紛らすために、着替へにかゝつた。けれど、何をとつても、手から滑り落ちるので、彼女はいつまでも半裸體の姿で、化粧鏡の前へ坐つてゐた。そのとき、茶を飲みに来いといふ知らせがあつた。彼女は下へおりて行つた。母はその青い顔に氣がついたけれど、たゞ「お前は今日たいへん綺麗に見えるね。」と云つたばかりである。そして、娘の全身に一瞥を與へた後、かう云ひ足した。

『その着物はよくお前に似合ふよ。もし誰かの氣に入りたいと思つたら、いつもそれを着るといふ。』
エレーナはなんとも返事をしないで、片隅に腰を下ろした。さうしてゐるうちに、九時が打つた。十一時までには、まだ二時間残つてゐる。エレーナは本を手に取つたが、やがて刺繡に移つた。暫くすると、また本にかへつた。それから、同じ並み木道を百遍あるかうと決心して、百回の往復を済ました。その後で彼女はアンナ夫人が獨骨牌カタルを並らべるのを、長いあひだ眺めてゐた……それから時計を見ると、まだ十時になつてゐなかつた。シューピンが客間へ入つて來た。エレーナは彼に話しかけようと試みながら、自分でも何か分からないなり、彼に詫びを云つた……彼女は一こと云ふにも骨が折れた。と云ふより、寧ろ彼女自身に、一種の怪訝の念を呼び起こすのであつた。シューピンが彼女の方へ身を屈めた。彼女は冷笑を待ち設けながら目を上げたが、その目に映つたのは悲しみを帯びた、懐かしさうな顔であ

つた……彼女はこの顔にほゝ笑みかけた。シューピンも無言のまま微笑して、靜かに出て行つた。彼女はそれを呼び止めようとしたが、すぐには彼の名が思ひ出せなかつた。

たうとう十一時が打つた。彼女はぢり／＼と待ち焦がれながら、聞き耳を立て始めた。もう何もすることが出来なかつた。彼女は考へることさへ止めて了つた。心臓が生き返つたやうになつて、だん／＼音高く搏ち始めた。そして不思議にも、時間が妙に早く經つて行つた。十五分すぎ、三十分すぎ、それから更に幾分か經つた（彼女にはさう思はれたのである。）と、ふいに彼女はびくりとした——時計は十二時でなしに、一時を打つたのである。

「あの人は來ない。暇乞ひもしないで行つて了つたのだ……」この想念が血と一緒に、どつとばかり彼女の頭へ流れ込んだ。彼女は息が窒まりさうな氣がして、今にも聲を上げて、慟哭したくなつた……彼女は自分の部屋へ駆け込んで、兩手で顔を蔽ひながら、ベッドの上へうつ伏しに倒れた。

彼女は三十分ばかり、身動きもせずに臥せつてゐた。指の隙間から流れ出る涙が、枕を濡らした。不意に彼女は身を起こして、そこに坐つた。何か奇妙な變化が、彼女の心中に生じたのである！ その顔は別人のやうになり、濡れた目は自然に乾いてぎら／＼光り、眉は八の字に寄せられて、唇はきつと引き締められた。更にまた三十分すぎた。エレーナは最後にもう一度、聞き馴れた聲が響いてはゐないかと、耳を傾けた。やがて立ち上がつて、帽子を被り、手袋をはめ、マンチリヤを肩に引つけかけると、そつと見つからぬやうに家をぬけ出して、ベルセーネフの住ま居に通ずる道を、足早にすた／＼と歩き出

エレーナは頭を垂れて、視線をちつと前の方へそよぎながら歩いた。彼女はなんにも恐れなかつたし、またなんにも考へなかつた。たゞもう一度、インサーロウに會ひたいばかりだつた。彼女は、太陽が重苦しい雨雲に遮られて、姿を隠したのにも、風がどつ／＼と襲つて木立ちを鳴らしながら、着物を足にからみつけたのにも、埃が不意に巻き上がつて、往來を龍卷きのやうに走つて行くのにも、少しも氣がつかないで歩いた……大粒の雨が落ちて來たけれど、彼女はそれにも氣がつかなかつた。けれど雨脚は次第に繁くなつて勢を増し、稻妻が閃いて雷鳴が轟いた。エレーナは立ち止まつて、あたりを見廻した……幸ひ遠からぬ所に崩れた古井戸があつて、そこに古い荒れ果てた禮拜堂が立つてゐた。彼女はそこまで駆けつけて、低い庇の下へ入つた。雨は瀧のやうに降りそよいで、空は一面まつ暗になつた。エレーナは簾をかけたやうな雨垂れの隙間から、無言の絶望を懷いて、外を眺めてゐた。インサーロフに會ふといふ最後の希望も、はかなく消えて了つた。

146
乞食の老婆が禮拜堂へ入つて來た。彼女は傘を振るひながら、會釋をして『雨やどりでございますか、お嬢さま。』と云つた。そして、溜め息をついたり咳をしたりしながら、井戸の傍の引つこんだ所に腰を下ろした。エレーナは衣囊かぶこへ手を差し入れた。老婆はこの動作に氣がついた。すると、皺だらけで黄色く

なつてはゐるけれど、かつては美しかつたらしい彼女の顔が、急に生き生きとして來た。

『有り難うございます、お慈悲ぶかいお嬢さま。』と老婆は云ひかけた。けれど、エレーナの懷中には金入れがなかつた。老婆はもう手を差し伸べてゐる……

『お婆さん、わたしお金を持つてゐないんだよ。』とエレーナは云つた。『その代り、まあこれでも取つてお置き、何かの役に立つだらうから。』

彼女は自分のハンカチをやつた。

『お、美しいお嬢さま。』と乞食女は云つた。『こんなハンカチなど戴いてどうしませうに？ まあ孫娘にでもやりませうか。あれが嫁にでも行きますときに。どうもご親切に有り難うございます！』
このとき激しい雷の音が響き渡つた。

『あ、神様、イエス・キリスト様！』乞食女は呟いて、三ど十字を切つた。『ときに、どうやらわたくしは、あなた様をお見うけしたやうでございますよ。』しばらく経つて、彼女はかう云ひ足した。『どうやらあなた様は、わたくしに施しをして下されたお方のやうでございますな？』
エレーナは老婆を見すかして、やうやくそれと氣がついた。

『あゝさう、お婆さん。』と彼女は答へた。『あの時お前は、なぜそんなに悲しさうな様子をしてゐるのかと、尋ねたつねね。』

『さやうでございます、お嬢さま、さやうでございます。道理でこそ、今もすぐにわたくしは氣がつ

そきましたよ。今でもあなた様は、なんだかくよくしてゐらつしやる様子ぢやございませんか。それ、ハンカチがぐしょ／＼になつてをります。つまり、涙で濡れたのでございませう。あゝ、あなたがた若い娘さんと云ふものは、みんな同じ心配ごとで、氣病みをしてゐらつしやるのでございます。ほんにお痛ましいで！」

『それは一體どんな苦勞なの、お婆さん？』

『どんなつて、お嬢さま、わたくしのやうな年寄りに、白つばくれようたつて、駄目でございますよ。あなた様が何をくよく／＼してゐらつしやるか、よく存じてをりますよ。あなた様のご苦勞は、身なし子の頼りなさとは違ひます。わたくしだつて若い時もありましたから、さういふ憂い目つらい目も、すっかり味を知つてをりますよ。さうでございますとも。ご親切にして頂いたお禮に、わたくしはこれだけの事を申し上げておきます。あなた様は立派な人間にお當たりになりました。決して浮氣な男ぢやございません。だから、あなた様も一生懸命に、その人をお守りなされませ。死んでも放してはなりません。もしその戀ひが叶へば、結構なことでございますが、もし叶はねば、それは神様の思し召しと、諦めねばなりません。さうでございますよ。何をさう呆れたやうに、わたくしをこ覽になるのでございますか？ わたくしもこれでやつぱり、占ひ者なのでございますよ。まあこのハンカチと一緒に、あなた様の辛い思ひも、一緒に持つて行つて差し上げませう！ だからくよく／＼なされるのは、もう澤山でございますよ。どうやら雨も小降りになつたやうでございます。あなた様はもう少し待つておゐてなされませ。わた

くしはぼつ／＼出かけませう。わたくしなど雨に濡れるのは、珍しい事ぢやございませんからね。とにかく、お嬢さまよく覺えておゐてなされませ。今までの苦勞は雨に流れて了つて、もうこれからは夢にも見られませんまい。どうぞ神様のお慈悲がありますやうに！」

乞食女はやをら身を起こして、禮拜堂の外へ出ると、とぼ／＼と遠ざかつて行つた。エレーナは呆れてその後を見送つた。「一體あれはなんの事だらう？」と彼女は思はず呟いた。

雨はだん／＼小粒になつて、ちよつと日影さへさし覗いた。エレーナは、もうそろ／＼この避難所を見棄てようと考へた……と、不意に禮拜堂から十歩ばかり離れた所に、インサーロフの姿が目についた。彼はマントに身を包んで、エレーナがやつて來たのと同じ道を歩いてゐた。それは歸宅を急いでゐるやうに見えた。

エレーナは禮拜堂の古びた手摺りに片手をついて、聲をかけようとしたけれど、舌がいふ事を聞かなかつた……インサーロフは顔を上げずに、そのまゝ傍を通り過ぎようとした……

『インサーロフさん。』彼女はやつとのことか云つた。

インサーロフは急に足を止めて、あたりを見廻した……最初の一瞬間、彼はエレーナに氣がつかかなかつたが、すぐさま傍へ寄つて來た。

『あなたですか！ あなたこゝにゐらつしやるんですか！』と彼は叫んだ。

彼女は無言のまゝ禮拜堂の中へ引つ込んだ。インサーロフはエレーナの後に續いた。

『あなたこゝにゐらつしやるんですか?』と彼は繰り返した。

エレーナは依然として無言のまま、妙にも柔かな視線で、ちつと長くインサーロフを見つめてゐた。彼は伏し目になつた。

『あなた、わたしの家から出ていらつしたんです?』と彼女は尋ねた。

『いや、お宅からぢやありません。』

『違ひまして?』とエレーナは問ひ返して、無理につこり笑はうとした。『それが約束を守ることになるんです? わたし朝からお待ちしてゐましたのに。』

『いや、どうか思ひ出して下さい、エレーナさん、僕は昨日なんにも約束をしなかつた筈です。』

エレーナはまたやつとの事で微笑しながら、手で顔を一撫でした。その顔も手も恐ろしいほど眞つ青だつた。

『それぢや、あなたはわたし達に暇乞ひもしないで、行つて了ふお積もりだつたんです?』

『さうです。』とインサーロフは口籠もつたやうな聲で、そつ氣なくかう云つた。

『え? あんなにお近しくしてゐながら……あゝいふお話しをし合つた後で……あゝいふいろんな事があつた後で……では、もしわたしがこゝで偶然お見かけしなかつたら(エレーナの聲は震へを帯びて来た。彼女はちよつとの間口を噤んだ)……あなたは別れに握手もしないで、行つて了ふお積もりだつたんですね? そして平氣でゐらつしたんですね?』

インサーロフは顔を反けた。

『エレーナさん、どうかそんな風に云はないで下さい。でなくつてさへ、僕は餘り浮き浮きしてゐないんですから。實のところ、それを決心するには、大變な努力が必要だつたんですよ。もしそれをあなたに分かつて頂けたら……』

『わたし分かりたいと思ひませんわ!』とエレーナは憎えたやうに遮つた。『なぜあなたは行つておひになるの?……大方さうならなければならぬでせう。きつとわたくし達は、別れなくちやならぬものと見えますわ。あなただつてなんの原因もないのに、自分の友達を悲しませるやうな事は、なさなかつたでせうからね。でも、親友つてこんな別れ方をするものでせうか? ねえ、わたし達は親友でせう、さうぢやありませんか?』

『さうぢやありません。』とインサーロフは云つた。

『え?……』とエレーナは叫んだ。その頬はうつすりと紅くれないに染められた。

『僕たち二人が親友同志でないからこそ、それで僕はこゝを去らうとしてゐるんです。どうか僕の云ひたくない事を、無理に云はせないで下さい。また決して云ひもしません。』

『あなた以前はわたしに、少しも隠し立てをなさいませんでしたわね。』とエレーナは軽い非難の調子で云つた。『覚えてゐらつしやるでせう?』

『あの時分は、僕も明けつ放しの態度がとれました。あの時分は何も隠す事がなかつたからです。が、

今は……』

『今は？』とエレーナは問ひ返した。

『今は……いま僕は遠のかなかちやなりません。さやうなら。』

もしこの瞬間、インサーロフが目を上げて、エレーナを見たら、彼自身がどちらかと云ふと眉をひそめて、暗い表情をしてゐるのに比べると、エレーナの顔が寧ろ明かるく輝いてゐるのに、氣がついた筈である。けれども、彼は強情に床を見つめてゐた。

『では、さやうなら、インサーロフさん。』と彼女は口を切つた。『けれど、折角かうしてお目にかゝつたんですから、せめて握手だけでもさして下さいませんか。』

インサーロフは手を伸べようとしたが、

『いや、それも出来ません。』と云つて、また顔を反けた。

『お出来になりませんか？』

『出来ません。さやうなら。』

彼は出口の方へ歩き出した。

『もうちよつと待つて下さい。』とエレーナは云つた。『あなたはまるで、わたしを恐れてゐらつしやるやうですね。わたしの方があなたより勇氣がありますわ。』思ひがけなく全身に軽い戦あきを感じながら、彼女はかう云ひ足した。『わたし申し上げても構ひませんか？……なぜわたしがこゝにゐたかつて事を？』

申しませうか？……わたしがどこへ行かうとしてゐたか、あなたお分かりになりました？』

インサーロフは驚きの目を睜つて、エレーナを見つめた。

『あなたの所へ行く途中だつたんです。』

『僕の所へ？』

エレーナは両手で顔を隠した。

『あなたは無理にわたしに云はせたかつたんですね——わたしがあなたを愛してゐるつて事を。』と彼女は囁いた。『これで……云つて了ひましたわ。』

『エレーナ！』とインサーロフは叫んだ。

エレーナは彼の両手を取つて、その顔を見上げると、いきなり、その胸に身を投じた。

彼はしつかりとエレーナを抱き緊めて、ぢつと黙つてゐた。彼はエレーナを愛してゐるなどと、口に出して云ふ必要がなかつた。彼の叫び聲や、瞬間に彼の表情が一變した事や、エレーナが心から任せ切つたやうに全身を寄せてゐる胸の高まりや、彼の指先が自分の髪にふれる感じなどで、エレーナは彼が自分を愛してゐることを悟つたのである。彼は沈黙を續けてゐた。そして、彼女には言葉など一切必要がなかつた。

『この人はこゝにゐる、この人は愛してくれてゐる……その上にまだ何が要らう？』

法悦の静寂、つひに目的を達して、何ものにも犯される事のない隠れ家に入つた静寂の感じ、死にさ

へも意義と美を興へる天國の如き静寂の感じが、さながら神々しい波のやうに、エレーナの全存在を満たした。彼女はもう何も望まなかつた。それは現在すべてのものを領有してゐたからである。

『おゝ、わたしの兄弟、わたしの親友、わたしの戀ひ人……』と彼女の唇は囁いてゐた。彼女は自分の胸の中でかくも甘く鼓動し、かくも甘く溶けて行くのが、男の心臓か自分の心臓か分からなかつた。彼はちつと身動きもせず立つたまゝ、自分に身を任せたこの若い生命を、強い抱擁の中に包んだ。彼はこの新しい、無限に尊い重荷を、自分の胸の上と感じた。ゆるぎ知らぬ感謝と感激の情が、彼の強い魂をこなくくに打ち砕いた。そして、かつて経験したことのない涙が、目頭に浮かんで来た……
けれど彼女は泣かなかつた。彼女はたゞ『おゝ、わたしの親友、わたしの兄弟』と繰り返すばかりであつた。

『それぢや、どこまでも僕の後について来てくれるね?』依然としてエレーナを抱擁の中に包み支へながら、十五分ばかり経つたとき彼はかう云つた。

『どこへでも、世界の果てまでも。あなたのゐらつしやる所なら、わたしも必ず行くわ。』

『でも、お前は自分を欺いてゐるんぢやないの? お父さんやお母さんが、決してこの結婚に賛成な
さらないつて事は、お前も知つてゐるだらうね?』

『わたし自分を欺いたりなんかしませんわ。それはわたしも知つてゐます。』

『お前は僕が貧乏で、殆んど乞食同然だと云ふ事も承知してゐるだらうね?』

『知つてゝよ。』

『また僕がロシア人でないから、ロシアで生活する譯にいかない。随つて、お前も祖國や肉親と一切絶縁しなくちやならないといふ事も?』

『知つてゐるわ、知つてゐるわ。』

『それからまた僕が非常に困難な、報いられる事のない事業に、一身を捧げてゐるので、僕は……僕たちは危険に身を曝らすばかりでなく、さまざまな困窮や、屈辱にさへ陥るに相違ないといふ事も、やはり知つてゐるだらうね?』

『知つてゐるわ、みんな知つてゐるわ……わたしあなたを愛してゐます。』

『またお前は今までの習慣をすべて抛つた上、他國人の間にたつたひとり交じつて、労働までしなければならぬかも知れない……』

エレーナは彼の唇に手を載せた。

『わたしあなたを愛してゐるのよ。』

インサーロフは彼女の細い薔薇色の手に、熱い接吻を印し始めた。エレーナはその手を彼の唇から放さないで、妙に子供らしい喜びと、樂しげな好奇の色を浮かべながら、彼が自分の手の甲や指の先に、隙間なく接吻する様子を、ちつと見つめてゐた……

不意に彼女はさつと赤くなつて、男の胸に顔を埋めた。

彼はやさしくその頭を持ち上げて、穴の明くほど彼女の目を見つめた。

『それでは、これでいよいよ。』と彼は云つた。『お前は人間に對しても、神に對しても、永久に僕の妻だ！』

一九

一時間たつてから、エレーナは一方の手に帽子、いま一方の手にマンチリヤを持つて、別荘の客間へ靜かに入つた。髪は微かにほつれて、兩の頬には小さな薔薇色のしみが見えてゐた。微笑はその唇からいつまでも消えようとしなくて、目はともすれば瞬り勝ちになつた。そして半ば閉ぢたまゝ、やはり微笑を浮かべてゐた。彼女は疲勞のために、やつこの事で足を運んでゐたが、この疲勞さへも快かつた。何もかも快かつた。すべてのものが、彼女の目には優しく、愛想よく映るのであつた。ウヴァール老人が窓の下に坐つてゐた。彼女は傍へ寄つて、その肩に手を載せ、ちよつと伸びをすると、なぜかひとりでも笑ひ出せた。

『なんだね？』と老人はびつくりして尋ねた。

エレーナは、なんと云つていゝか分からなかつた。彼女はウヴァール老人を接吻しなくなつた。

『蛙のやうに、でせう？……』彼女はやつとかう云つた。

けれど、ウヴァール老人は眉一本うごかさなで、呆れたやうにエレーナを眺め續けた。エレーナは老

人の上へマンチリヤと帽子を落とした。

『わたしの大好きなウヴァール叔父さん。』と彼女は云つた。『わたし睡いの、わたし疲れたの。』彼女はまたから／＼と笑ひながら、傍の長椅子に身を投げた。

『ふむ、』とウヴァール老人は叫んで、指をひら／＼動かし始めた。『それは必要な事だよ。さうとも……』エレーナはあたりを見廻しながら、こんな事を考へてゐた。

『今にわたしはかういふものに、すつかりお別れしなくちやならないんだわ……でも、不思議な事には、わたしの心の中には恐怖も、躊躇も、哀惜もない……でも、お母さまだけは可哀さうだわ！』

それからまた彼女の目の前に、今日の禮拜堂が現れた。そしてまた彼の聲が耳に響き、體の周圍に彼の腕を感じた。心臓は喜ばしく、とは云へ微かに動いた。幸福の物憂さが靜かに擴がつてゐた。ふと乞食の老婆が思ひ出された。

『本當にあのお婆さんが、わたしの悲しみを持つて行つてくれたやうだ。』と彼女は考へた。『あゝ、わたしはなんて幸福なんだらう！ 本當に分らぬ過ぎるやうな幸福！ しかもこんなに早く。』

もし彼女がほんの少しでも氣を許したら、甘い涙が止め度なく流れ出したに相違ない。彼女は笑ひ聲を立てる事によつて、やうやくその涙を抑へてゐるのであつた。どんな姿勢をとつて見ても、それ以上具合ひのいゝ、樂な状態はないやうな氣がした。まるで揺り籠にゆられてゐるやうな按配だつた。彼女の動作はすべてゆつたりと柔かみを帯びて、以前の性急なごつ／＼した感じは、どこへ行つたかと思は

れるやうであつた。

ゾーヤが入つて来た。エレーナはこんな可愛い顔を、かつて見たことがないやうに思はれた。アンナ夫人が入つて来たとき、エレーナは何かにくくりと刺されたやうな気持ちをした。けれど、彼女は譬へやうもない優しい愛情をこめながら、人のいゝ母親を抱き緊めて、もう微かな霜を置き始めた生え際に近く、その額を接吻した！ それから、彼女は自分の部屋へ入つた。そこではすべての物が、彼女に笑ひかけるやうであつた！ 彼女はつゝましやかな勝利感を胸に懐きながら、三時間前にあれほど悲痛な瞬間を過ごした寢臺に腰を下ろした！

「わたしはもうあの時から、あの人が愛してゐるつて事を、ちやんと知つてゐたのだ。」と彼女は考へた。「それにもつと前からも……あつ、いけない！ いけない！ こんな事は罪惡だ。『お前は僕の妻だ』……」彼女は両手で顔を隠しながらかう囁くと、いきなりそこに跪いた。

夕方ちかくなると、彼女の様子はもの思はしげになつた。急にはインサーロフに會へないと思ふと、不意に気持ちが沈んで来たのである。もし彼がベルセーネフの宿に續けて滞在したら、人々の疑惑を呼び醒まさずには濟まない。かういふ譯でふたり相談の結果、インサーロフは豫定どほりモスクワへ歸つて、秋までに二度こゝへ遊びに来るといふ事に決めた。エレーナの方では、いじう手紙を送ることにして、もし出来れば、どこかクンツォフ附近でランデーザを約束した。

茶の時に客間に下りて見ると、そこには家の人がすつかり集まつてゐた。シューピンは彼女が姿を現

はすや否や、じろりと鋭く一瞥を投げた。彼女は以前どほり隔てのない態度で、彼に話しかけようと思つたけれど、シューピンの藝術家的な洞察力を恐れ、かつは自分自身をも恐れた。彼が二週間以上も没交渉の態度をとつてゐるのは、たゞではないと云つたやうな気がした。

やがてベルセーネフが來訪して、インサーロフの言づけを傳へ、アンナ夫人に挨拶もしないで、モスクワへ歸つたのを、ひどく恐縮してゐるといふ話をした。インサーロフの名前はこの一日を通じて、今はじめエレーナの前で發せられたのである。彼女は顔が赤くなつたのを感じた、それと同時に、ああいふ立派な知人が急に出發したに就いて、遺憾の意を表白するのが至當だ、と氣がついたけれど、どう思つても、空々しい眞似が出来なかつたので、アンナ夫人がしきりに嘆聲を發しながら、残念がつてゐる間、相變はらずちつと黙つて坐つてゐた。エレーナはベルセーネフの傍を離れないやうにした。ベルセーネフは、彼女の秘密の一部分を知つてゐたけれど、彼女はこの人を怖いと思はなかつた。そして彼の翼の下に隠れながら、依然としてじろく自分の方を眺める、シューピンの視線を防いだのである。もつとも、シューピンの目つきは嘲笑的ではなくて、たゞ恐ろしく注意ふかまつた。

夜のそ
豫想したのである。幸ひ、彼とシューピンの間に藝術論が始まつたので、彼女は脇の方へ引つ込んで、半ば夢ごゝちに二人の聲を聞いてゐた。その中に、だんくこの二人ばかりでなく部屋ぜんたい——彼女を取り圍んでゐるすべてのものが、なんだか夢のやうに思はれて來た。テーブルの上の湯沸サモビルも、ソフ

「イル老人の短いチョッキも、ゾーヤのつる／＼に磨いた爪も、壁にかゝつてゐるコンスタンチン大公の油繪も、何もかも遠くへ流れて行つて、ぼんやりと霧につままれ、やがて存在を消して了つた。たゞ彼女のみが氣の毒に思はれた。」

「なんのために生きてゐるんだらう？」と彼女は考へた。

『お前ねむいの、レーノチカ？』と母が尋ねた。

彼女はその問ひが耳に入らなかつた。

『半ば正しい暗示と云ふのかい？……』シュービンの鋭い調子で發したこの言葉が、突然エレーナの注意を呼び醒ました。『飛んでもない。』と彼は言葉を續けた。『つまり、その中に趣味があるのだ。正しい暗示は倦怠を呼び起こす——それはキリスト教的でない。人は正しくない暗示に對して、無關心の態度をとるが——それは馬鹿げてゐる。ところが、半ば正しい暗示からは、いま／＼しさとじれつたさを感じざるものだ。例へばだね、もしエレーナさんが、僕らのうち誰か一人に戀ひしていると云つたら、それは如何なる種類の暗示に屬するかね、え？』

『あゝ、パーエルさん』とエレーナは云つた。『わたしはあなたに、自分のいま／＼しさをお見せしたいんだけど、とても出来ないの。わたしすっかり疲れてるもんですから。』

『お前どうして寝に行かないの？』とアンナ夫人は云つた。彼女は晩になると、いつも居眠りしてゐるので、ほかの者もベッドへ追ひやるのが好きだつた。『さあ、お別れを云つて、さつさとお行きなさい。ベル

セーネフさんも堪忍して下さるだらうから。』

エレーナは母に接吻して、一同に會釋をすると、部屋から出て行つた。シュービンは彼女を戸口まで見送つた。

『エレーナさん、』と彼は鬨ぎはで囁いた。『あなたはこのパーエルを、踏みにじつてお了ひになりましたね。僕の體を踏みながら、容赦なく越していらつしやいますね。ところが、このパーエルはあなたを祝福します。あなたの足も、その足を包んでゐる靴も、その靴の踵も祝福します。』

エレーナは肩をすくめて、いや／＼ながら彼に手を差し伸べた——それはインサーロフが接吻したのと違ふ方の手だつた。自分の部屋へ歸ると、すぐに着替へをして横になつたかと思ふと、すや／＼と睡りに落ちた。彼女は深い穩かな睡りを貪つた……それは子供の睡りとも云へないくらゐであつた。それはたゞ病ひから癒えた幼子が、母にその揺り籃を守られ、その顔を見つめ、寢息に耳を濟まして貰つてゐる時に、始めて睡り得るやうな特殊の睡りであつた。

『君ちよつと僕の部屋へ寄つてくれないか。』ベルセーネフがアンナ夫人に別れを告げるが早い、シュービンは待ち兼ねたやうにかう云つた。『少し君に見せたいものがあるんだ。』

ベルセーネフは彼の離れへ行つた。彼は習作や、立像や、胸像などの夥しい數に驚いた。それらは濕

つた布を被せられて、部屋の隅から隅まで、一面に並らばたて、あつた。

『なるほど、この様子で見ると、君は冗談でなしに、仕事をしてゐるやうだね。』と彼はシュービンに云つた。

『だつて、何かしなくちやしやうがないからね。』とこちらは答へた。『一方が駄目なら、いま一方をやつて見なくちや。もつとも、僕はコルシカ人のやうに、純藝術よりか血の復讐に精進してゐるんだよ。』

Treme Bisanzia (并チンチン)
上戦標せよ)

『分からないね。』とベルセーネフが云つた。

『まあ、待つてゐ給へ。これからご覧に入れるよ、尊敬すべき親愛なるベルセーネフ君。これが僕の復讐の第一號だ。』

シュービンは一つの像から蔽ひを取り除けた。と、ベルセーネフの目に映つたのは、非常によく似せた見事なインサーロフの胸像だつた。顔の輪廓は極めて微細な點まで正確に擷んであつた。そして表情も高潔な、品位のある、大膽な感じを與へられてゐた。

ベルセーネフは感心して了つた。

『いや、これは實に傑作だ！』と彼は叫んだ。『お芽出たう。これなら展覧會に出しても立派なものだ！だが、どうして君はこの立派な作品を、復讐だなどと云ふんだね？』

『それはほかでもない、僕はこの……君の言葉を借りて云へば、立派な作品を、エレーナさんの命名

日祝ひに、進呈しようと思つてゐるんだ。君はこの諷諭が分かるかね？ 僕たちは目くらちやないから、自分たちの鼻光で行はれてゐる事が、目に入らない筈がない。けれど僕等は紳士だからね、紳士らしい復讐をするのさ。』

『それからこれだ。』いま一つの像から蔽ひを除けながら、シュービンはかう云ひ足した。『最新的美學によると、藝術家は自己の内部に、あらゆる醜惡な要素を體現して、それを珠玉の如き藝術品にまで高め得ると云ふ、羨むべき權利を享有してゐるさうだ。そこで僕は、この第二號の藝術的珠玉を創造することによつて、今度は紳士どころか、たゞのごろつきみたいな復讐をした譯だ。』

彼は器用に手際よく布をはね除けた。するとベルセーネフの目の前に、同じインサーロフをモデルにした、ダンタン式趣味の塑像が現れた。それはこれ以上に毒々しい皮肉なものを、考へ出すことさ、出來ないと思はれるくらゐであつた。若いブルガリヤ人は後足で立つて、角を傾けながら人を突く構へをしてゐる、牡羊の姿に表現されてゐた。鈍感な癖に偉さうな様子がしたくて、鼻つ張りが強く、強情で無器用で、智慧の足りないらしい持ち前の性質が、この『にこ毛うづ巻く牝羊の夫』の顔に、はつきり印せられてゐた。しかも、その相似は驚くばかり歴々としてゐたので、ベルセーネフは腹を抱へて笑はずにゐられなかつた！

『どうだい？ 面白いだらう？』とシュービンは口を切つた。『あのヒーローが見分けられるかね？ これもやはり展覧會出品を勧告してくれるかね？ いや、君、これは僕自身の命名日祝ひに、自分で自

分に贈るつもりだ……閣下、こゝで一踊りさして頂きます！」

シューピンはかう云つたかと思ふと、三度ばかり飛び上がつて、靴の裏で自分の尻を叩いた。

ベルセーネフは床から布を拾ひ上げて、それを彫刻の上に被せた。

『あゝ、君は實に寛大だ。』とシューピンは云つた。『歴史上、一ばん寛大な人間となつてゐるのは、一體だれだね？ いや、どうだつていゝさ！ さて、ところで、』かなり大きな第三の粘土の塊から、莊重な、しかも愁はしげな様子で蔽ひをとりながら、彼は言葉を續けた。『今に君は自分の親友の謙抑さと、洞察力を證明するやうな作品を、目のあたり見ることになるんだよ。君の親友は、なんと云つても、眞の藝術家だから、自己折檻の要求と効果を感じてゐるんだ。君もなるほどと思ふだらう。さあ、刮目し給へ。』

布が宙に舞ひ上がった。と、ベルセーネフの目には、まるで生え繫がつたやうに、びつたり並らべて作られた二つの首が映つた……彼はちよつとなんの事か分からなかつたが、よく見定めると、一つはアンヌシカで、いま一つはシューピンの首だと分かつた。もつとも、それは肖像と云ふよりも、寧ろカリカチュアであつた。アンヌシカは額が狭く、目がぼうつとして、鼻が氣味よく上向きに反つた、油ぎつて美しい娘になつてゐた。その厚ぼつたい唇は、しやあくとした微笑を浮かべてゐる。全體に彼女の顔は肉感的で、のんきさうで、蓮つ葉で、しかも人の好きさうな所さへあつた。シューピン自身は、瘡せひよろけた遊治郎の感じに仕上げられてゐた。頬は瘡せこけて、薄い髪が力なく垂れかかり、鼻は死

人のやうに尖つて、火の消えたやうな目には、無意味な表情が漂つてゐる。

ベルセーネフは嫌惡の色を浮かべながら、顔をそむけた。

『この一對はどうだね？』とシューピンが口を切つた。『何か似合はしい銘でも作つてくれないか？ 始めの二つには、もう僕が自分で銘を考へたよ。胸像には、「祖國を救はんと志す英雄」といふ銘が入るんだ。全身像の方には、「獨逸つぼら、氣をつける！」だ。ところで、この分には、かういふ字を入れたらどうだらう？——「畫家バーゼル・シューピンの未來」……いゝだらう？』

『よし給へ。』とベルセーネフが云ひ返した。『こんなものに時間を潰すなんて……こんな……』ベルセーネフは急に適當な言葉を考へつけなかつた。

『穢らしいものでも云ふつもりかね。違ふよ、君。失敬だが、もし何か展覽會に出すとしたら、そりやもうこの群像に決まつてゐるよ。』

『全く穢らしいものだよ。』とベルセーネフは相手の言葉を繰り返した。『それにまあ、なんと云ふばかげた話だ！ 君はかういふ傾向に發達するやうな素質を、まるで持つてゐやしない。ロシアの藝術家は今までのところ、不幸にしてそいつを豊富に恵まれてゐるがね……君はたゞ自己譏諷をやつてゐるだけなんだ。』

『君はさう思ふかい？』とシューピンは沈んだ調子で云つた。『もし今のところ持つてゐないのに、將來それが僕に植ゑつけられるとしたら、それは……ある人のせゐなんだ。君は知らないだらうが。』悲劇

的に眉を顰めながら、彼はかう云ひ足した。『僕はもう酒を始めたんだよ。』

『出たら目を云つちやいけない?!』

『始めたんだよ。本當に。』とシューピンは云ひ返したが、急ににつと笑つて、はればれしい顔つきになつた。『ところが、甘くないんだよ、君、喉を通らないんだ。おまけに後で頭ががん／＼鳴つてね。モスクワ一番の——いや、ある人に云はせればロシア一番の、底なし上戸と云ふ感名を馳せてゐるルシチーヒン——ハランバイ・ルシチーヒンが、僕はたうてい見込みがないと断定したよ。先生の言葉によると、僕は酒邊を見ても、なんらの感興をも惹起しない人間なんださうだ。』

ベルセーネフは群像に向かつて、手を振り上げようとした。けれども、シューピンはそれを押し止めた。

『よせよ、君、壊しちやいけない。これはかういふ片輪として役に立つんだ、案山子として役に立つんだ。』

ベルセーネフは笑ひ出した。

『さういふ譯なら、まあ君の案山子を助けておかう。』と彼は云つた。『そして純な永遠の藝術萬歳だ。』

『さうだ、萬歳だ!』とシューピンが受けた。『藝術と共に暮らせば、善きものは更によくなるし、悪しきものも邪魔にはならないよ!』

二人の親友は固く握手して別れた。

エレナが目を醒ましたとき、まづ第一に感じたのは、喜ばしい驚愕の念であつた。『一體ほんたうか知ら? 本當か知ら?』と彼女は自問した。すると、心臓は幸福の餘り痺れたやうになつた。さまざまの追憶が波のやうに襲つて來た……彼女はその中で溺れさうになつた。やがて再び、かの法悦に近い感激に充ちた静寂が、彼女を包んだ。

けれどその日の午前中に、エレナはだん／＼不安の虜になつて行つた。そしてこれに續く二三日の間、彼女はもの憂いやうな、つまらないやうな気分になつた。もつとも、彼女はいま自分の望んでゐることを知つてゐたけれど、それかと云つて、氣持ちが樂にはならなかつた。かの永久に忘れ難い、二時間は、完全に彼女を古い生活の軌道から叩き出したのである。彼女はもうその軌道を歩まないで、ずつと遠く離れてゐた。けれど、それにも拘らず周囲のすべては、いつもながらの秩序を保つて、まるでなんの變化もなかつたやうに、自分自身の循環を續けてゐた。古い生活はエレナの參與と助力を期待しながら、依然として進行してゐた。

彼女はインサローフに手紙を書かうと試みたが、それはうまく行かなかつた。紙の上に現はれる言葉は、死んだやうに生氣のないものか、さもなくば誠實味のないものばかりだつた。日記はすつかりやめて了つた。彼女は最後の行の下に長い横線を引いた。それらはみな過去の事であつたが、彼女の全存

在、全感覺は、未來の世界に去つてゐた。彼女は苦しかった。何事も夢にも知らない母の傍に坐つて、その言葉を聞いたり、答へたり、話しかけたりするのは、エレーナにとつて何か罪感のやうに感じられた。彼女は、自分の内部にある虚偽の存在を感じた。何も顔を赫らめるやうな事はなかつたけれど、彼女はよく自分で自分に憤りを感じた。そして、後でどうならうと、何もかもすつかり隠さず打ち明けて了ひたいと云ふ、殆んど矢も楯も堪らぬやうな欲望が、幾度も彼女の心中に湧き起こつた。

「なぜドミートリイはあの時すぐ、あの禮拜堂から、どこへなと好きな所へ、わたしを連れて行つてくれなかつたらう？ わたしは人に對しても、神に對しても、あの人の妻だと、自分で立派に云つたぢやないの？ なぜわたしはこんな所にあるんだらう？」と彼女は考へた。

168
彼女は不意にすべての人——ウワール老人さへ避けるやうになつた。老人は以前よりもつと頻繁に、合點の行かない顔つきをしては、指をひら／＼動かしてゐた。エレーナはもう周圍のものすべてが、懐かしいものとも、愛すべきものとも思はれなかつた。幻のやうな気持ちさへしなかつた。それは悪夢のやうに、ちつと動かぬ生命のない重石となつて、彼女の胸を押しつけるのであつた。と同時に、それは彼女を責め詰つて、その気持ちを察しようとしなない、そんな風を感じられた……『お前はなんと云つても俺たちのものだ』と云つてゐるやうな按配だつた。彼女の養つてゐる哀れな鳥や獸まで、なんとなく迂散くさ／＼うな、敵意に充ちた表情で、彼女を眺めた——少くとも、彼女にはさう思はれたのである。彼女は自分自身の感情が耻づかしくなつて、氣が咎めて來た。

「だつて、これはなんと云つても自分の家、自分の家族、自分の祖國ぢやないか……」と彼女は考へた。いや、これはもうお前の家族ぢやない、お前の祖國ぢやない。」と別の聲が彼女に囁いた。恐怖の念が次第に彼女を領して行つた。で、彼女は自分で自分の意氣地なさか、いま／＼しくなつた。事はやつと始まりかゝつたばかりなのに、自分はもう忍耐力を失はうとしてゐる……自分があのと時約束したのは、まだ／＼こんな事どころぢやない！

彼女はまた暫く自分を制馭することが出来なかつた。けれど一週間たち、二週間たつうちに、エレーナは少し落ち着いて來て、自分の新しい状態に慣れることが出來た。彼女はインサーロフ宛てに短い手紙を二通かき、それを自分で郵便局へ持つて行つた。彼女は耻づかしさのためにも、矜持のためにも、決して小間使ひに頼む氣にならなかつた。彼女はもうインサーロフ自身を待ち焦がれ始めた……けれどインサーロフの代りに、ある日思ひがけなく、主人のニコライがやつて來た。

三三

退職近衛中尉スターホフの家ではこの日ほど、主人が澁い顔をしてゐるのを見たことがなかつた。しかしニコライの顔はそれと同時に、恐ろしく恃むところあり氣な、物々しい表情をしてゐた。彼は外套と帽子をつけたまま、客間へ入つて來た。足を大きく擴げて、踵をこつ／＼鳴らしながら、ゆつくり入つて來ると、鏡に近寄つて、落ち着き拂つた嚴めしい様子で、頭を振り、唇を噛みながら、長いあひだ

自分の顔を見つめてみた。

アンナ夫人は上べに興奮の色を表はしながら、内心の喜びを隠して、夫を出迎へた（夫人の出迎へ方は、いつも決まつてかうなのであつた）。ニコライは帽子もぬがなければ、妻に挨拶さへしなかつた。そして無言のままエレーナに、革の手袋を接吻さした。アンナ夫人は治療の経過を尋ねたが、ニコライはなんの返事もしなかつた。ウヴール老人が姿を現はした——ニコライはそれをちらと見て「やあ！」と云つたばかりである。全體に彼はウヴール老人に對して、上から見下ろすやうな、冷たい態度をとつてゐた。そのくせ彼は老人に『純粹なスターホフ家の血統』を認めてゐたのである。周知の如く、殆んどすべてのロシア貴族は自分の家の血統に、獨自の特色が存在してゐるものと確信してゐる。よく血族同志が『ポドサラースキン風の鼻』とか『ペレプレーフ式の後頭』とか云ふやうな話しをしてゐるのが、われ／＼の耳に入るものである。

ゾーヤが入つて来て、ニコライの前に腰を下ろした。ニコライは咳拂ひを一つして、肘椅子にどつしり身を落とし、コーヒーを云ひつけた後、やつと始めて帽子を取つた。コーヒーが運ばれた。彼はそれを飲み干すと、順にみんなを見廻して、齒の間から押し出すやうな調子で云つた。

『どうか出て行つて貰ひたい。』それから妻に向かつて云ひ添へた。『奥さん、あなたはこゝに残つてゐて貰ひませう。』

アンナ夫人をのけて、みんな部屋を出て行つた。夫人は興奮の餘り頭を慄はせてゐた。彼女は夫の物

物しい態度に、度膽を抜かれて、何か異常な事を待ち構へてゐた。

『一體なんですの！』ドアが閉まるのを待ち兼ねて、彼女はかう叫んだ。

ニコライは妻に無關心な視線を投げた。

『何も變はつた事ぢやないよ。お前はすぐに、まるで人身御供かなんぞのやうな顔つきをしたがるが、實に妙な癖だね。』必要もないのに、一語々々で唇の兩隅を下げながら、彼はかう云ひ出した。『わたしはたゞ前觸れがしたかつたばかりなんだ——今日うちで新顔のお客さんが食事をなさるのでね。』

『一たい誰ですの？』

『クルナトーフスキイ——エゴール・アンドレイイチだ。お前は知らないだらうが、樞密院の書記長だ。』

『その方が今日うちで食事をなさいますの？』

『さうだ。』

『あなたはそれだけの事をおつしやるために、わざ／＼人拂ひをなすつたんですの？』

ニコライはまた、アンナ夫人にじろりと一瞥を投げた。けれど、今度はもう皮肉な一瞥だつた。

『お前はそんな事に驚いてゐるのかね？ 驚くのは少し待つた方がいゝよ。』

ニコライは口を噤んだ。アンナ夫人も暫く沈黙を守つてゐた。

『もしなんでしたら、伺ひたいもので……』

『お前はいつもわたしを「非道徳」な人間だと思つてゐる。それはわたしにも分かつてをる。』急にニコライはかう云ひ出した。

『わたしが！』とアンナ夫人は驚いてかう呟いた。

『そして、お前の考へが正しいのかも知れない。それはわたしも否定しようと思はない。實際わたしはとき／＼お前に、正當な不満の動機を興へたのだから——（葦毛の馬といふ考へが、アンナ夫人の頭に閃いた）——もつとも、これだけは認めて貰はなくちやならんが、現在のやうなお前の健康状態では……』

『わたし少しも、あなたを咎め立てなどしてはをりません、ニコライ・アルターミッチ。』

『かも知れない。いづれにしても、わたしは自己辯護をしようなどと考へてをらん。時があかりを立ててくれるだらう。しかし、わたしは自分の義務として誓つて云ふが、わたしも自分のなすべき事は知つてをるから、自分に委ねられた……委ねられた家族の利益のために……配慮することは、心得てをるのだ。』

「一體これはなんの事だらう？」とアンナ夫人は考へた（彼女は、前の晩イギリス倶楽部の喫煙室で、ロシア人が演説の才能を持つてゐないといふ問題について、一場の議論が持ち上がったのを、知らなかつたのである。一體われ／＼の仲間が話しが出来るのは誰だね？ 一つ名を上げて見給へ。』と一人が叫んだ。『さうさ、まあスターホフ君を上げたつていゝぢやないか。』といま一人が答へて、傍に立つてゐる

ニコライを指さした。ニコライは嬉しさの餘り、思はず叫び聲を立てないばかりであつた。

『例へば、』とニコライは言葉を續けた。『わたしの娘のエレーナだ。あれもいよく斷乎たる足取りで、人生の行路に踏み出す時が来たのだ。お前さうは思はんかね？ つまり、わたしが云はうと思ふのは結婚の事だ。あゝいふ學者ぶりや博愛氣取りは結構だが、それもある程度までだ。ある年齢までだ。あれもそろ／＼雲を掴むやうな考へを捨て、いろんな藝術家とか、學生あがりとか、モンテネグロ人とか、さういふ者との交際を脱して、人間なみにならなくちやならん。』

『あなたのお言葉を、どうとつたら宜しいのでせう？』とアンナ夫人は尋ねた。

『それはつまり、かういふ事だ、一つ聞いて貰ひたい。』相變はず唇の隅を下げながら、ニコライは答へた。『眞つすぐざつくばらん云つて了ふと、わたしはこのクルナトーフスキイと云ふ若紳士と、近づきになつたのだ。むろん女婿にしたいといふ期待を持つてだ。お前もその當人を見たら、わたしの依怙最眞といふか、輕率な人物批判といふか、さういふ點を責めはしないだらうと信ずる（ニコライはかう云ひながら、自分で自分の雄辯に聞き惚れてゐた）。最高の教育を授かつて——その人は法律家なんだ——進退舉措も立派なものだ。年は三十三、官等は六等官、樞密院の書記長を勤めてゐて、スタニストラフ勳章を頸にかけてゐる人物だ。お前はまさかわたしの事を、うは言にまで官等ばかり問題にしてゐるやうな、喜劇の父親の仲間とは考へてをらんだらうね。お前も自分でさう云つたぢやないか——エレーナには實際的な、しつかりした人物が氣に入るのだつて。クルナトーフスキイは自分の専門にかけ

そ たら、無二の事務家だよ。また別の方面から見ても、エレーナは寛大な行爲を溺愛する弱點を持つてをるが、クルナトーフスキイは——いゝかね、よく聞いておいで——自分の俸給で不自由のない生活が出来るやうになると、早速兄弟たちのために思つて、父親から毎年もらつてゐた補助金を辭退したんだよ。』

『そのお父さんといふのは誰のですの？』とアンナ夫人は尋ねた。

『父親かね？ 父親もその筋合ひでは有名な人物で、極めて徳養の高い眞のストイック派だ。確か退職の少佐か何かで、B伯爵の領地全體を……管理してをるらしい。』

『あら！』とアンナ夫人は口を滑らした。

『あら！ 何があらだ？』とニコライは抑へた。『お前はもう下らん偏見に感染してをるのか？』

『わたし別に何も申しませんでしたよ。』とアンナ夫人は云ひかけた……

『いや、お前はあら！』と云つた……何はともあれ、わたしは自分の思想状態を、豫めお前に知らせておく事を、必要と認めた譯だ。そしてクルナトーフスキイ氏は、開かれた腕の中へ迎へ入れられる事と、敢へて考へる……敢へて囑望する次第だ。これは得體の知れぬモンテネグロ人などは譯が違ふ。』

『そりやさうですとも。ですが、料理人のワンカを呼ばなくちやなりませんわ。料理をふやすやうに云ひつけなくちや。』

174 『お前も心得てをるだらうが、わたしはさういふ問題には立ち入らんからね。』とニコライは云つて、席を立つた。そして帽子をとつて、口笛を吹きながら（彼は誰からか、口笛といふものは別荘か、馬場で

なければ吹かれない、といふ事を聞いたのである）、庭へ散歩に出かけた。シューピンは離れの窓からその姿を見ると、黙つて舌をべろりと出した。

四時十分まへに、一臺の驪遞馬車がスターホフの別荘に乗りつけた。かなり男前のいゝ、すつきりと垢抜けのした風采の若紳士が、車から出て案内を乞うた。それがエゴール・アンドレイイチ・クルナトーフスキイなのであつた。

その翌日、エレーナはインサーロフに宛てた手紙に、かういふ事を書き添へた。

『懐かしいドミートリイ、どうかお祝ひを云つて頂戴、わたしには花婿の候補者が出来ましたの。その人は昨日うちで食事をしました。お父さまがイギリス倶楽部で知り合ひになつて、家へ招待したらしいんですの。もつとも、無論その人は、花婿の候補者として來た譯ぢやありません。けれど親切なお母さまが、お父さまからその目算を聞いてゐたので、それがどういふお客様かつてことを、そつとわたしに耳打ちして下さいました。その人の名はエゴール・クルナトーフスキイと云ふんですの。樞密院で書記長を勤めてゐるさうです。まづ手始めに、その人の風采から書いて行きます。脊は餘り高くなくて、あなたよりも小さいくらゐ、體の吊り合ひがよく取れて、顔の輪廓も正しい方です。髪は短く刈つて、大きな頬髯を生やしてゐます。目は小さくて（丁度あなたくらゐ）、色は鳶色、ちよこ／＼とよく動きまゐります。唇は平たくて幅が廣いんですの。その目にも唇にも、しじう微笑が浮かんでゐますが、それが妙に公式な感じで、まるで當直でもしてゐるやうです。態度はおそろしく率直で、ものの云ひ方ははつき

そりしてゐます。この人の動作はすべてはつきりしてゐて、歩くのも、笑ふのも、ものを喰べるのも、まるで仕事でもするやうな具合ひなんですの。よくも詳しく研究したものだな！」これを読みながら、あなたはかうお考へになるかも知れませんか。さうなんですの、つまりあなたに書いて知らせるために！それに、どうして自分の花婿を研究せずにゐられませう。この人には何かしら鐵のやうなところがあります……それと同時に鈍い、空っぽな、そのくせ正直さうな感じがするんです。また實際、この人は恐ろしく正直なんださうです。あなたもやはり鐵みたいな人ですけど、この人とは風が違ひます。

食事の時、この人はわたしの傍に坐つてゐました。わたしたちの前には、シュービンが陣取つてゐたんです。始めの間は、何か實業方面の話が出てゐました。話しの様子では、この人は實業方面の事にも通じてゐて、一時ほとんど勤務を抛つてまで、ある大きな工場を手に收めようと、考へたらしいんです。これだけは流石（うまい）に想像がつきませんでしたわ！それから、シュービンが芝居の話しを始めました。するとクルナトーフスキイ氏は——わたし偽りの謙遜なしに告白しますが——藝術はまるで分からない、と聲明しました。これはあなたを聯想させましたが……わたしかう考へましたの——なんと云つても、わたしやドミートリイが藝術を理解しないのは、その理解しない仕方が違ふ。クルナトーフスキイ氏は口にごそ出さないけれど、「わたしは藝術を理解しません。またそんなものは必要がないです。けれど、よく治まつた國家では、敢へてそれを禁じないです。」とでも云ひたさうな様子なんですの。

ベテルブルグの社交界や、社交上の心得などに對しては、かなり無關心な方で、一度などは、自分の

事をプロレタリアとさへ呼びました。われ／＼下等労働者は！と云つたやうな調子なんですの。わたしは心の中で、「もしドミートリイがあんな事を云つたら、きつと厭な氣がするに相違ないけれど、この人には勝手に云はしておけ！勝手に自慢するが、いゝ！」と考へました。わたしに對しては、大へん町噺（おどろ）でしたけれど、わたしはなんだか、恐ろしく鷹揚な長官から話しかけられてゐるやうな、さういふ氣持（きもち）ちが始終してゐました。この人は誰かを譽めようと思ふ時には、誰それは一定の規律を持つた人だ、と云ひます——これが口癖なんですの。この人はきつと自負心の強い勤勉な人で、自己犠牲の能力さへ備へてゐるに相違ありません（わたしが公平な批判者だつて事は、あなたも認めて下さるでせう）。けれど、それは自分の利益を犠牲にするといふ意味なので、本當は大變な専制君主に違ひありません。こんな人の手に落ちたら、それこそ災難ですわ！食事の席で、話しが賄賂といふ事に移つて行きました……

「わたしにはよく分かつてゐますが」と彼は云ふのです。「賄賂をとる者は、多くの場合ひ罪がない。つまり、それよりほかの行爲が出来なかつた譯なんです。が、それにしても、一旦それに落ち込んだ以上、その男は當然粉砕して了はなければなりません。」

わたしは思はず叫びました。

「罪のない者を粉砕するんですつて！」

「さうです、主義のために。」

「どんな主義なんです？」とシュービンが尋ねました。

クルナトーフスキイは間誤ついたともつかなければ、呆れたともつかないやうな表情をして、かう云つたものです。

『そんな事は説明するまでもありません。』

彼を崇拜し切つてゐるらしいお父さまは、大急ぎで口を入れて、むろん説明するまでもない、と云ひました。そして残念ながら、この話しは、それきりでお了ひになりました。

晩にベルセーネフさんが来て、クルナトーフスキイと激しい争論を始めました。あの善良なベルセーネフさんがあれほど興奮したのを、わたしはまだ見たことがありません。クルナトーフスキイ氏は、科擧とか大學とかいふものの利益を、決して否定した譯ではありませんが……それでも、わたしはベルセーネフさんの憤懣に同感できませんでした。クルナトーフスキイ氏はさういふものを、まるで體操かなんぞのやうに見てゐるんですもの。シュービンが食事の後で、わたしの傍へ寄つて来て、こんな事を云ふんです——この男ともう一人の人間（シュービンはどうしても、あなたの名を口に出すことが出来ないんです）——この二人はどちらも實際的な人間だが、しかしその間にどんな開きがあるか見て下さい。あちらは生活によつて與へられた、生きた理想だけれど、こちらは義務觀念とさへ云ふことも出来ない、單なる勤務上の正直さと、内容のない實務性があるばかりだ——ですつて。シュービンは賢い人です。わたしはあなたのために、この言葉を覚えておきましたの。けれど、わたしに云はせれば、あなた方二人の間には、まるでなんにも共通點などありません。あなたは信仰を持つてゐらつしやるけれど、あの人には

それがありません。だつて、自分ばかり信仰するのは、不可能なんですもの。

クルナトーフスキイは晩おそく歸つて行きました。お母さまがいち早く教へて下すつた話しによると、わたしはあの人の氣に入つたさうですし、お父さまはクルナトーフスキイに、夢中になるほど感心してゐらつしやるんですつて……あの人は、わたしの事も例の調子で、規律のある人間だと云はなかつたかしら？ わたしはすんでの事でお母さまに、大變お氣の毒ですけれど、わたしにはもう夫があります、と云ひさうになりましたの。なぜお父さまはあなたが無闇に嫌ひなんでせう？ お母さまの方は、まだなんとか出来るんですけれど……

お、懐かしいドミートリイ！ わたしがこんなに詳しくあの男の事を書いたのは、惱ましさを紛らすためなんですの。わたしはあなたなしには生きて行かれません。わたしは始終あなたの姿を見、あなたの聲を聞いてゐます……わたしはあなたを待つてゐます。だけど、あなたの考へてゐたやうに、わたしの家ぢやありません——だつて、考へてもご覧なさい。わたしたちはどんなに重苦しい、間の悪い氣持ちがするか知れませんか！——それより、わたしが手紙に書いたあの森の中でね……あ、懐かしい夫！ わたしがどんなにあなたを愛してゐるか！』

クルナトーフスキイの最初の訪問から三週間たつた時、アンナ夫人はモスクワの屋敷へ引き移つて、

エレナを喜ばした。それはブレチーステンカにある大きな木造の家で、正面には圓柱が並び、窓々の上には石膏で作った豎琴や、花輪などが飾られてゐた。屋敷には中二階もあれば、下女下男の部屋も幾つか別棟になつてゐる、周りに柵を巡らした緑の園もあつた。庭には井戸があつて、井戸の傍には犬小屋が設けられてあつた。アンナ夫人は決してこんなに早く、別荘を引き上げた事はないのだけれど、その年は初秋の涼氣とともに、風邪に悩まされたのである。また主人のニコライも、豫定の治療を終へると、そろ／＼夫人が戀ひしくなつて來た。丁度その頃アウグスチーナは、レーエルにある従妹の所へ逗留に行つたのである。おまけに、モスクワへ外國人の一家族がやつて來て、成型的姿勢ポイズナステークを見せるとか云ふことで、モスクワ報知に詳しい記事を載せてゐたのが、アンナ夫人の好奇心を強くそゝり立てたのである。一口に云へば、これ以上別荘に滞在してゐるのが、不都合になつたばかりでなく、ニコライの言葉を借りると、彼の豫定實行と兩立し難いものとなつたのである。

最後の二週間はエレナに取つて、恐ろしく長いやうに思はれた。クルナトーフスキイは二度ばかり訪ねて來たが、二度とも日曜日であつた。ほかの日は忙しかつたのである。彼は無論エレナのためにやつて來ただけけれど、主おまにゾーヤと話しをしてゐた。彼の女は、この男がすっかり氣に入つたのである。『これこそ本當の男だ！』クルナトーフスキイの淺黒い男らしい顔を眺め、その自信ありげな、しかもへり下つた話しを聞きながら、彼女は心の中でかう考へた。彼女に云はせれば、あれほど素ばらしい聲を持つてゐる人はまたと二人ないし、『僕は何々する光榮を有しました』とか、『僕は極めて満足です』な

どといふ句を、あれ程すつきり發音できる人も、ほかにその例を知らないくらゐだつた。インサーロフはスターホフ家へ來なかつたけれど、エレナは一人目を忍んで彼に會つた。それは彼女の指定したモスクワ河畔の小さな森の中だつた。彼等はほんの簡単な囁きを交はす暇しかなかつた。シューピンはアンナ夫人と一緒に、モスクワへ歸つた。ベルセーネフは二三日おくれで引き上げた。

インサーロフは自分の部屋に籠もつて、ブルガリヤから『幸便』で届いた手紙を、これでもう三度よみ返してゐた（彼等は郵便で手紙を出すのを、恐れてゐたのである）。インサーロフは手紙の内容に激しい不安を呼び醒まされた。近東の事件は急速に進展しつゝあつた。ロシア軍隊の諸王國占領は、人々の胸を波だたせてゐた。バルカンの風雲はますます急になつて、もう近く避け難い戦争の脈搏が聞こえるほどだつた。周圍一面に火の手が上がつて、しかもそれがどこまで擴がつて行き、どこで食ひ止められるかといふ事を、誰ひとり豫見できなかつたのである。古い侮辱も、かつて久しい希望も、すべてが一時にざわめき始めた。インサーロフの心臓は激しく鼓動した。『自分の希望も實現されようとしてゐる。けれど、まだ時期尙早ではないだらうか？ 徒勞に終りはしないだらうか？』と彼は拳を握り緊めながら考へた。『われ／＼はまだしつかり準備が出來てゐない——けれど、なるやうになれだ！ 出發しなくちやならない。』

何か微かに戸の外でさら／＼と鳴つた。と、急にドアがさつと開いて、部屋の中へエレナが入つて來た。

インサーロフは全身を慄はせながら、その方へ飛んで行つて、彼女の前に膝をつくつと、いきなりしなやかな體を抱き緊めた。そして、強く自分の頭を押し當てた。

『思ひがけなかつたでせう？』彼女はやつこのことで息をつぎながら、かう云つた（彼女は夢中で階段を駆け昇つたのである）。『懐かしいドミートリイ！ まあ、あなたはこんな所で暮らしてらつしやるのね……わたしすぐに見つかつたわ。あの仕立て屋の娘が案内してくれたの。わたしたちは一昨日ひき上げて來ましたの。わたし手紙を書かうかと思つたけれど、いつか自分で行つた方がいゝと、考へ直したのよ。わたしほんの十五分だけしかゐられないの。さあ、立つて、ドアに鍵をかけて頂戴。』

彼は立ち上がつて、手早くドアに鍵をかけると、すぐ引返して、彼女の手を取つた。彼は口をきくことが出来なかつた。喜びに息が窒まつたのである、彼女は微笑を含みながら、男の目を見つめてゐた……その目には無量の幸福が溢れてゐた……エレーナは恥づかしくなつた。

『ちよつと待つて。』彼女はやさしく手を引きながら、かう云つた。『この帽子を取らせて頂戴。』

彼女はリボンを解いて、帽子を抛り出し、マンチリヤを脱ぎ捨てると、ちよつと頭を直して、小さな古い長椅子に腰を下ろした。インサーロフは身動きもしないで、まるで魅せられたやうに、彼女を見つめてゐた。

『お坐んなさいよ。』伏せた目を上げないで、自分の傍の席を指さしながら、彼女はかう云つた。インサーロフは腰を下ろしたが、それは長椅子でなくて、彼女の足もとの床であつた。

『さあ、この手袋を脱がして頂戴。』と彼女は落ちつきのない聲で云つた。なんだか空恐ろしくなつて來たのである。

インサーロフは始めボタンをはづして、一方の手袋を引つ張りにかゝつた。そして、半分どころまで脱がしたとき、その下に白く現れた細い華奢な手頸へ、貪るやうに唇を押し當てた。

エレーナはびくりとなつて、いま一方の手でそれを遮らうとした。すると、彼はまたその手に接吻を始めた。エレーナは男を自分の方へ引き寄せた。彼は首を後へ投げた。こちらはその顔をちよつと眺めた後、身を屈めた——かうして、二人の唇は一つに融け合つた……

この刹那は過ぎた……彼女は身を投げ放して、立ち上がりながら『いけない、いけない。』と囁いて、素早くテーブルの傍へ近寄つた。

『ねえ、わたしはこゝの主婦なんだから、わたしに秘密なんでもない筈よ。』彼女は強ひて無造作らしく装ひながら、彼の方へ背を向けて、かう云つた。『まあ、大變な書類なこと！ これはどうした手紙？』

インサーロフは眉を顰めた。

『その手紙？』床から身を起ししながら、彼は云つた。『お前よんでも構はないよ。』

エレーナはそれを手の中で捻り廻してゐた。

『だつてこんなに澤山あつて、こんなに小さな字でびつしり書いてあるんですもの。わたしすぐに歸

そらなくちやならないんだから……構やしないわ……競争者から来たんぢやないでせうね?……おまけにロシヤ語ぢやないわ。』薄い紙をめくつて見ながら、彼女はかう云ひ足した。

インサーロフはエレーナに近づいて、そのしなやかな體に手を觸れた。彼女は急にくるりと振り向いて、明かるくにつこり笑ひながら、男の肩に凭れかゝつた。

『この手紙はブルガリヤから来たんだよ、エレーナ。友達が寄越したんだ。そして、僕をあらへ呼んでゐるのだ。』

『今すぐ? 向かう?』

『さうだ……今すぐなんだ。まだ今のところ餘裕があるから、今なら渡ることも出来るよ。』

彼女はいきなり男の頸の周りへ、両手を投げかけた。

『ねえ、わたしも連れだつて下さるでせう?』

彼はエレーナを胸に抱き緊めた。

『おゝ、可愛いエレーナ、おゝ、見上げたヒロイン、よくその一ことが發しられたね! しかし、僕のやうな家なしの一人者が、お前と一緒に引つ張つて行くのは、罪な事ぢやないだらうか? 狂氣の沙汰ぢやなからうか?……しかも、その行く先はどこだらう!』

彼女はその口に手で蓋をした。

『しつ……わたし腹を立ててよ。そして、これきりこゝへ來なくつてよ。だつて、何もかも決まつて

るんぢやありませんか? 二人の間の問題は、すつかり片附いてるんぢやありませんか? 一體わたしはあなたの妻ぢやないの? 一たい妻が夫と別れるつて法があるんですの?』

『女房は戦争に出て行かないよ。』半ば悲痛な微笑を浮かべながら、彼はかう云つた。

『さう、それは後に残つてゐられるときの話したわ。わたしがこゝに残つてゐられると思つて?』

『エレーナ、お前は天使だ!……けれど、よく考へておくれ。事によつたら、僕はこのモスクワを……二週間後に出發しなくちやならないかも知れないんだよ。僕はもう大學の講義や、仕事の完了などといふ事を、考へてゐられなくなつたんだ。』

『なんですつて?』とエレーナは遮つた。急に立たなくちやならないんですつて? えゝ、なんなら

わたしは今すぐ、明日とも云はずにこのまゝ、こゝへ残るわ。永久にあんたの傍にゐて、家へなんか歸らないわ。よくつてすぐに出發しませう、よくつて?』

インサーロフは更に一そう力を籠めて、彼女を抱擁の中に包んだ。

『あゝ、それぢや、もし僕が悪事をしてるのだつたら、潔く神罰を受けるまでだ!』と彼は叫んだ。

『今日から僕たち二人は永久に結び合はされたのだ!』

『それならわたし残るの?』とエレーナは尋ねた。

『いや、僕の天使、いや、僕の大事なエレーナ、今日は家へお歸り。けれど、準備だけはしておくがい。この仕事はいきなり一息にやる譯に行かない。ようく何もかも考へなくちや。これには金も要る

し、旅券も……』

『お金ならわたし持つてゐるわ。』とエレーナが遮つた。『八十ルーブリ。』

『さあ、それは大した額ぢやないね。』とインサーロフは答へた。『が、とにかく役には立つよ。』

『それに、もつと手に入れられるわ。わたし誰かに借りてよ、お母さまにお願いしてよ……いゝえ、お母さまにお願いするのはよしませう……わたし耳飾りも持つてるし、腕輪も二つあるし……エレーナも。』

『問題は金ぢやないよ、エレーナ。旅券、お前の旅券、これをどうしたものかなあ？』

『さあ、それをどうしたものでせう？ 旅券はどうしても要るの？』

『どうしても。』

エレーナはにやりと笑つた。

『いまわたしが何を思ひ出したか分かつて！ こんな事が頭に残つてゐるの——わたしがまだ小さい時分……家の小間使ひが逃げ出したのよ。その女は掴まつたけれど、結局罪を赦されて、長いあひだ家に勤めてゐたわ……それでも皆がこの女の事を、家出者のタチャーナと云つてたものだわ。わたしはその時、自分もその女のやうに家出者にならうとは、夢にも考へなかつたつけ。』

『エレーナ、よく恥づかしくない事だね！』

『どうしてなの？ そりや勿論、旅券を持つて出發した方が、いゝに決まつてるわ。でも、もしか駄

目だつたら……』

『そんな事は後でなんとか方法をつけるさ、後で。まあ待つておいで。』とインサーロフは云つた。『まあ、僕によく考へさしておくれ、状況判断をさしておくれ。その中に二人で萬事しつかり相談しよう。』

金は僕の手もとにもあるよ。』

エレーナは額に落ちかゝる髪を、片手で拂ひのけた。

『あゝ、ドミートリイ！ 二人で旅をしたら、どんなに楽しいでせうね！』

『さうだね。』とインサーロフは答へた。『けれど、行きつく先は……』

『いゝぢやないの。』とエレーナは遮つた。『二人で一緒に死ぬるのだつて、やはり楽しいものぢやなくつて？ でもいけない、死ぬのは詰まらないわ。生きて行かなくちや。わたしたちは若いんですもの。』

あんた幾つ？ 二十六？』

『二十六。』

『わたし二十よ。まだ先は長いぢやありませんか。さうだ！ あんたはわたしの傍を逃げ出さうとしたわね？ ロシヤ人の戀ひは要らないなんて！ まあ見てらつしやい、わたしをまいて了へるかどうか？ でも、もしあの時わたしがあなたの所へ出かけなかつたら、二人はどうなつてゐたでせうね！』

『エレーナ、僕がなぜ身を引かなきゃならなかつたか、お前知つてる筈だよ。』

『知つてるわ。あんたはわたしに戀ひしたものだから、それでびつくりしたのよ。一體あんたは、わ

「たしの方でも戀ひしてゐる事を、まるで知らなかつたの？」

「エレーナ、誓つて云ふが、全く知らなかつたんだ。」

「彼女は急に思ひがけなく男を接吻した。」

「つまり、あんたのさういふ所が好きなのよ。ぢや、左様なら！」

「もうこれ以上ゆつくり出来ないの？」とインサーロフは尋ねた。

「駄目なのよ、あなた。わたしだつて一人で歸つて行くのは、決して平氣ぢやないことよ。だつて、十五分はとつくに過ぎたんですもの。」彼女はマンチリヤと帽子を身に着けた。「ぢや、あす家へ来て下さいね。いえ、あさつてがいゝわ。きつと堅くなつて了つて、退屈な事でせうけれど、でも仕方がないわ、とにかく會へるから。左様なら。放して頂戴。」インサーロフは最後にもう一度、彼女を抱き緊めた。「あら！ ご覧なさい、あなたはわたしの鎖を壊したぢやないの。まあ、不器用な人ね！ だけど、構はないわ。結局その方がいゝくらゐよ。わたし鍛冶橋クズナシキへ行つて、これを修繕に出すわ。もし聞かれたら、鍛冶橋へ出かけたと云つておくから。」彼女は戸のハンドルに手をかけた。「さういゝ、わたし云ひ忘れてたけれど、ムシユ、タルナトーフスキイは多分二三日の中に、結婚の申し込みをするでせうよ。だれどわたしは……かうしてやるの。」彼女は左手の拇指を鼻の先にあて、残り四本の指を空中でひらくさした。「ぢや、左様なら、また會ひませう。もうわたし道が分かつたから……でも、あなた無駄に時を潰さないやうにしてね……」

エレーナは戸を細目に開けて、外の様子を窺つた後、インサーロフの方を振り返つて、一つうなづいたかと思ふと、するりと戸の蔭へ滑り出た。

インサーロフは、しばらく閉ざされた戸の前に立つて、同じやうに耳を傾けてゐた。下の方で、庭へ通じる戸がぱたんと鳴つた。彼は長椅子に近寄つて、その上に腰を下ろし、片手で目を蔽うた。彼は今までかつて、かういふ氣持ちを経験したことがなかつた。

「俺は一體なんの報いで、あゝいふ愛が得られたんだらう？」と彼は考へた。「これは夢ぢやないだらうか？」

けれど、エレーナが彼の貧しい暗い部屋に残して行つた、ほのかな木屋草の薫りが、彼女の來訪を思ひ起こさせた。それと一緒に、若々しい聲の響きや、軽く若々しい足音や、純な若々しい體の新鮮な温か味が、まだ空中に残つてゐるやうに思はれた。

二四

インサーロフはもう少し、はつきりした情報を待たうと決心したが、それでも出發の準備にかゝつた。それは極めて困難な事だつた。彼一人だけなら、別に何も障碍はなかつた。たゞ旅券だけ請求すればよい。けれど、エレーナの方をどうしたものだらう？ 正式に旅券を手に入れるのは不可能だつた。秘密に彼女と結婚して、それから兩親の前に現れたら……「その時は諦めて、二人を立たしてくるだらう。」

そ
と彼は考へた。「が、もし承知しなかつたら？　それでも俺たちは立つて行かう。けれど、もし両親が警察に訴へたら……もし……いや、それより、なんとか旅券を手に入れるやうに、骨折つて見た方がいい。」

彼は一人の知人に相談して見ようと決心した（勿論、名前は秘密にしておくのである）。それは退職した——でなければ、免職された検事で、すべて秘密な事件に経験の深い老練家だつた。この紳士の住居は餘り遠くなかつた。インサーロフはまる一時間、やくざな辻馬車にゆられながら、彼の住ま居に辿り着いたが、運わるく主人は不在だつた。しかも、歸り道で俄雨に會つて、骨の髄までずぶ濡れになつた。翌朝インサーロフは、かなり激しい頭痛がするのを押して、もう一ど退職検事の所へ出かけた。

退職検事は、胸の張つた水精ニムラを書いた煙草入れを持つて、しきりに嗅ぎ煙草をふん／＼吸ひながら、やはり煙草色をした狡さうな目で客を横目に睨み、注意ぶかく彼の話しを聞いた。聞き終つた後、「事實の叙述をも少し明瞭にして欲しい」と要求した。インサーロフが、詳しい話しをしたがらないのを見て（彼は厭なのを我慢して、検事の所へ來たのである）たゞ何よりまづ『現なま』を用意したがよからうと云ふ、簡単な忠告だけにとどめて、もう一ど出直して貰ひたいと頼んだ。「君にも少し信頼の念が増して、疑惑の念が減じた時にね。」蓋を開けた箱から煙草を嗅ぎながら、彼はかう云ひ添へた。「ところで旅券の方は」と獨ごとのやうに續けた。「人間の仕事だから、例へば他人の名義で出かけても、その婦人がマリヤ・ブレヂーヒナだらのと、カロリーナ・フォーゲルマイエルだらうと、誰も知りやしません。」

インサーロフの胸に嫌惡の念が動いた。けれども、彼は検事に禮を云つて、二三日の中にまた寄ると約束した。

その晩、彼はスターホフ家を訪ねた。アンナ夫人はやさしく出迎へて、彼がすつかり見限つて了つたのを詰つつた。そして、彼の顔色が青いを見て、氣分はどうかと尋ねたりした。主人のニコライは一口も物を云はないで、たゞ物思はしげな、しかも頭から呑んでかゝつたやうな、好奇の色を浮かべながら、じろりと彼を見やつたばかりである。シューピンはそつけない態度を示したが、しかしエレーナはインサーロフを驚かした。

エレーナは彼を待ち設けてゐた。彼女は始めて禮拜堂で媾曳した時と、同じ着物を着てゐたのである。けれど如何にも落ちついた様子で彼を出迎へたばかりでなく、全體に愛想よく振る舞つて、屈托のないうき／＼した顔をしてゐたので、彼女を見た者は誰一人として、この少女の運命が既に決しられてゐるなどとは、夢にも考へることが出来なかつた。そして、幸福な愛を心ひそかに意識する氣持ちが、彼女の輪廓に生き生々した表情を與へ、その動作に軽々とした美を添へてゐるといふ事は、まるで想像にも浮かばなかつたのである。彼女はゾーヤの代りに茶を入れながら、冗談を云つたり、お喋りをしたりしてゐた。彼女は、シューピンが自分を觀察するだらうといふ事も、インサーロフが面を被つて、平氣を装つてゐられないだらうといふ事も、ちゃんと見抜いてゐたので、豫め武装して待つてゐた。彼女の直覺は誤らなかつた。シューピンは彼女から目を放さなかつたし、インサーロフは一晚中おそろしく黙り

込んで、むづかしい顔をしてゐた。エレーナは、すっかり幸福な気持ちになり切つてゐたので、ちよつとからかつて見たくなつた。

「時に、どうですの？」と彼女はだしぬけに尋ねた。「あなたのご計畫は進みまして？」
インサーロフは間違ついた。

「計畫つてなんですか？」と彼は云つた。

「あら、お忘れになりましたの？」相手の顔に笑ひを投げかけながら、彼女はかう答へた。この幸福な笑ひの意味を悟ることが出来たのは、インサーロフばかりであつた。「ほら、例のロシア人に讀ませるブルガリヤ讀本ですの？」

「なんといふ出たら目だ！」ニコライは齒の間から押し出すやうに呟いた。

ゾーヤはピアノに向かつて。エレーナはちよつと心持ち肩をすくめて、歸れと勧めるやうに、インサーロフに戸を目で教へた。それから、彼女は二度ゆつくり間をおいて、指でテーブルに軽く觸つた後、インサーロフの顔を見た。彼は、エレーナが二日後に婿を約束したのだ、と悟つた。彼が悟つたのを見てとると、エレーナはちらりと稲妻のやうに微笑した。インサーロフは立ち上がつて、皆に挨拶し始めた。彼はなんとなく気分がすぐれなかつた。

クルナトーフスキイが姿を現はした。ニコライは跳り上がつて、右手を頭上たかく上げながら、軽く書記長の掌へ落とした。インサーロフは自分の競争者を見るために、なほ幾分か居残つた。エレーナは

そつと狡さうに首を振つた。主人は二人を引き合はす必要を認めなかつた。インサーロフは最後にもう一度、エレーナと目を見かはして歸つて行つた。シューピンはしばらく考へてゐる様子だつたが、やがてクルナトーフスキイを相手に、猛然と議論を始めた。それは自分に何一つわからない、法律上の問題であつた。

その夜インサーロフは一晚中ねむらなかつた。そして翌朝、気分が悪くて堪らなかつた。けれど、彼は書類の整理と手紙の執筆にかゝつた。けれど頭が重くて、こんがらかつてゐた。食事の時刻になつて熱が出た、彼は何一つ口に入れることが出来なかつた、熱は夕刻までにどん／＼昇つて、手足が抜けるやうにだるく、頭の痛みが堪らない程はげしくなつた。インサーロフは、この間エレーナが腰かけた長椅子へ横になつた。彼は考へた。

「俺は當然の罰を受けたのだ。なんだつてあんな古狸のとこへ、のこ／＼出かけて行つたらう？」
彼は睡らうと努めた……けれど病魔はもう彼の全幅を領し盡くしてゐた。血管といふ血管が恐ろしい力で脉を搏ち、血は煮え湯のやうに沸き、思想は鳥のやうに飛び狂つた。彼は無意識状態に落ちた。まるで叩きのめされた者のやうに、あを向けに寝てゐるうちに、突然だれか彼の枕もとで笑つたり、ひそひそ云つたりしてゐるやうな気がした。彼はやつとの思ひで目を開いた。と、燃え盛る蠟燭の光りが、まるで刀のやうにその目を刺した……これは一體なに事だらう？ 彼の前には例の老檢事が、恐ろしく派手なベルシヤ風の寛衣に、白い絹の腰紐といふ、昨日見たと同じ恰好で坐つてゐる……「カロリーナ、